

芦屋市文化財調査報告 第四十八集

摂津・藤ヶ谷古墓

— 藤ヶ谷遺跡第五地点・古代火葬墓の調査 —

二〇〇三年三月

芦屋市教育委員会

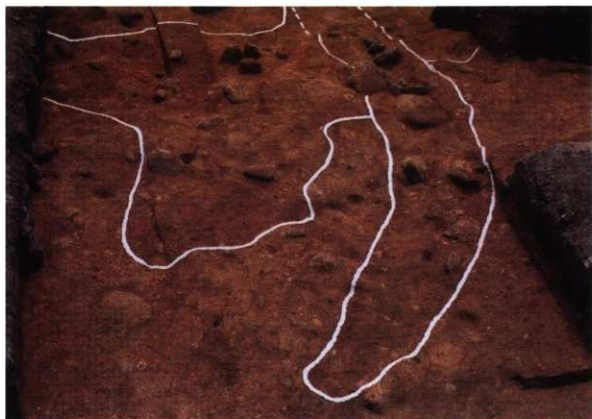
芦屋市文化財調査報告 第48集

摂津・藤ヶ谷古墓

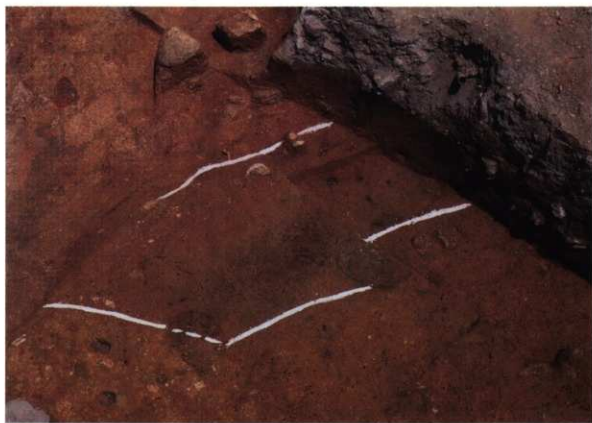
—藤ヶ谷遺跡第5地点・古代火葬墓の調査—

2003年3月

芦屋市教育委員会



F区溝状遺構検出状況（北から）



F区溝状遺構検出状況（南西から）



I 区古墓 2 検出状況（南東から）



E 区火葬灰埋納土壙 4 完掘状況（北から）

序

芦屋神社の存在する表六甲山麓部の高台は、閑静な佇まいの住宅地として開けてきたところです。しかし、戦前は家並も数少なく、山林の繁茂する土地でした。

藤ヶ谷遺跡はそこに長らく眠っていましたが、昭和の初期、地元で熱心に研究を続けてこられた紅野芳雄と吉岡昭という二人の考古学者が、幾度もの踏査を行って発見に至ったものです。

その後、昭和51年に刊行された『芦屋市史』資料篇Ⅰにもこの遺跡は紹介され、広く公刊されている本市や県の文化財地図に登載もされ、一般に周知認識されるようになったものです。

このたび、住宅開発に伴い国庫補助金を得て初めて本格的な発掘調査を実施したところ、奈良時代の高貴な身分の人を火葬した墓が突如出土して、これまでの予想を超えての大きな成果がもたらされました。聞くところによれば、こうした古墓の出現は、阪神地方の市街地では初めてということです。

芦屋の古代の歴史を考える上に欠くことのできない遺構であり、早い時期に出土品の整理事業も遂行されて、ここに正式の報告書として発刊するに至ったものです。ご協力いただきました地権者並びに発掘から本書を成すまでに関わった多くの関係者に対し、厚くお礼を申し上げるとともに、地域文化の継承と発展に本書が末永く活用されることを願ってやみません。

平成 15 年 3 月 31 日

芦屋市教育長 藤 原 周 三

例 言

1. 本書は、兵庫県芦屋市山手町93-4番地に所在する藤ヶ谷遺跡（第5地点）の発掘調査報告書である。発掘調査は、平成13年度国庫補助事業として行った個人住宅建設予定地の事前調査である。書名は出土遺構の特徴と重要性に鑑み、「摂津・藤ヶ谷古墓」とした。
2. 発掘調査は、芦屋市教育委員会が調査主体となり、森岡秀人（芦屋市教育委員会文化財課係長〔当時、現主査〕・学芸員）の指導・助言の下、喜多貞裕（大阪総合文化企画、調査員）と竹村忠洋（芦屋市教育委員会文化財課係員〔当時、現課員〕・学芸員）が発掘担当者となり、平成13年度の国庫補助事業として実施した。
3. 発掘調査期間は平成13年4月26日～6月29日、出土遺物の整理作業期間は、平成13年12月10日～平成14年2月28日である。また、報告書の作成期間は平成14年度の国庫補助事業として行った。
4. 出土遺物の整理作業、実績報告書の作成は、森岡・竹村の指導・助言の下、喜多が担当し、総合文化企画の仲井健司・釜中美歩（調査補助員）、酒井祐介（内業調査員）、広瀬八郎（内業調査員）が作業補助として従事した。報告書の作成は、森岡が中心となって立案・構成・実務のことにあたり、文化財課臨戦の亀井佳代・仲谷由利子・梅本素子・多田尋美・高橋美代子・楠貴大・山田みゆき・山本麻理が一部補助した。
5. 本書の執筆は森岡・竹村・喜多が分担し、森岡が構成・全体編集を担当した。
6. 本文の表現・表記については、森岡が補筆・改変して全体の統一を図るとともに、大幅に加筆した。文責を負うものである。
7. 出土遺物や調査資料（写真類・図面類・その他記録類）については、芦屋市教育委員会三条分室埋蔵文化財整理事務所にて保管している。広く活用されることを望むものである。

本文目次

序

例言

第1章 藤ヶ谷遺跡の発見と研究史瞥見

- | | | |
|--------------------------------|--------|---|
| 1. 猿の宮北方の遺跡と紅野芳雄の活動 | (森岡秀人) | 1 |
| 2. 藤ヶ谷遺跡地帯の認識と吉岡昭の業績について | (森岡) | 3 |
| 3. 現在の藤ヶ谷遺跡と採集資料の価値 | (森岡) | 3 |
| 4. 既述調査の概況 | (森岡) | 5 |

第2章 調査の経緯

- | | | |
|---------------------------|---------|----|
| 1. 調査に至る経緯 | (竹村忠洋) | 7 |
| 2. 調査経過 | | |
| (1) 第1・2次確認調査の方法と結果 | (竹村) | 7 |
| (2) 発掘調査の方法と経過 | (喜多貞裕) | 16 |
| (3) 発掘調査過程の記録 | (喜多) | 18 |
| (4) 整理・報告書作成の経過 | (森岡・喜多) | 21 |

第3章 遺跡景観

- | | | |
|-------------------------|------|----|
| 1. 藤ヶ谷遺跡の地理的位置 | (森岡) | 22 |
| 2. 藤ヶ谷遺跡周辺の考古学的環境 | (森岡) | 26 |

第4章 遺構

- | | | |
|--------------|------|----|
| 1. 層序と遺構の概要 | | |
| (1) 層序 | (喜多) | 31 |
| (2) 遺構 | (喜多) | 31 |
| 2. 小結 | (森岡) | 37 |

第5章 遺物

- | | | |
|--------------|------|----|
| 1. 遺物の概要と観察 | | |
| (1) 土器 | (喜多) | 38 |
| (2) 瓦 | (喜多) | 38 |
| 2. 小結 | (森岡) | 38 |

第6章 発掘調査のまとめ

1. はじめに	(喜多)	40
2. 「墓」に伴う施設について	(喜多)	40
3. おわりに	(喜多)	41
4. 参考文献	(喜多)	42

第7章 周辺古代史からみた藤ヶ谷遺跡における古代火葬墓出現の意義

1. まえがき	(森岡)	43
2. 発掘調査成果の整理と二、三の考証	(森岡)	43
3. 文献史料にみられる古代芦屋地方の氏族動向	(森岡)	45
4. 阪神地方の古墓をめぐって	(森岡)	45
5. 考古学と古代史からみた摂津国菟原郡東部の8世紀史と藤ヶ谷古墓の占める位置	(森岡)	54
6. あとがき	(森岡)	54

引用・参考文献一覧	(森岡)	67
-----------------	------	----

編集後記	(森岡)	
------------	------	--

挿 図 目 次

第1図	芦屋在住の考古学者、吉岡昭の遺影〔昭和7年〕〔森岡1992から〕
第2図	紅野芳雄 著『考古小録』（昭和15年）詳細な遺跡踏査日誌
第3図	戦前採集された藤ヶ谷遺跡の石器〔紅野1940から〕
第4図	吉岡昭 著『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』（和綴本）〔昭和19年〕など
第5図	『新修芦屋市史』資料篇1に収載された藤ヶ谷遺跡の範囲〔村川・森岡1976から〕
第6図	藤ヶ谷遺跡の位置と今回の調査地位置図（1／5000）
第7図	第1・2次確認調査 調査区配置図（1／400）
第8図	第1・2次確認調査 検出遺構配置図（1／100）
第9図	調査区土層断面実測図（1）（1／40）
第10図	調査区土層断面実測図（2）（1／40）
第11図	調査区土層断面実測図（3）（1／40）
第12図	調査区土層断面実測図（4）（1／40）
第13図	5区SX-01遺物出土状態実測図（1／10）
第14図	第1・2次確認調査出土遺物実測図（1／2）
第15図	兵庫県と芦屋市の位置図

- 第16図 藤ヶ谷遺跡（×印）周辺の地形図〔前田1971から・再トレース改変〕
- 第17図 芦屋川・宮川流域地形分類図と藤ヶ谷遺跡の位置（★）1：25000〔辻2002から〕
- 第18図 芦屋市内遺跡分布地図（1：50000）
- 第19図 芦屋神社境内古墳略測図及び石室の旧状（昭和20年代作図・撮影）
- 第20図 笠ヶ塚出土新羅印花文陶質土器
- 第21図 精道村旧字界図
- 第22図 発掘調査 調査区配置図
- 第23図 調査区内地形実測図
- 第24図 遺構配置図
- 第25図 古墓・火葬灰埋納土壌・溝状遺構実測図（1／20・1／40）
- 第26図 遺物実測図（1／4）
- 第27図 藤ヶ谷古墓火葬過程模式復元図
- 第28図 古代墳墓の葬送儀礼（過程）復元と遺物の多様性モデル〔小林1999から〕
- 第29図 大阪府柏原市田辺古墓 A 号墓墓域機能複元図〔小林1999から〕
- 第30図 深江北町遺跡出土木簡（1／2）〔山本・阿部・中谷2002から〕
- 第31図 宝塚市北米谷古墓石櫃実測図〔武藤・橋本1977から〕
- 第32図 北米谷古墓金銅製藏骨器〔武藤・橋本1977から〕
- 第33図 宝塚市平井出土の八稜鏡（部分）〔武藤・橋本1977から〕
- 第34図 勅使川遺跡出土の海獣葡萄鏡（高井悌三郎提供）
- 第35図 宝塚市勅使川窯跡出土土器〔武藤・橋本1977から〕
- 第36図 阿保親王墓の図（「阿保親王事蹟詮議」所載）
（山口県文書館所蔵毛利家文書）〔芦屋市1986〕
- 第37図 毛利家文庫日録五（山口県文書館蔵）
「絵図五」中の「兵庫親王寺藏石帯之図」〔芦屋市1986〕
- 第38図 摂津国兔原郡構成郷・郷心想定図
- 第39図 芦屋廃寺創建期軒瓦（上：面遠鉛歯文縁複八弁蓮華文軒丸瓦 下：均整忍冬唐草文軒平瓦）〔寒川・森岡・竹村2001から〕
- 第40図 芦屋市三条九ノ坪遺跡出土の日本で2番目に古い木簡〔高瀬編1997から〕
- 第41図 芦屋市旭塚古墳石室実測図〔武庫川女子大学考古学研究会1984から〕
- 第42図 芦屋市城山3号墳（終末期多角形墳）墳丘・石室・遺物出土状態〔明元1991bから〕
- 第43図 六甲南麓地域 古代～中世火葬墓・経塚など分布図〔口野1997, 森岡2002 他参照〕
- 第44図 古代摂津国兔原郡位置図
- 第45図 芦屋周辺古代地域像概念図

表 目 次

- 第1表 藤ヶ谷遺跡および周辺関連既応調査一覧表
第2表 摂津国火葬墓検出遺跡一覧表〔海邊1999から〕

巻頭図版目次

- 巻頭図版1 F区溝状遺構検出状況（北から）
F区溝状遺構検出状況（南西から）
巻頭図版2 I区古墓2検出状況（南東から）
E区火葬灰埋納墳4完掘状況（北から）

図 版 目 次

- 図版1 遺跡遠景1（大阪湾上空から芦屋市域全体をのぞむ）〔芦屋市広報課提供〕
図版2 遺跡遠景2（表六甲上空から芦屋市街地をのぞむ）〔芦屋市広報課提供〕
図版3 上 芦屋神社拝殿（南から）
下 芦屋神社境内古墳の現状（南から）
図版4 上 調査地近景（北東から）
下 調査地近景（北西から）
図版5 ① 調査地現況（北東から）
② 調査風景（北西から）
③ 第1トレンチ（南西から）
④ 第1トレンチ北壁土層断面（南から）
⑤ 第2トレンチ（南西から）
⑥ 第2トレンチ東壁土層断面（西から）
⑦ 第3トレンチ（南西から）
⑧ 第3トレンチ東壁土層断面（西から）
図版6 ① 調査風景（南から）
② 調査風景（南東から）
③ 調査区全景（北東から）
④ 調査区全景（南西から）
⑤ 1区西半（南西から）
⑥ 2区（北東から）

- ⑦ 3区西半(北東から)
- ⑧ 4区(南東から)
- 図版7 ① 5区(南東から)
- ② 6区(南西から)
- ③ 7区(北西から)
- ④ SX-01検出風景(南東から)
- ⑤ SX-01検出状況(1)(東から)
- ⑥ SX-01検出状況(2)(東から)
- ⑦ SD-01検出状況(南から)
- ⑧ SD-01土層断面(北から)
- 図版8 確認調査出土遺物
- 図版9 上 発掘調査開始時の現状(北西から)
- 下 発掘調査表土除去作業開始(北東から)
- 図版10 上 F区調査風景(南から)
- 下 F区調査風景(南西から)
- 図版11 上 A・D区完掘状況(東から)
- 下 B・E区完掘状況(北西から)
- 図版12 上 D・F区溝状遺構赤化箇所検出状況(南東から)
- 下 D・F区遺構検出状況(東から)
- 図版13 上 E区火葬灰埋納土壌2検出状況(南から)
- 下 E・F区遺構検出状況 火葬灰埋納土壌2(北東から)
- 図版14 上 D・E区完掘状況(北西から)
- 下 C区完掘状況(北から)
- 図版15 上 B区完掘状況(東から)
- 下 F区赤化箇所検出状況(南から)
- 図版16 上 B区地山面断ち割り状況(南から)
- 下 F区溝状遺構検出状況(南西から)
- 図版17 上 F区溝状遺構完掘状況(東から)
- 下 F区溝状遺構完掘状況(北から)
- 図版18 上 F区溝状遺構完掘状況(北から)
- 下 F区溝状遺構完掘状況(南から)
- 図版19 上 E・G区遺構検出状況遠景(北から)
- 下 E・G区遺構検出状況近景(北から)
- 図版20 上 G区遺構検出状況(北から)
- 下 G・I区遺構検出状況(南から)
- 図版21 上 I区遺構検出状況(東から)

- 図版22 下 E区遺構検出状況(北西から)
上 E・G・H区遺構検出状況(北東から)
- 図版23 下 E区遺構検出状況(北西から)
上 F区溝状遺構完掘状況(北東から)
下 F区溝状遺構完掘状況(北西から)
- 図版24 ① F区溝状遺構完掘状況(北から)
② E区土壌1土層断面(北から)
③ E区土壌4土層断面(北から)
④ E区火葬灰埋納土壌1東壁断面(西から)
⑤ E区火葬灰埋納土壌2完掘状況(北から)
- 図版25 上 G区遺構完掘状況(南から)
下 G・H・I区遺構完掘状況(南東から)
- 図版26 上 E区火葬灰埋納土壌4完掘状況(北から)
下 H区土壌5完掘状況(北から)
- 図版27 上 I区古墓2検出状況(南東から)
下 I区古墓2完掘状況(南から)
- 図版28 上 E区火葬灰埋納土壌2完掘状況(北から)
下 E区火葬灰埋納土壌4完掘状況(北から)
- 図版29 上 E区遺構完掘状況(北から)
下 E・H区遺構完掘状況(東から)
- 図版30 上 E区火葬灰埋納土壌3完掘状況(北東から)
下 E区火葬灰埋納土壌2・4完掘状況(北から)
- 図版31 上 E・G・H・I区地山面完掘状況(東から)
下 E・G区地山面完掘状況(北から)
- 図版32 上 I区地山面完掘状況(東から)
下 I区地山面完掘状況(東から)
- 図版33 ① E・H区地山面検出状況(北から)
② E・H区地山面完掘状況(北から)
③ E・G区地山面完掘状況(南から)
④ I区地山面完掘状況(東から)
- 図版34 上 発掘調査出土遺物(1)
下 発掘調査出土遺物(2)
- 図版35 上 発掘調査出土遺物(3)
下 発掘調査出土遺物(4)
- 図版36 上 発掘調査出土遺物(5)
下 発掘調査出土遺物(6)

1. 猿の宮北方の遺跡と紅野芳雄の活動

兵庫県芦屋市山手町の住宅街に所在する藤ヶ谷遺跡は、昭和40年代の末、『新修芦屋市史』資料篇1が編まれた際、新たに名付けられた遺跡の一つである〔村川・森岡1976〕。当時、全く発掘調査に関するデータがなかったが、戦前にこの付近をくまなく踏査し、考古学的な遺物の採集活動を行った紅野芳雄と吉岡昭の二人の先学の手によって、この遺跡の所在は私たちの知るところとなった（第1図）。

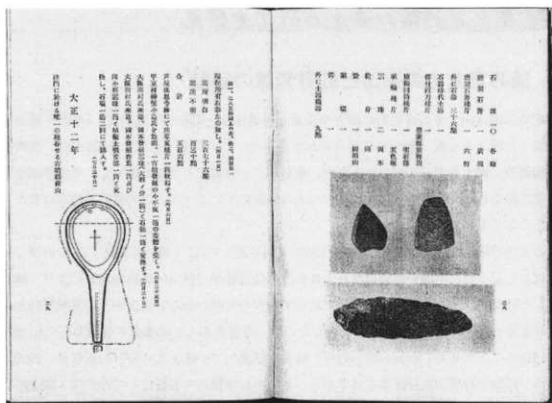
紅野芳雄の著した『考古小録』（紅野1940）（第2図）では、「猿の宮北方」あるいは「猿の宮西北」と記された小池の西畔に所在する石器時代遺跡が〔村川・森岡1976〕により「藤ヶ谷遺跡」と呼称されるようになった遺跡に該当するものと思われる。紅野が「芦屋猿宮西北小池の西畔なる石器時代遺蹟」を初めて踏査したのは、今を去ること80有余年前の大正7年（1918）9月15日のことであり、石器石屑（剥片）47点を採集している。次いで、大正9年（1920）10月27日、同様な石屑52点が採集されており、その中に未製品や石器としての形態・機能の判明する製品はなかったとされる。その後も紅野の踏査は断続的に行われており、大正14年（1925）10月20日、「芦屋猿宮北方小池の西畔」にてサヌカイト片数点を取得している〔紅野1940〕。

石器の製品が初見されるのは、昭和3年（1928）になってからで、10月6日の記録として、「精道村山芦屋猿宮より西北約二町にある小池の西畔に至り、サヌカイト片五十七及び石鏃の先部と思はるるもの一箇を採集せり。」とみえるのをはじめ〔紅野1940〕、同一地点からサヌカイト片21点と共に完形のサヌカイト製打製石鏃2点が採集されており、10月25日の日誌には、本遺跡の評価にもおよび、「今日完全なる二箇の石鏃の発見により、石器時代遺蹟なること確實となる」と述べている。また、昭和4年（1929）の6月16日には、新たにサヌカイト製品3点を取得しており、その他サヌカイト片22点採集の記載をみる。この日に採集されたサヌカイト製の打製品は形態上珍しいタイプのものが含まれていた関係から、『考古小録』P54に写真が掲載されている（第3図）〔紅野1940〕。

注意すべきは、所蔵石器の一覧で、昭和2年（1927）段階では「摂津」に記載はないが、昭



第1図 芦屋に住の考古学者、吉岡昭の遺影（昭和7年）〔森岡1992aから〕



第2図 紅野芳雄 著『考古小録』（昭和15年）詳細な遺跡踏査日誌

和5年（1930）段階の摂津の項では、「東芦屋 八」が所蔵石器内訳にのぼっている。石器の採集記録はその後も続き、昭和5年（1930）5月7日に打製石鏃1点、サヌカイト片9点、9月12日に打製石鏃2点、サヌカイト片8点、11月29日に打製石鏃2点、サヌカイト片10点、昭和6年（1931）10月1日に打製石鏃2点、サヌカイト片15点、昭和7年（1932）3月10日、打製石鏃1点、サヌカイト片2点などの記録がとどめられると共に、昭和7年3月10日の記述には、「其れより北に接する赤土の露出せる山に登り、完全なる磨り石一箇及び無数の彌生式土器片十數片を採集す。祝部土器破片も少量散在せり」とみえ、須恵器や弥生土器片の存在が注目される。土器片の採集はこれが初見になるかもしれない。

昭和10年（1935）には、「敵石」と称される石器1点、サヌカイト片3点が採集されており、これが本遺跡に関わる紅野の記述の最後である〔紅野1940〕。紅野芳雄は、その3年後の昭和13年4月25日享年僅か46歳にて病没している。なお、紅野のこうした業績は西宮市教育委員会が近年、特別展として紹介し、広く顕彰している〔西宮市立郷土資料館1999〕。

当時、精道村東芦屋に所在した「狼の宮 西北約二町」の石器時代遺跡は、相殿の二として、猿丸太夫を祀る芦屋神社が通称「狼の宮」と称されていることからして、現在の芦屋神社の北西方約200～250m付近

第3図 戦前採集された藤ヶ谷遺跡の石器
〔紅野1940から〕

の地を指すことが明らかである。紅野の遺著『考古小録』[紅野1940]の関係分布地図には、同地点に「弥生式遺蹟」として×印が落とされており、小字名では「藤ヶ谷」「笠ヶ塚」が該当する。藤ヶ谷の周辺地域の小字名は、東に「間谷」、西に「津谷」があって、いずれも樹枝状に入り組んだ谷地形に由来するものと考えられる。(森岡秀人)

2. 藤ヶ谷遺跡地帯の認識と吉岡昭の業績について

芦屋在住の考古学少年吉岡昭は、昭和19年(1944)に弱冠19歳で『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』を著し、自ら作成した「芦屋市遺跡地帯地図」を添付している(第4図)。

これは市内だけを対象とした遺跡分布地図としては初出のものであろう。その中で、吉岡は「藤ヶ谷遺跡地帯」を明示し、「○土器出土地」と「△石鏃出土地」を注記している[吉岡1944]。

このように、「藤ヶ谷遺跡」の命名[村川・森岡1976]は、[吉岡1944]の記載をより重視したものであり、位置関係や重なりについても、芦屋神社の南側一帯を含むことからして、紅野の注目してきた「猿の宮西北二町」の遺跡とはまた別の性格を有しているように思われる。ただし、この段階では藤ヶ谷遺跡の認識は一部にとどまるようである。(森岡)



本市に寄贈された吉岡昭考古資料の一部(昭和19年頃の著作と地図)



『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』の38-39頁(芦屋出土石鏃類の紹介)

第4図 吉岡昭 著『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』[和綴本](昭和19年)など

3. 現在の藤ヶ谷遺跡と採集資料の価値

以上の先学の2文献を熟覧し、昭和50年(1975)頃、現地を何度も踏査して藤ヶ谷遺跡の範囲をある程度推定したのが『新修芦屋市史』の「第2章弥生時代」に収載された1万分の1分布位置図である[村川・森岡1976](第5図)。その後に刊行された遺跡分布地図および地名表の一連の普及・啓発書[森岡編1980、森岡・和田編1986、森岡・白谷・和田編1993、森岡・竹村編2001]は、それを根拠として遺跡の周知と保護施策を展開するため編まれたものである。

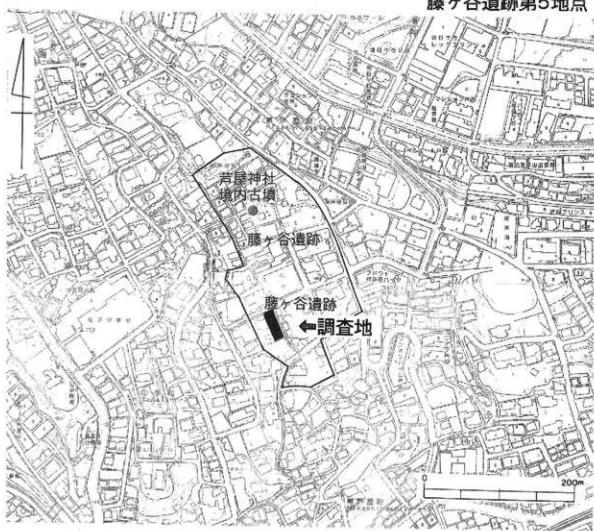


藤ヶ谷遺跡位置図 (1/5000) <破線は遺跡推定範囲を示す。縮尺は1/10000を拡大>

第5図 『新修芦屋市史』資料篇1に収載された藤ヶ谷遺跡の範囲〔村川・森岡1976から〕

しかし、藤ヶ谷遺跡の内容については、その関連資料がすべて採集品であり、不明な点が多岐にわたる。〔村川・森岡1976〕では、出土遺物については、それまでの情報の整理を経て「弥生式土器・石鐮の他、少量の敵石・凹石・磨石（いずれも磨製品）・石錐の未成品などがある。サヌカイト片は他の遺跡同様多い。弥生式土器片はすべて無文であり、帰属すべき様式は不明である。」と総括し、弥生遺跡としての位置づけを保っているが、一方においては「笠ヶ塚群集墳」〔勇・藤岡1976〕や天神山古墳群〔森岡2002a〕と重複しており、周辺では須恵器片の採集もいく度か伝えられている点は見逃せない。芦屋川と宮川との間の六甲山山地麓部の台地上には、かつて古墳時代後期の群集墳があったことは確実であり、紅野芳雄は7基〔紅野1940〕、吉岡昭は20数基〔吉岡1944〕の古墳の存在を確認している〔勇・藤岡1976〕。現存唯一の芦屋神社境内古墳（横穴式石室内蔵）は、社叢の中にあつて一見あたかも単独墳のごとくみえもするが、実際は群集墳中の一墳である公算も高いのである（第6図、図版3）。（森岡）

藤ヶ谷遺跡第5地点



第6図 藤ヶ谷遺跡の位置と今回の調査地位置図 (1/5000)

4. 既応調査の概況

本章最終節では、これまでに実施された藤ヶ谷遺跡に関する既応調査について、過去の記録をたよりに概観しておきたい(第1表)。

藤ヶ谷遺跡およびその周辺についての埋蔵文化財調査は、昭和56年度から始まっている。平成4年度までの開発行為については、ほとんど工事立会の取り扱いとなっているが、平成8年度以降は確認調査の対象となったものが多い。調査地域は、関連地域を含めると、朝日ヶ丘町・東芦屋町・山手町の3町にわたるが、調査件数は芦屋川右岸域の遺跡群に比べると、格段に少ない。なお、地点番号は埋蔵文化財包蔵地分布地図〔森岡・和田編1986、森岡・白谷・和田編1993、森岡・竹村編2001〕の遺跡範囲内についてのみとっている。

本遺跡の範囲に関しては、第5地点の発掘調査成果を重視し、データを更新させつつ、今後とも精査と見直しが必要である。

(森岡)

年度別	調査地	地点名	開発内容	敷地面積	調査年月日	調査所見	調査種別
S56-1	朝日ヶ丘町467番地	北限	共同住宅	3226.00 ㎡	1981/7/16	工事立会、包含層なし。遺物の表面散布もみられない。	工事立会
S59-7	東芦屋町241番地	周辺	共同住宅	2800.00 ㎡	1984/6/15	工事立会。遺物の表面散布および包含層は認められなかった。	工事立会
H2-36	東芦屋町142番地1	南限	共同住宅・鉄骨3階建	102.00 ㎡	1990/12/3	現表土下20cmに洪積層存在。包含層なし。遺物表面散布なし。	工事立会
H4-22	東芦屋町27番地13	西限	専用住宅・鉄筋2階地下1階建	615.34 ㎡	1992/10/5	遺物包含層なし。遺物の表面散布もない。工事支障なしと判断。本遺跡の範囲外か。	工事立会
H8-49	東芦屋町1番地9	周辺	共同住宅・鉄筋	1390.00 ㎡	1996/5/14	分布調査により、横穴式石室を主体部とする群衆墳を確認。芦屋神社境内古墳と同一グループか。	試掘・分布・本調査へ
H8-141	東芦屋町232番地	1地点	店舗付共同住宅・鉄筋5階建	991.10 ㎡	1996/8/19	2ヶ所の試掘坑を掘削（人力）。1tr.については、現表土～85cmまで盛土・周知石（近代の欠けり）を含み、付近に石垣があったものと推定。以下は地山であった。（2tr.も同様の所見を得た。）	試掘・立会指導・工事立会
H8-219	東芦屋町27番地14, 15, 16	周辺	個人・木造2階建	1107.28 ㎡	1996/11/5	藤ヶ谷遺跡は弥生遺跡として知られるが、散布地であるため表面散布と基礎部分を中心に観察。包含層の遺存はなかった。散布もなし。	工事立会
H11-38	東芦屋町228番地	2地点	個人住宅・鉄筋3階建	827.60 ㎡	1999/8/31	2.5Y5/4FP～VCS 極微粒砂から成る盛土のみ。	試掘
H12-34	山手町162-1番地の一部	周辺	宅地造成	733.80 ㎡	2000/8/30	造成工事（斜面地を深さ3mまでカット）を立会。表土・段丘礫層を確認。遺物はまったく確認せず。	工事立会
H12-115	山手町93-4番地	5地点	個人住宅・木造2階建	800.10 ㎡	2001/2/13	トレンチ3本設定。第3tr.第4層において須恵器片2点確認。深度60～80cm。第2次確認調査が必要。	試掘
H12-130	東芦屋町232, 233, 234, 235番地	6地点	個人住宅・鉄筋2階・地下1階建	978.56 ㎡	2001/2/27	トレンチ1本設定。淡青灰色粘土層などを確認。遺構・遺物は全く確認されなかった。	試掘
H13-10	山手町97, 93-3, 96番地	7地点	共同住宅・鉄筋3階・地下1階建	2765.95 ㎡	2001/5/7 ～ 2001/5/9	トレンチ6本設定。表土・盛土・粘質土・段丘礫層を確認。遺構・遺物は確認されなかった。	試掘
H13-23	山手町93-2番地	4地点	個人住宅・木造・鉄筋3階・地下1階建	691.50 ㎡	2001/6/12	1tr. (3×1.3m)、2tr. (3×1.1m) 設定。深度86cmまで確認。盛土・旧表土・段丘礫層確認。	試掘
H13-40	山手町93-2番地	4地点	個人住宅・木造・鉄筋3階・地下1階建	691.50 ㎡	2001/7/16	6/12試掘の地点。切土工事中立会。遺物確認されず。段丘礫層など観察。遺構もない。ただし、周辺での精査は今後も必要。	工事立会
H13-102	東芦屋町27-14, 15, 16	隣接地	宅地造成	1,084.89 ㎡	2002/2/14	切土掘削工事中に立会。斜面より上部分高さ3mの土層断面で段丘礫層と大阪層群を確認。遺物・遺構はなし。	工事立会

第1表 藤ヶ谷遺跡および周辺関連既応調査一覧表

2 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

当該地（敷地面積800.10㎡）（第6図、図版4）において、木造2階建個人住宅の新築計画が進捗したが、周知の埋蔵文化財包蔵地である藤ヶ谷遺跡の分布範囲内であることから、文化財保護法第57条の2第1項に基づく届出が、平成13年1月15日に地権者西田守男氏より本市教育委員会に提出され、これを受理した。

計画建物の基礎工事によって遺構や遺物包含層が損壊を受ける可能性があったため、本市教育委員会は、文化財課係員竹村忠洋（学芸員）を調査担当者として、平成13年2月13日に遺構・遺物包含層の有無および包含層深度と工事深度との関係を調べるために確認調査を実施した。その結果、現地表下60～80cmの深さより須恵器片を含む遺物包含層が検出された。調査結果については、土層図や遺物所見を中心としたカルテを作成した。これを第1次確認調査と呼ぶ。

工事計画によって当遺物包含層が損壊を受けることが確認された。しかし、遺物出土点数が少量であることから、改めて遺物包含層の広がりや遺構の有無を確認し、本発掘調査の必要性を判断する根拠が不可欠となった。そこで、第2次確認調査を実施することにした。この件で地権者代理と協議を進め、平成13年4月9日から4月13日までの調査期間とし、文化財課係員竹村忠洋（学芸員）を調査担当者として、第2次確認調査が実施された。（竹村忠洋）

2. 調査経過

(1) 第1・2次確認調査の方法と結果

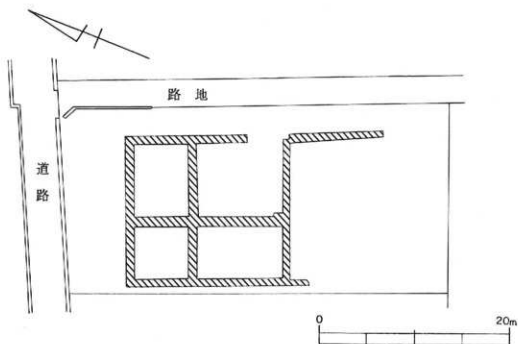
調査対象地内の遺構残存状況や調査遺構面数確認のため、平成13年2月13日に確認調査を実施した。対象地域内に3本の試掘トレンチを設定し、掘削後観察・記録などを行った（図版5）。その結果、前述したように第3トレンチの第4層において須恵器小片2点を確認、遺存深度は現地表下60～80cmを計測した。

これを受けて実施された第2次確認調査では、部分的に攪乱があるものの、遺物包含層を1層、遺構面を1面確認することができた。遺物は、古墳時代後期の須恵器（甕）が出土した（図版6～8）。この調査には、山内芳子・竹林裕一・竹内里奈が参加協力した。

① 発掘の方法と経過

第2次確認調査では、敷地全体に「田」字状にトレンチを設定した（第7図）。調査深度は、工事掘削深度である設計GL-60cmに合わせた。トレンチは幅80cmで7本設定し、各トレンチについて1～7区と呼称した。調査面積は合計82.94㎡を測る。

掘削は埋没古墳の存在が予測されたことと、調査深度が浅いことから、表土から人力によって掘削する計画となった。しかし、調査初日に人力で掘削したところ、表土・盛土が非常に硬



第7図 第1・2次確認調査 調査区配置図 (1/400)

く締まっており、人力掘削のみでは調査期間内に調査を終了することができないと判断し、2日目より重機を導入した。機械により表土・盛土・攪乱土を除去し、堆積土からは遺物に気をつけながら人力で掘削した。

基準高は、本市道路課設置のマンホール上水準点 (T.P. 80.01m) よりひいた。

記録は、調査区平面図を平板実測により縮尺1/100で作成し、土層断面は1～7区の調査区壁を縮尺1/20で実測した。さらに、遺構検出状況を縮尺1/5で実測した。写真撮影には35mmのリバーサル・カラーフィルムを使用した。

写真・図面による記録終了後、重機でトレンチを埋め戻し、現状復旧した。

② 調査日誌抄

平成13 (2001) 年

4月9日 (月) 晴れ

調査区を設定する。器材を搬入する。人力により掘削する。表土が硬く締まっており、なかなか掘削が進まない。明日から重機を搬入することにする。

4月10日 (火) 晴れ

重機により、掘削する。人力により、堆積土を掘削する。2区中央と5区南部より須恵器が確認される。

4月11日 (水) 晴れ

重機により、掘削する。人力により、堆積土を掘削する。5区南部で土器棺を検出する。調査区壁土層と遺構を写真撮影する。調査区壁の土層断面を1/20で実測する。

4月12日(木) 晴れ

調査区全景および調査区壁土層を写真撮影する。調査区を縮尺1/100で、遺構および調査区壁の土層断面を縮尺1/20で実測する。

4月13日(金) 晴れ

土器棺の出土状況を実測し、取り上げる。調査区壁を写真撮影する。重機により調査区を埋め戻す。器材を撤収する。発掘調査を完了する。

③ 層序

各調査区の土層断面を実測し、土層を観察・記録した。土層の観察所見は以下のとおりである。土層の記記は、土層番号・土層名・色調・粒度・包含物などの順に記し、最後にその土層の性格を述べた。色調は『新版標準土色帖1999年版』(農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修)による表記も併用し、客観化を図った。

- 第1層 表土・盛土・攪乱土
- 第2層 灰黄色粘性砂質土層 10YR6/6明黄褐。極細砂～細砂。やや粘性有り。土壤層。
- 第3層 黄色粘質土層 10YR7/6明黄褐。粘土～細砂。粘性有り。
- 第4層 淡灰黄色砂質土層 10YR8/3浅黄橙。極細砂～細砂。東側へ行くほど粘性強まる。
近世～近代?の堆積層。
- 第5層 黄褐色粘性砂質土層 10YR6/8明黄褐。粘土～極細砂。径1cm以下の褐色粘土ブロックを多く含む。
- 第6層 灰黄色砂質土層 10YR6/6明黄褐。細砂。近世～近代?の堆積層。
- 第7層 淡黄色粘性砂質土層 10YR6/4にぶい黄橙。粘土～細砂。径1cm以下のマンガン粒を多く含む。粘性強い。土壤化している。
- 第8層 暗黄色粘土層 2.5Y7/6明黄褐。粘土。粘性強い。径10cm程度の礫を多く含む。しまりやや悪い。近世～近代?の堆積層。
- 第9層 黄色粘性砂質土層 10YR7/6明黄褐。極細砂～細砂。第3層に近い。
- 第10層 黄色粘性砂質土層 10YR7/6明黄褐。極細砂～細砂。一部炭化物を含む。第3層(もしくは2層)に対応すると考える。
- 第11層 暗黄橙色粘質土層 10YR5/8黄橙。粘土・細砂。粘土はブロック状に混じる。地山が近いので、地山起源のものが多く含まれている。粘性有り。
- 第12層 暗黄色砂質土層 10YR6/6明黄褐。極細砂～細砂。やや粘性有り。遺構埋土。
- 第13層 暗黄色粘性砂質土層 10YR5/6黄褐。粘土～極細砂。やや粘性有り。石を据えた遺構の埋土とも考えられるが、石の周りが汚れた段丘礫層かもしれない。
- 第14層 黄色粘質土層 10YR7/8黄橙。粘土・細砂。粘性有り。褐色粒を含む。溝ベース層。径10cm程度の礫を含んでいる。
- 第15層 暗黄色砂質土層 10YR6/4にぶい黄橙。極細砂～細砂。溝埋土。
- 第16層 暗黄色粘性砂質土層 10YR6/6明黄褐。極細砂～細砂。須恵器含む。溝の埋土。

- 第17層 暗黄色粘質土層 10YR6/6明黄褐。粘土・細砂。粘性強い。
第18層 暗黄橙色粘質土層 10YR5/8黄褐。粘土・細砂。粗砂を含む。
第19層 暗黄色砂質土層 10YR6/6明黄褐。極細砂～細砂。溝のベース層。
第20層 暗黄色粘質土層 10YR6/6明黄褐。粘土・細砂。粘性強い。
地山層 黄橙色粘性砂質土層 10YR7/8黄橙。粘土・細砂。しまり非常によい。径30cm前後の花崗岩礫を含む。ラミナみられる。段丘礫層。

④ 検出遺構（第8～13図）

2区東半より溝 SD-01が検出された。南北方向に走っている。幅90cm、深さ10cmを測る（図版7）。古墳の周溝とも考えられるが、調査範囲が狭小であるため、その性格は不明である。埋土から須恵器・土師器の細片が出土している。

5区南部より土器棺 SX-01が出土した。遺構全体を調査できていないため、掘形の形態は不明である。土器棺には須恵器甕が用いられていた。破碎された甕の破片を敷いた状態で検出された。復元すると、甕の体部には焼成後の穿孔が認められた（図版8）。

⑤ 出土遺物

コンテナ1箱分程度の遺物が出土した（第14図、図版8）。

遺物は、5区南半 SX-01から須恵器甕1個体（1）、2区東半溝 SD-01付近から須恵器甕の破片1点（2）、SD-01埋土から土師器の細片1点が出土した。

SX-01出土土器

1は、須恵器甕である。破片となって出土したが、接合によって、ほぼ完形に復元された。口径14.5cm、体部最大径23.8cm、器高22.05cmを測り、甕としては中型である（第14図1）。

口縁部は、外面上端が稜線をもって屈曲し、直立する。口縁部端面は、内側に突出し、凹面を形成している。口縁部の調整は、内外面ともにロクロによる強い回転ナデである。体部は球形を呈するが、全体に少し歪んでいる。体部下半に接合痕が1条認められる。体部外面はタタキの後にカキ目を施し、内面には外面のタタキに対応する同心円当て具痕跡が残る。また、当て具痕跡の上には回転運動によってついた沈線状の痕跡1条が認められるが、外面のカキ目を施すロクロ回転時のものであろう。

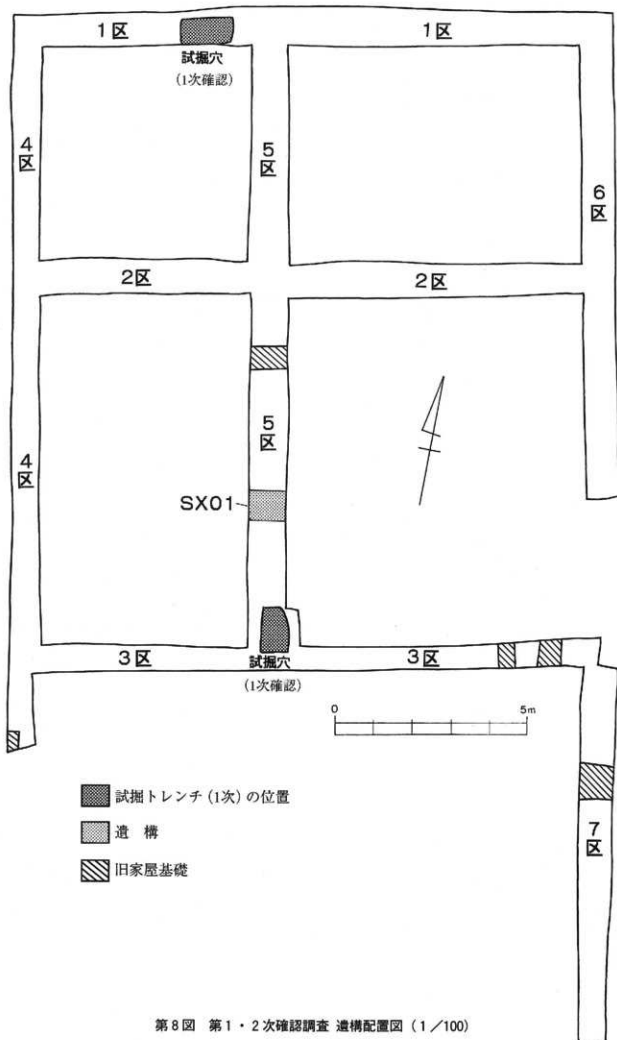
底部は焼成後に穿孔されている。孔は円形を呈し、径約8.5cmを測る。また、肩部にも径9cm程度の穿孔が認められ、外面からの打撃により内面が大きく剥離している。

焼成は良好で、色調は内外面および断面が淡黄灰色を呈する。

時期については、口縁部端面が凹面であることと、体部全体にカキ目調整が丁寧に施されることなどから、8世紀前半に収まるものと考えられる（図版8A～C・E）。

SD-01出土土器

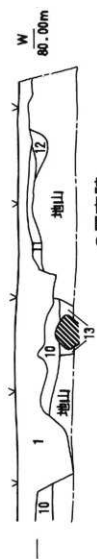
2は掘削時に SD-01付近から出土した須恵器片である（第14図2）。出土位置から遺構に伴うものと推測される。甕の体部と考えられ、外面にはタタキが施され、内面は同心円状の当て具痕が残る。焼成は良好で硬質に焼きあがっており、色調は内外面および断面が淡灰色を呈



第8図 第1・2次確認調査 遺構配置図 (1/100)

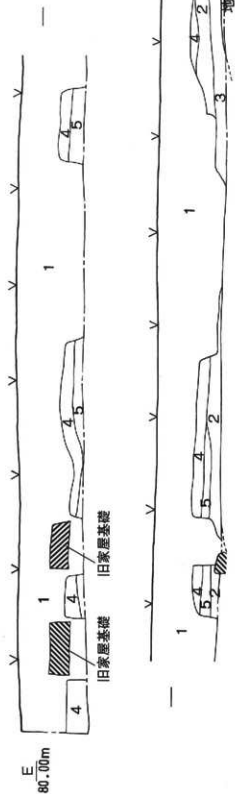


1区北壁

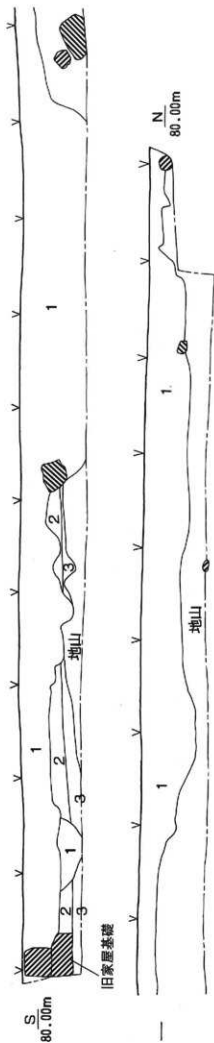


2区南壁

第9图 調査区土層断面実測図 (1) (1/40)



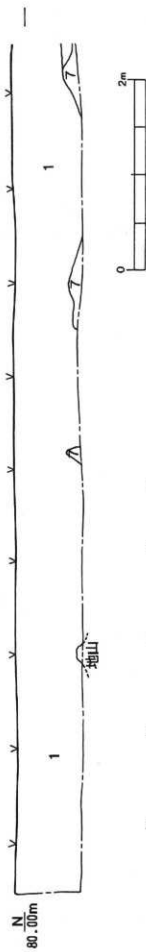
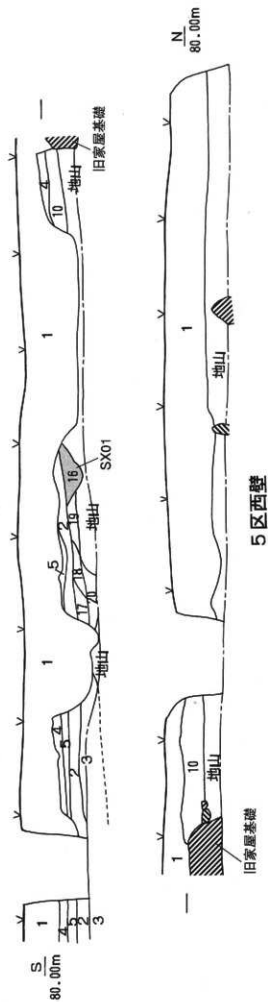
3区南壁



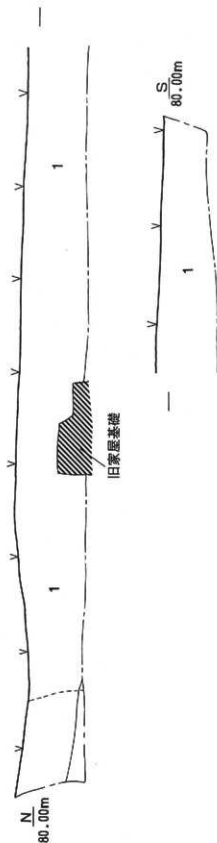
4区西壁



第10図 調査区土層断面実測図 (2) (1/40)



第11図 調査区土層断面実測図 (3) (1/40)



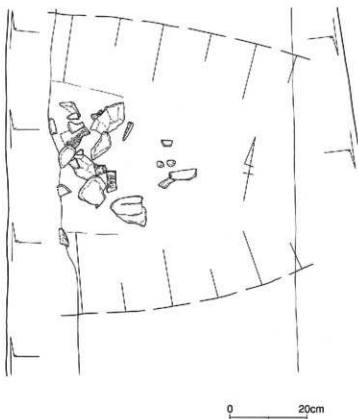
7区東壁



- 1 赤土・盛土・礫土
- 2 灰黄色粘土質砂質土層 10YR5/6 明黄褐、極細砂～細砂、やや粘性有り、土層肥。
- 3 黄褐色粘土層 10YR7/8 明黄褐、粘土～細砂、粘性有り。
- 4 淡灰黄色砂質土層 10YR6/3 淡黄褐、粘細砂～細砂、重層へ行くほど粘性減くなる。近重～近代？
- 5 黄褐色粘性砂質土層 10YR5/8 明黄褐、粘土～極細砂、φ 1 cm 以下の褐色粘土ブロックを多く含む。
- 6 灰黄色砂土層 10YR5/6 明黄褐、細砂、近重～近代？
- 7 淡黄色粘性砂質土層 10YR6/4 について黄褐、粘土～細砂、φ 1 cm 以下のマンガン粒を多く含む、粘性強い、土層化している。
- 8 暗黄色粘土層 2.6Y7/6 明黄褐、粘土、粘性強い、φ 10 cm 程度の礫を多く含む、しまりやや強い、近重～近代？
- 9 黄色粘性砂質土層 10YR7/6 明黄褐、極細砂～細砂、3層に近い。
- 10 黄色粘土砂質土層 10YR7/8 明黄褐、極細砂～細砂、一部炭化物を含む、3層（もしくは2層）に材応ずると考える。

- 11 暗黄褐色粘質土層 10YR5/8 黄褐、粘土～細砂、粘土はブロック状にまじる。地山が近いため、地山起源のものも多く含まれている。粘土有り。
 - 12 暗黄色粘質土層 10YR6/8 明黄褐、極細砂～細砂、やや粘性有り、濃緑埋土。
 - 13 暗黄色粘性砂質土層 10YR6/6 黄褐、粘土～極細砂、やや粘性有り。石を散らした濃緑の埋土とも考えられるが、石の罫りが汚れた段丘礫層かも知れない。
 - 14 灰色粘土層 10YR7/8 黄褐、粘土・細砂、粘性有り、電色飯を含む、濃ベース層、φ 10 cm 程度の礫を含んでいる。
 - 15 暗黄色砂質土層 10YR6/4 について黄褐、極細砂～細砂、濃埋土。
 - 16 暗黄色粘性砂質土層 10YR6/6 明黄褐、極細砂～細砂、黄土層含む、濃 (SX-01) の埋土。
 - 17 暗黄色粘質土層 10YR6/6 明黄褐、粘土・細砂、粘性強い。
 - 18 暗黄色粘質土層 10YR5/6 黄褐、粘土・細砂、粗砂を含む。
 - 19 暗黄色粘質土層 10YR6/6 明黄褐、極細砂～細砂、濃のベース層。
 - 20 暗黄色粘質土層 10YR5/6 明黄褐、粘土・細砂、粘性強い。
- 地山層 黄褐色粘性砂質土層 10YR7/8 黄褐、粘土・細砂、しまり非常によい、φ 30 cm 前後の花崗岩礫を含む。ラミナみられる。段丘礫層。

第12図 調査区土層断面実測図 (4) (1/40)



第13図 5区 SX-01遺物出土状態実測図 (1/10)

が検出された。当遺跡と分布範囲と重複して天神山古墳群が分布しているが、調査結果を受けて、今後は弥生時代の遺構と古墳時代以降の遺構が確認される可能性が高くなった。とくに天神山古墳群に属する削平を受けた古墳の周濠などが検出されることが予測される。今回の確認調査で検出された溝も古墳の周溝の一部である可能性が考えられる。

以上、第2次確認調査を実施したことによって、当該敷地に古墳時代後期以降の遺構と遺物包含層が包蔵されていることが確認された。今後の取り扱いとしては、計画建物の建設工事によって損壊を受ける範囲と深度については、埋蔵文化財の記録保存を行うために、工事着手前に本発掘調査が必要と判断した。

(竹村)

(2) 発掘調査の方法と経過

本地点は、前述されている確認調査において古墳時代後期以降の須恵器や遺物包含層が遺存することが確認されたため、専用住宅建設に伴う本発掘調査を平成13年4月26日から平成13年6月8日まで実施した。この事業は、平成13年度の国庫補助事業である(図版9)。

調査区は、基本的に遺構に影響が及ぶ基礎部分の約250㎡を対象に設定し、A~1区とした(第22図)。遺構を検出した地区では、調査区の拡張や旧地形を確認するため、地山面(おそらく大阪層群上面)までの調査を行った。

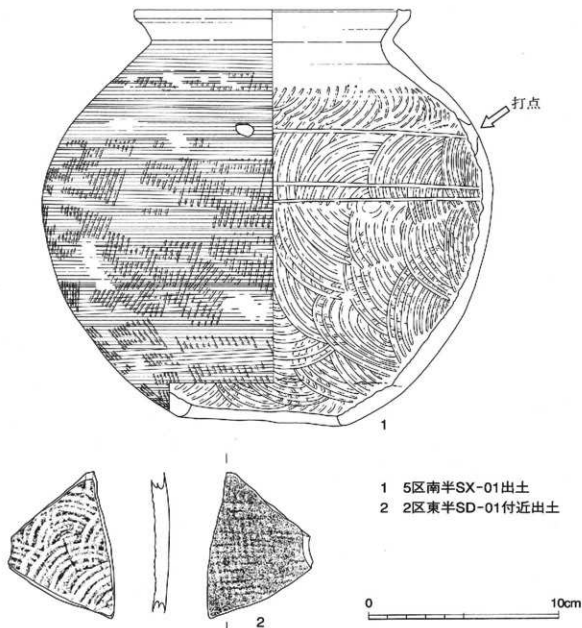
する。時期については、甕体部の破片のため断定できないが、他の出土土器の時期から8世紀頃と推察される(図版8D)。

SD-01埋土から出土した土師器は、細片のため図化できなかった。器種・時期等は不明である。

⑥ まとめと遺跡の取り扱い

今回の調査では、古墳時代後期の溝と土器棺が検出された。当遺跡は、戦前から遺物散布地として周知されていたが、戦後の宅地開発によって埋蔵文化財の多くは破壊され、その残存状況は全く把握されていない。

そのような情勢下、今回の調査は、藤ヶ谷遺跡において発掘調査によって初めて遺構・遺物



第14図 第1・2次確認調査出土遺物実測図 (1/2)

発掘調査は、平成13年4月26日より発掘調査現場内およびその周辺の安全対策や機材の搬入、事務所の設置、備品の配備などを行い、本格的な発掘調査は、原因者の要望もあり、ゴールデンウィーク明けの5月7日より開始した。まず、調査区の北西側（A区）より機械掘削により表土・盛土の除去を行った。A・B・C・D区では後世の削平が著しく、遺構を確認することができなかった。E・F・H・I区では、遺物包含層（第5層）を確認した。遺物包含層（第5層）を人力掘削で取り除いた後、遺構面（第6層上面）において、遺構検出を行ったところ、溝跡及びその周辺部の地山面において赤く火化している範囲（火葬施設）・古墓（埋葬施設）・火葬灰埋納土壌等の一連の遺構を確認することができた。遺構を完掘し、各種実測作業を行った後、第6層を人力掘削で取り除き、地山面（第7層上面）における遺物・遺構の有無を確認

し、各種実測作業の後、すべての調査を終え、機械により埋め戻し作業を行い、平成13年6月8日に現地の調査を終了した。
(喜多貞裕)

(3) 発掘調査過程の記録

発掘調査は、芦屋市教育委員会文化財課係長森岡秀人の指導・助言の下、学芸員竹村忠洋と株式会社総合文化企画喜多貞裕を担当者として、平成13年4月26日から平成13年6月8日までの期間実施した。また、同年6月9日以降は若干の応急整理期間をもった。

以下、担当者の一人、喜多の調査日誌を抄録し、経過にかえたい。

発掘調査日誌抄

平成13年4月26日(木) 天候：晴れ

本日より藤ヶ谷遺跡(第5地点)の発掘調査を開始する。まず、原因者(西川氏)・設計者(アメリカ屋の百々氏)・芦屋市教育委員会文化財課 西川課長・間地工業(沖井氏)と喜多の五者により、調査の範囲、調査における掘削深度の確認及び植栽の伐採箇所について再度現地で協議する。5月7日より機械掘削の開始とする。本日は、発掘調査機材の搬入、ハウス・トイレの搬入及び、現場内外の安全対策用フェンスの設置を行った。同時に植栽の伐採作業も並行して行った。

平成13年4月27日(金) 天候：晴れ

昨日より引き続き、ハウス・トイレの設置及び現場内外の安全対策用フェンスの設置、植栽の伐採作業を行った。

平成13年5月1日(火) 天候：晴れ

連休中の強風のため、安全対策用のフェンスが倒れており、補強し設置しなおす。植栽の伐採作業を行い、伐採した木や葉を処理し、搬出作業を行う。

平成13年5月2日(水) 天候：晴れ

植栽の伐採作業を行い、伐採した木や葉を処理し、搬出作業を行う。調査範囲の伐採が終了する。調査区を設定し、連休明けの5月7日より本格的な発掘調査を再開することとする。

平成13年5月7日(月) 天候：晴れ

本日より、本格的な発掘調査を再開する。機械掘削を調査区北西隅(A区)より開始する。機械掘削を終えた箇所から第4層の人力掘削作業を行ったところ、第7層(地山面)を検出した。

平成13年5月8日(火) 天候：雨のち曇り

朝からの降雨のため、発掘調査を中止とする。伐採した木や葉を処理し、また、遺構面の養生のため、排水溝・水中ポンプの設置作業もあわせて行う。

平成13年5月9日(水) 天候：晴れ

前日の降雨のため、水抜き作業から開始する。機械掘削は、A～F区順次行い終了する。B

・C・D区の第4層の人力掘削を行い地山面の検出をし、遺構検出を行ったところ、各区において、遺構は、検出されなかった。また、調査区断面の精査も併せ行う。

平成13年5月10日(木) 天候：晴れ

E・F区の第4層の人力掘削を行い、A～F区の地山面および第5層上面における遺構の有無を確認するために精査を行う。遺構は、検出されなかった。

平成13年5月11日(金) 天候：晴れ

前日、第5層(包含層)の広がりをも面的に確認したC・D・E・F区の第5層(遺物包含層)の人力掘削を順次開始する。調査区を縮尺1/100で平板測量、C区東壁(Aライン)の断面実測を縮尺1/20で開始する。

平成13年5月14日(月) 天候：晴れ時々曇り

先週の金曜日に引き続き、第5層(遺物包含層)人力掘削が終了した箇所から、遺構検出を行う。D・F区で溝状遺構を検出し、E区で焼土・炭化物を含む土壌を検出する。また、引き続き、Aラインの断面図実測および、D・E区東壁(Bライン)を縮尺1/20で実測を開始する。

平成13年5月15日(火) 天候：晴れのち曇り

前日に検出した遺構の写真撮影のために、A～F区の清掃作業から始める。清掃作業終了後、遺構検出状況の写真撮影を行う。A・B・C区の平面図実測を行うために、調査区を2メートルメッシュで割り付け作業を行い、A・B区の平面図実測を縮尺1/20で開始する。西川課長・森岡係長へ調査の進行状況等を報告する。後日、森岡係長が視察に来るとのこと。

平成13年5月16日(水) 天候：晴れ

遺構が検出されなかったA・B区の第7層(地山面)の断ち割り作業を行う。前日に引き続き、平面図の実測、レベル入れの作業も行う。

平成13年5月17日(木) 天候：晴れ

前日と同様に、遺構が検出されなかったD・E区の第7層(地山面)の断ち割り作業を行う。午後、西川課長・森岡係長が現場視察と指導にくる。遺構の検出状況や第6層(遺構面)の広がりを確認するために、調査区の拡張、第5層の掘削に伴う調査深度の変更の必要性について協議する。明日、アメリカ屋の百々氏と調査方法の変更について協議する予定。

平成13年5月18日(金) 天候：晴れ時々曇り

D・F区で検出した、溝状遺構の掘削作業および、第6層(遺構面)の面的広がりを平板測量で押さえる作業を行った。午後、アメリカ屋の百々氏と調査方法の変更について、協議する。調査区の拡張、第5・6層掘削に伴う掘削深度の変更は、了承される。E・F区拡張のため人力により掘削作業を行う。

平成13年5月21日(月) 天候：晴れ

調査が終了したA・B区を排土置き場とし、機械による排土の反転作業および、G区以南の機械掘削作業を開始する。F区南側南壁(Cライン)断面図を縮尺1/20で実測する。

平成13年5月22日（火）天候：曇り時々雨

機械掘削を終えた箇所から、第4・5層の人力掘削を開始し、第6層上面（遺構面）の遺構検出作業を行う。G区南側より須恵器（短頸壺）の口縁部片、平瓦片が出土する。機械掘削による調査区の反転作業は、本日で終了する。

平成13年5月23日（水）天候：雨

朝からの降雨のため、発掘調査は中止とする。伐採した木や葉を処理し、搬出作業を行う。また、遺構面の養生のため、排水溝・水中ポンプの設置作業もあわせて行う。

平成13年5月24日（木）天候：曇りのち晴れ

前日の降雨のため、水抜き作業から開始する。G・H・I区の第4・5層の人力掘削を引き続き行い、第6層上面（遺構面）の検出作業を行う。I区南側より、当該地の宅地造成工事に伴う石垣を検出した。掘削内よりコンクリート片・ビニール袋等が出土する。C・D・F区の平面図実測を行うために、調査区に2メートルメッシュで割り付け作業を行う。

平成13年5月25日（金）天候：晴れ

本日より、G・H・I区の遺構検出を行う。須恵器（短頸壺）の口縁部片、平瓦片が出土した箇所では、土壌の一部が検出された。遺構の全容を把握のために周辺部を人力掘削し、調査区を拡張した。C・D・F区の平面図実測を縮尺1/20で行う。

平成13年5月28日（月）天候：曇り

遺構の人力掘削作業に取りかかる。C区の西壁に沿って第7層の断ち切り作業も行う。また、先週に引き続きC・D・F区で平面図実測および、レベル入れを行う。

平成13年5月29日（火）天候：晴れ

昨日より引き続き各遺構の人力掘削作業を行い、第6層上面で検出した遺構を完掘する。

遺構の写真撮影のために、E・G・H・I区の清掃作業から始める。清掃作業終了後、遺構完掘状況の写真撮影を行う。写真撮影終了後、各遺構の断面図実測を縮尺1/20で行う。

E・G・H・I区の平面図実測に伴い、調査区に2メートルメッシュで割り付け作業を行う。森岡係長より、土壌の一部について火葬墓の可能性は考えられないかとの問い合わせがあり、須恵器・平瓦・焼土や灰が埋納された土壌については、火葬墓と考えられると回答する。明日、現場を視察するとのことであった。

平成13年5月30日（水）天候：曇りのち雨

E・G・H・I区の平面図実測を行い、遺構面（第6層上面）の各種実測作業が終了した箇所より、第6層の人力掘削作業を開始する。午後からの降雨のため、発掘調査を中止する。調査補助員は、土器洗い、図面整理作業を行う。また、午後3時より、森岡係長が調査指導のため視察に来られ、一部土壌の性格について協議し、火葬墓と考える方向で結論づける。

平成13年5月31日（木）天候：曇り時々雨

前日の降雨のため、水抜き作業から開始する。E・G・H・I区の平面図実測を行い、遺構面（第6層上面）の各種実測作業を終了する。第6層の人力掘削作業を行い、第7層（地山面）

を出す作業を行う。

平成13年6月1日（金）天候：晴れ

昨日に引き続き第6層を人力掘削し、完掘する。第7層上面（地山面）を出す。地山面の清掃を行い、完掘状況の写真撮影を行った後、各種実測作業およびH区東壁（Dライン）の断面実測も行う。午後よりアメリカ屋の百々氏・西川課長・間地工業の沖井氏と喜多により埋め戻しについて協議する。A・B区は埋め戻し、その他は現状の状況で引き渡す。

平成13年6月4日（月）天候：晴れ

本日の作業は、地山面の断ち割り作業を人力掘削により行う。

平成13年6月5日（火）天候：曇りのち雨

昨日に引き続き、地山面の断ち割り作業を人力掘削により行う。

平成13年6月6日（水）天候：曇り時々雨

前日の降雨のため、水抜き作業から開始する。昨日に引き続き、地山面の断ち割り作業を人力掘削により行う。

平成13年6月7日（木）天候：晴れ

地山面の断ち割り状況写真撮影のために清掃作業を行い、写真撮影を行う。また、機械による埋め戻し作業も行う。

平成13年6月8日（金）天候：晴れ

機械による埋め戻し作業および、一部は人力による埋め戻し作業を行う。現地では器財・資材の搬出を終え、発掘調査は本日終了する。

平成13年6月11日（月）～平成13年6月28日（木）

現地コンテナハウスにおいて、土器洗い・マーキング・図面・写真整理などを行う。

平成13年6月29日（金）天候：晴れ

撤収およびハウス・仮設トイレの撤去作業および周辺の清掃作業を行い、地権者へ引き渡しを行い、現地での調査を終了する。

（喜多）

（4）整理・報告書作成の経過

発掘調査は29日間を要し、後述する奈良時代の古墓、灰や炭化物を埋納した土壙＝火葬灰埋納土壙などを検出した。被葬者を茶毘に付した火葬の跡、火葬から埋納にいたる葬儀の場所、須恵器短頸甕（蔵骨器）に納骨した墓など一定の成果をあげることができた。整理作業は調査終了後、平成13年6月11日から現地において土器洗い・マーキング・図面・写真整理などを平成13年6月28日までの15日間で行い、その後、平成13年12月10日から平成14年2月28日までの22日間で遺物の実測・拓本作業、遺構・遺物図版の作成および原稿の執筆を行った。これらは喜多が担当した。その後、報告書の作成を基本整理と実績報告を受け継ぐ形で森岡が担当し、平成14年度下半期を中心に作業を進め、平成15年1月の末に印刷入稿した。（森岡・喜多）

1. 藤ヶ谷遺跡の地理的位置

本発掘調査の実施内容および結果の報告に先立ち、芦屋市並びに藤ヶ谷遺跡の立地する地理的な位置と環境について、簡単にみておきたい。

藤ヶ谷遺跡の存在する兵庫県芦屋市は、兵庫県東南部に位置し、東は西宮市、西は神戸市と境を接し、南は大阪湾に面している。市域は南北方向に細長くのび、東西2.5km、南北8.3km、面積18.57km²を測る大きさである（第15図、図版1・2）。市域の北側大半を六甲山地が占め、中世代白亜紀後半期に生まれた深成岩である花崗岩を基盤岩とする急傾斜の著しい山地斜面が連続している。

芦屋神社境内一带を含む藤ヶ谷遺跡の行政的範囲は、現在東西160m、南北340mを測り、面積はおよそ28,400m²（第6図）である。遺跡範囲の確定経過については、第2節で詳しく論じることになるが、全体として南北方向に長く、北北西から南南東の方位に細くのびる。遺跡範囲の最高所は標高89m、最低所は標高58m付近であり、垂直のレベル差は30m前後を計測する。

遺跡の立地点は1970年代の地形分類・区分〔前田1971〕によれば、台地・段丘に地形分類されており、「芦屋台地」という地形区分が与えられている。そこで、芦屋市域の地形全体を概



第15図 兵庫県と芦屋市の位置図

括的にみれば、六甲山地の山頂部周辺から大阪湾北岸の海岸部におよぶため、山・丘・谷・平野と緩急に富んだものとなっており、市内各所で個性ある地形の中に普段の生活の営みがある。そして、標高20mないしは50mを基準とする等高線が往時の海岸汀線から数100m以内の至近地にある場所もあり、東の西摂平野の低位部とはかなり様相を異にする地形を展開させている。また、六甲山地の山地地形が海岸線から2km程後退して真近に存在することも県南部地域では甚だ異色なあり方であり、山地前面の山麓部には洪積台地の発達と分布が認められる。

それら洪積台地には、東から苦楽園山麓台地・六麓荘山麓台地・岩ヶ平台地・芦屋台地などの呼称が与えられているが、市域では広狭の格差も認められ、「三条・山芦屋町付近では幅せまい台地にすぎないが、東するにつれて幅を増し、山手・東芦屋・東山町では1km、六麓荘・朝日ヶ丘・岩園町では幅2.5km以上の広い地域に及んでいる」〔前田1971〕。芦屋の東方は西宮市域においても、西方については神戸市域の山手方面にもこれらの台地は連っており、現在はそのほとんどが高燥な住宅地として宅地開発が進みきっている。

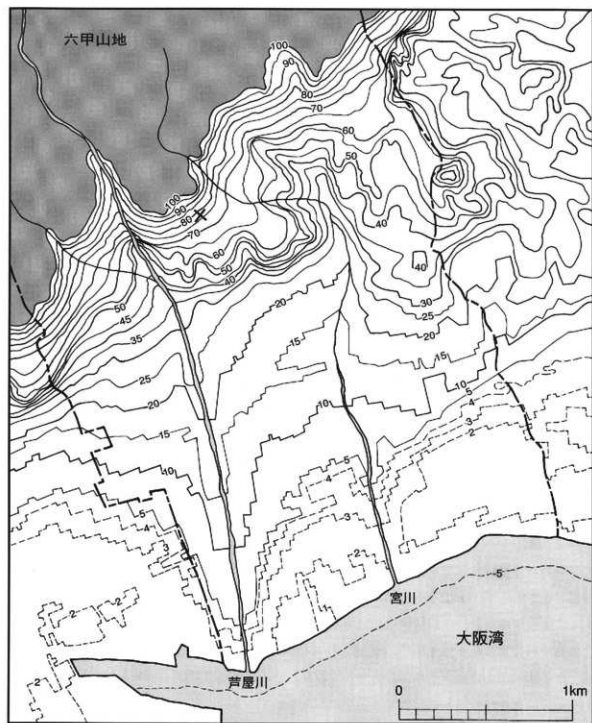
これらの台地の形成は、〔前田1971〕によれば、山麓に形成された芦屋川や宮川の古い扇状地が間欠的な地盤の隆起作用によって台地化されたものといい、台地化の早いところは高い台地を形づくり、緩傾斜した比較的平坦な台地面として認識される。より下位に位置する台地や低地部との境界には段丘崖が発達し、家並を欠く急傾斜面となっている。

藤ヶ谷遺跡は、上流域で西方に大きく曲流する宮川の西側に位置する芦屋台地の台地面にあり（第16図）、芦屋台地自体は芦屋川の両岸に扇状に広がっている。芦屋台地は「芦屋川が乱流して堆積した扇状地性の堆積物」とされ、高位段丘として区分される〔前田1971〕。

最近、ジオロジーの観点から芦屋市周辺の地形分類を積極的に試みた〔辻2002〕の業績に基づけば、本遺跡の立地する地形は、中位～高位段丘相当の古期扇状地面と認識され、その細分では更新統上部扇状地最上位面上を占めることになる。この地形は、北で断層に基因する山地斜面と画されるが、およそ芦屋川本流を西の限りとし、東は標高500mを源流点とする宮川の流れにより区切られ、古期扇状地面の中で最も高位に位置している（第17図）。

本書で報告する藤ヶ谷遺跡は、現在阪急バスの経路と重なる谷地形によって分断される更新統上部扇状地最上位面の南半部に立地しており、その南側前面には更新統上部扇状地上位面が小支谷をはさみつつ南方に向けて八手状に形成されており、一部はその先端部に更新統下部～中部に属する、いわゆる大阪層群の分布が認められる。さらに南は現阪急電鉄神戸線の沿線となるが、その付近には沖積錐の存在が認識されている〔辻2002〕。

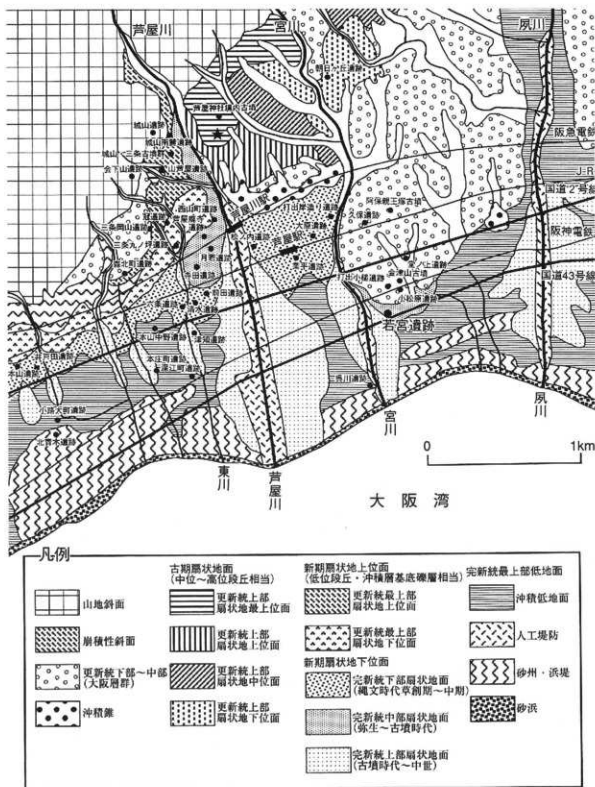
そして、さらに前面、JR 芦屋駅を中心とする地域一帯は、広く新期扇状地下位面に相当する完新統下部扇状地面が展開している。市内では水害の被害の多い低湿地と接続し、海岸線に至るまで沖積低地面が発達している。また、芦屋川や宮川の両岸には人工堤防が発達し、その後背には古墳時代から中世にかけて形成された完新統上部扇状地面が分布している。海岸沿いは幅200m未満の砂州や浜堤の生成をみ、砂浜汀線へと至る。



第16図 藤ヶ谷遺跡（×印）周辺の地形図〔前田1971から、再トレース改変〕

以上のように、藤ヶ谷遺跡の特異な立地を概観したが、市街地に完全に埋没した現在の景観からは、この遺跡の特殊性を導き出すことは容易でない。しかし、藤ヶ谷古墓の選地した芦屋台地突端部は、原始・古代の景観にひき戻すなら、古代兎原郡の有望なランドマークとして機能したことは疑う余地もなく、この地域に展開したであろう被葬者を含む氏族の活動領域や本貫地を考究する上に不可欠の要素とみておくべきであろう。

（森岡）



第17図 芦屋川・宮川流域地形分類図と藤ヶ谷遺跡の位置(★) 1:25000
[辻2002から]

2. 藤ヶ谷遺跡周辺の考古学的環境

藤ヶ谷遺跡は、市域のほぼ中央に位置し、周辺に現存する遺跡が最も少ない場所に存在する〔森岡・竹村編2001〕（第18図）。いま市内の遺跡をブロック単位に弁別してみると、芦屋川右岸部は遺跡の最も密集する地域であり（Aブロック）、芦屋川―宮川間の低地部も阪急電鉄神戸線以南にあってはいくつかの遺跡が存在する（Bブロック）。また、宮川の左岸側にも阿保親王塚古墳・金津山古墳・打出小槌古墳など古墳時代前・中期を中心とする古墳群が展開し、重複して中世遺跡が点在している（Cブロック）、宮川の上流域、朝日ヶ丘町・岩岡町・六麓荘町にも古墳時代後期の群集墳を中心に多くの遺跡が立地している（Dブロック）。藤ヶ谷遺跡はこれら遺跡密度の濃い諸ブロックのちょうど中間に一定距離を隔ててその存在が確認されたもので、唯一、天神山古墳群とのみ、その範囲が重なる。

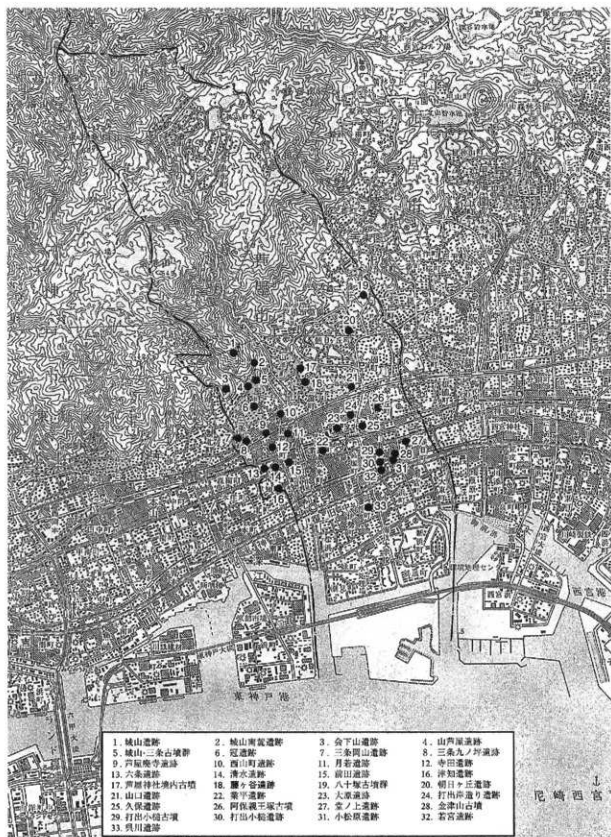
天神山古墳群〔森岡2002a〕は、六甲山地前山麓部の芦屋川と宮川にはさまれた芦屋山手台地上に展開した古墳時代後期の群集墳で、別に「笠ヶ塚群集墳」とも呼ばれる〔勇・藤岡1976〕。かつてはその構成墳の一部が確認されており、吉岡昭は古墳20余基を〔吉岡1944〕、紅野芳雄は古墳7基を記録にとどめている〔紅野1940〕。また、細川道草は「芦屋神社の東南にも一大古墳があったが宅地造成のとき掘りくずされ、ただその時の発掘品の一部が打出の神宮寺に保存せられている」と述べ、神社の北部や北西部にも古墳が存在することを示唆している〔細川1963〕。しかし、現在地上にその姿をとどめている古墳は、芦屋神社境内古墳が唯一のものであり、識者がとらえた群集墳としての面影を今に残さない。

芦屋神社境内古墳は、芦屋市東芦屋町26の民有地に遺存し、標高82mの台地上に立地する。古墳は芦屋神社境内の西隅にあり、現在はかつて弁天岩に祀られたとされる弥都波能売神を祀る水神社となっている（図版3上・下）。芦屋神社は祭神天穗日命以下十六神を合祀しているが、弥都波能売神はそのうちの一神である。

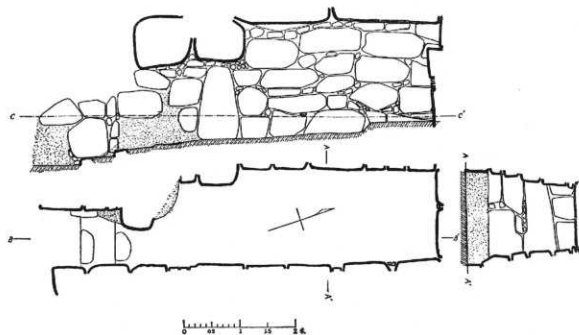
遺存状態は市内の古墳の中で最も良好である（第19図）。墳丘および内部の横穴式石室ともによく残っている。墳丘は参道部分の変形が著しいが、径約18m、高さ約3.5mを測る円墳である。腰高のマウンドが旧状を良く保って神社の社叢と調和的に存在している。主体部は石片袖形式の横穴式石室で、4枚の天井石が遺存し、玄室内には弥都波能売神を祀る祭壇が安置されている。羨道開口部付近を除き、左右両側壁はよく残っており、右側壁羨門近くでは石室内側へのせり出しが認められる。封土の崩壊とも関係する後世の石材移動とみられる。なお、祭壇が存在する玄室の床面には立ち入ることができず、十分な壁体の観察は行い得ない。

石室の法量は、全長7.5m、玄室幅1.7m、玄室長3.7m、高さ2m、羨道幅1.5m、高さ1.4mを計測する〔武藤・村川1971、勇・藤岡1976〕。

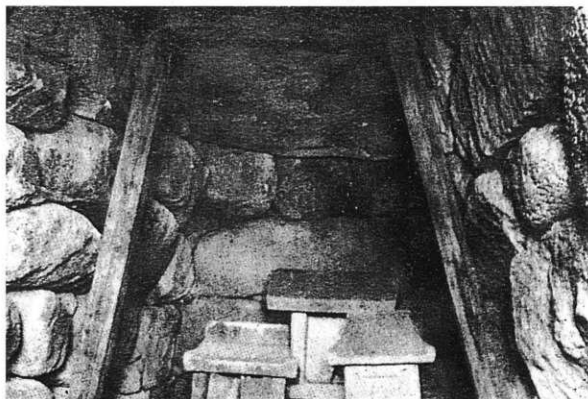
なお、この古墳をめぐる興味深い伝承がみられる。里人はこれを「猿丸太夫の墓」と呼び、毎年9月16日がやってくると、「猿丸祭」の挙行とともに祭典を行っていたという〔細川1963〕。芦屋神社の別称「猿の宮」とも関連するものであるが、猿丸太夫の墓に関しては、別に境内に



第18図 芦屋市内遺跡分布地図 (1:50000)



芦屋神社境内古墳石室略測図（図版3下参照）



芦屋神社境内横穴式石室古墳の玄室
（石祠は近時水神社祠をここに移し奉祀したもの）

第19図 芦屋神社境内古墳略測図及び石室の旧状（昭和20年代作図・撮影）

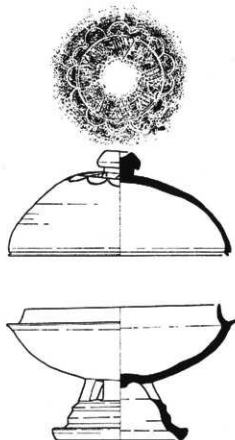
建つ鎌倉時代の宝塔（芦屋市指定文化財）に「伝・猿丸太夫の墓」との言い伝えが残っている点も併せ付記しておく。

次にぜひふれておかねばならないのが、新羅印花文陶質土器を出土した笠ヶ塚の存在である。本発掘地点より南西方、芦屋川までの間に位置する山手町一帯に所在したことが推定されるが、それが発見された昭和初年より数10年の歳月を経過しており、詳細な点についてはあまりにも要を語り尽くせぬことが多い。

資料は、芦屋の若き考古学徒であった吉岡昭が、太平洋戦争真最中の昭和18年（1943）10月15日に「笠ヶ塚西」で採集したもので、一組の陶質の有蓋高杯である〔吉岡1944〕。

吉岡昭が芦屋市内の遺跡踏査と本格的に取り組み始めたのは昭和17年（1942）の頃のことであり、約1年を経てこの土器を笠ヶ塚西方において採集したことになる。この資料は、全国的にみてもきわめて重要な朝鮮半島産土器で、既に市史考古資料篇にも紹介されているが〔勇・藤岡1976〕、その意義についてより深くふれたことがある〔森岡1992a〕。問題の土器を第20図として再掲するが（縮尺1/2）、本資料は朝鮮半島新羅産とみられる陶質土器で、本邦での類品も少ない貴重な舶載土器である。字笠ヶ塚にあったとされる群集墳については、今日実態が定かでないが、おそらく後期古墳の副葬品の一部と推定して大過ないものである。当群集墳がもつ外来的性格の一斑をうかがうことができる。

2点の土器はセットになり、高杯は口径10.1cm、高さ7.1cmを測り、脚部に台形の透し孔を穿つ。蓋の方は口径11.5cm、高さ5.7cmを計測する。天井部に鋭利なヘラとコンパス状の施文具を用いて描かれた鋸歯文と半円点文帯が花卉様に美しくつまみの周囲を巡る。文様構成と施文原体の組み合わせは、新羅印花文陶器の文様帯変遷の上でスタンブ文出現の直前期の資料と位置づけられ〔宮川1991〕、6世紀中葉の年代が与えられよう。列島出土例は甚だ乏しいけれど、これより僅かながら古くなる資料が和歌山県和歌山市岩橋前山 A46号墳にあって、比較することが可能である。また、山口県豊浦郡豊浦町心光寺2号墳出土有蓋脚台付杯は、幾分ヒアスを置いて後出するものとされている〔竹谷1991〕。この笠ヶ塚の土器については、その年代が西暦562年、大伽耶を中心とする伽耶諸国が新羅に併合される重要な歴史的事件と相前後する微妙な時期のものといえ、芦屋と大陸文化との深い関係を探る上でも価値高い資料とし

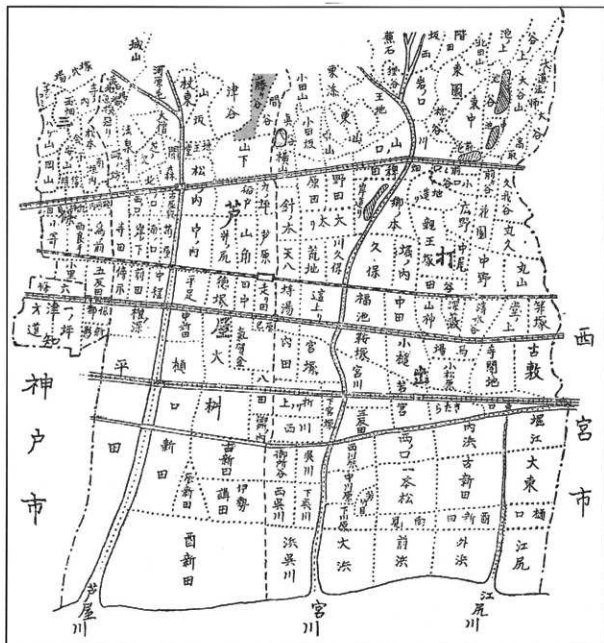


第20図 笠ヶ塚出土新羅印花文陶質土器

て位置づけが可能である〔森岡1992a・2002a〕。

さて、「藤ヶ谷」なる小字名（第21図網カケ部分）は、大字戸屋に遺存した55を数える小字の一つであり（『兵庫県武庫郡精道村土地宝典』昭和12年8月）、「城山」「奥山」「山ノ下」「山坂」「山角」「問谷」「藤ヶ谷」「津谷」「角谷」「杖東」「かわらけ」「赤石場」「官林」とともに、その由来が山地関係のものとされる〔細川1963〕。既述したように、大規模な集落遺跡が立地した気配はなく、石器類の採集品から推測すれば、先史・原史時代には豊かな猟場が形成されていたことを知る。

（森岡）



第21図 精道村旧字界図

1. 層序と遺構の概要

(1) 層 序

調査地（第22図）は、基本的に同じ堆積状況を示しているが、調査区の北から南方向と西から東方向に緩やかな傾斜をもつ。基本層序は、1～7層からなる。また、調査地は二度にわたる宅地造成工事の盛土により、山林から現在の住宅街の状況に大幅に変化している。以下、各層の所見について、その概要を述べる。（第23図）

第1層は、厚さ約20cmの黒褐色（10YR3/1）粘質土層などからなる表土である。第2層は、厚さ約40cmから100cmの灰黄色（2.5YR7/2）砂礫層（地山ブロック含む）で、二度目の造成工事にかかる盛土であり、調査地の北側から南側に向かって厚みをもつ。第3層は、厚さ約10cmの褐灰色（10YR4/1）粘質土で、旧表土である。第4層は、厚さ約20cmから30cmの淡黄色（2.5YR8/4）粘質土層（微砂含む）で、一度目の造成工事にかかる盛土層である。第5層は、厚さ約20cmから30cmの橙色（2.5YR6/8）粘質土層で、調査区の南側に遺存する古墳時代～奈良時代にかけての遺物包含層である。第6層は、厚さ約20cmから30cmの橙色（2.5YR7/8）粘質土層（風化したこぶし大の花崗岩を含む）で、その上面が古墳時代～奈良時代にかけての遺構面である。第7層（地山）は、黄橙色（10YR7/8）粘質土層（花崗岩を含む）で、大阪層群上部を構成する地層である。（喜多）

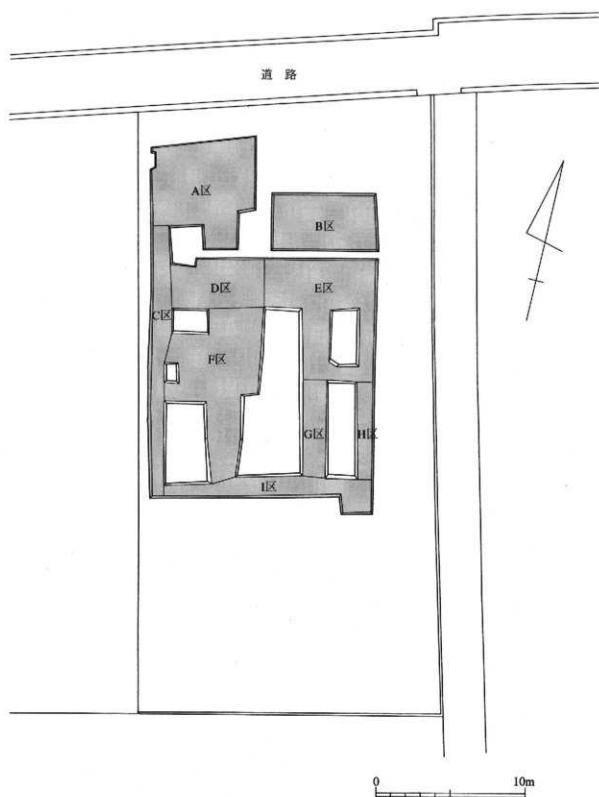
(2) 遺 構

調査地は、山手台地周辺の宅地開発に伴う造成工事により土地の改変が著しく、特に調査区北側では遺構面（第6層）が削平されてか遺存せず、何ら遺構を検出することができなかった。調査区南側では遺構を検出することができたが、宅地造成工事などによる後世の削平が著しく、検出した遺構の遺存状況も悪かった（第24図）。

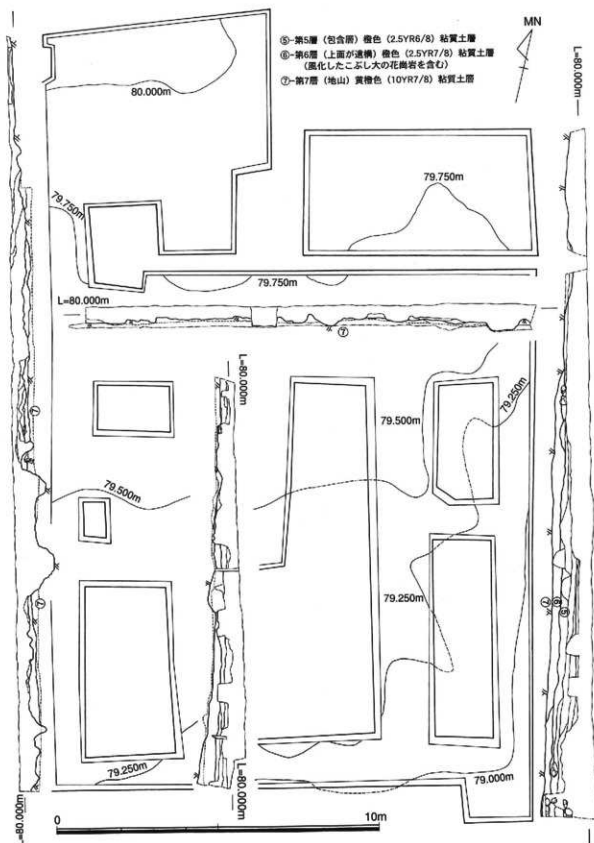
検出した遺構は、古墓2基・火葬灰埋納土壇4基・土壇8基・溝状遺構2条であった。奈良時代の古墓とともに灰や炭化物を埋納した火葬灰埋納土壇などを検出し、被葬者を茶甕に付した火葬の跡、火葬から納骨にいたる葬儀の場所、須恵器短頸壺を蔵骨器として納骨した墓など一セットでみつき、一定の成果をあげることができた。

以下、検出した遺構についてその概要を述べる（第24・25図、図版11～30）。

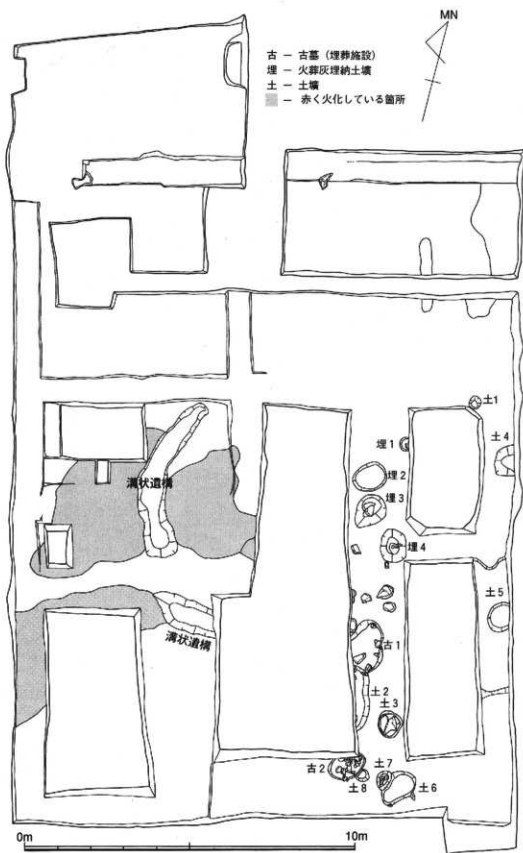
溝状遺構（第24・25図、図版12・14・15下・16下・17・18） F区で検出した方形区画を呈する溝跡である。幅約80cm、深さ約10cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土層である。遺物は、出土しなかった。また、溝周辺の地山面の一部に赤く火化している部分がある。このことから、溝によって区画された箇所は、遺体を茶甕に付すための施設（火葬の跡）があったと考えられる。



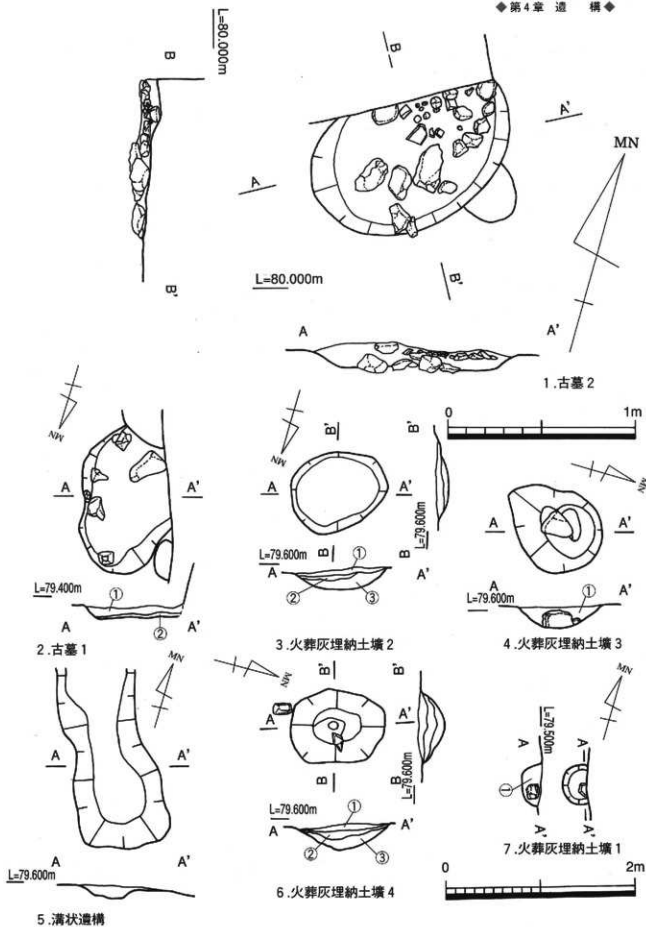
第22図 発掘調査 調査区配置図



第23図 調査区内地形実測図



第24図 遺構配置図



第25図 古墓・火葬灰埋納土墳・溝状遺構実測図 (1/20・1/40)

火葬灰埋納土墳1 (第24・25図、図版19・20下・21下・22・24④・29) E区中央付近で検出した灰や炭化物を埋納した土壌である。平面形は直径約45cmの円形を呈し、深さ約20cmを測る。埋土は、黄色(2.5YR7/8)粘質土層(①)で炭化物を含む。遺物は出土しなかった。

火葬灰埋納土墳2 (第24・25図、図版19・20下・21下・22・24⑤・28上・29上・30下) E区南半部で検出した灰や炭化物を埋納した土壌である。平面形は、長辺約110cm、短辺約90cmの楕円形を呈し、深さ約25cmを測る。埋土は3層認められ、第1層は、にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土層で炭化物を多く含む。第2層は、明黄褐色(10YR6/8)砂質土層で炭化物を含む。第3層は、明褐色(7.5YR5/6)砂質土層で炭化物を含む。埋土には、各層ともに多くの炭化物と焼土が含まれていた。遺物は出土しなかった。

火葬灰埋納土墳3 (第24・25図、図版19・20下・21下・22・29・30上) E区火葬灰埋納土墳2のすぐ南側で検出した灰や炭化物を埋納した土壌である。平面形は、長辺約115cm、短辺約90cm以上の楕円形を呈し、深さ約20cmを測る。埋土は、黄色(2.5YR7/8)粘質土層(微砂を含む)である(①)。基底部に人頭大の礫を据える。遺物は出土しなかった。

火葬灰埋納土墳4 (第24・25図、図版19・20下・21下・22・26上・28下・29・30下) E区埋納土墳3のさらに南側で検出した灰や炭化物を埋納した土壌である。平面形は、長辺約100cm、短辺約80cmの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。埋土は3層認められ、第1層は、橙色(2.5YR7/6)粘質土層(微砂を含む)で、少量の炭化物と焼土を多く含む。第2層は、明褐色(7.5YR5/6)粘質土層で、少量の炭化物と焼土を多く含む。第3層は、明黄褐色(10YR6/8)粘質土層で、少量の炭化物と焼土を多く含む。埋土内には各層ともに多くの焼土が含まれていた(図版34上6)。遺物は出土しなかった。

古墓1 (第24・25図、図版20・22上・25) G区中央で検出した納骨にかかる土壌墓である。平面形は長辺約150cm、短辺約90cmの楕円形を呈する。埋土は2層認められ、約25cmの深さを測る。第1層は、黄色(2.5YR7/8)粘質土層(砂を含む)、第2層は、黄色(2.5YR7/8)砂質土層で炭化物を含む。基底部にはこぶし程度の礫を敷く。遺物は、第1層より土師器の小片、平瓦片(図版36-35・35')が出土した。

古墓2 (第24・25図、図版20・21上・25・27) I区中央東寄りで検出した納骨にかかる土壌墓である。平面形は長辺約110cm、短辺約70cm以上の楕円形を呈する。埋土は2層認められ、約15cmの深さを測る。第1層は、黄色(2.5YR7/8)粘質土層(砂を含む)、第2層は、明黄褐色(2.5YR6/6)砂質土層で炭化物を含む。基底部にはこぶし程度の礫を敷く。遺物は、第1層より土師器の小片・平瓦片(第26図1~9、図版35・36上-24~34・36下-24'~34')・須恵器の短頸壺(第26図10、図版34下7~14)の破片が出土した。

土墳1 (第24図、図版19上・22下・24②) E区東側で検出した土壌である。平面形は直径約45cmの円形を呈し、深さ約15cmを測る。埋土は、明黄褐色(2.5YR7/6)砂質土層である。遺物は出土しなかった。

土墳2 (第24図、図版19・20・25) G区南側で検出した土壌で、古墓1を切る。平面形は

長辺約200cm・短辺約30cm以上の楕円形を呈し、深さ約20cmを測る。埋土は、黄色(2.5YR7/8)粘質土層(微砂を含む)である。遺物は出土しなかった。

土壌3(第24図、図版19・20・25上) G区土壌2の南東側で検出した土壌である。平面形は直径約70cmの円形を呈し、深さ約20cmを測る。埋土は、黄色(2.5YR7/8)粘質土層(微砂を含む)である。基底部に礫を敷く。遺物は出土しなかった。

土壌4(第24図、図版22・24③・29上) E区東端で検出した土壌である。平面形は長辺約90cm以上、短辺50cmの方形を呈し、深さ約20cmを測る。埋土は、黄色(2.5YR8/6)砂質土層である。遺物は出土しなかった。

土壌5(第24図、図版22上・25下・26下・29上) H区の中央部で検出した土壌である。平面形は直径約85cmの楕円形を呈し、深さ約50cmを測る。埋土は、明黄褐色(2.5YR7/6)の粘質土層で、こぶし大の礫を含む。遺物は出土しなかった。

土壌6(第24図、図版20・21上・25) I区東側で検出した土壌で、土壌7によって切られる。平面形は長辺120cm・短辺70cmの楕円形を呈し、深さ約10cmを測る。埋土は、明黄褐色(2.5YR6/6)砂質土層である。遺物は出土しなかった。

土壌7(第24図、図版20・21上・25) I区東側で検出した土壌で、土壌6を切る。平面形は長辺約55cm・短辺約40cmの楕円形を呈し、深さ約10cmを測る。埋土は、明赤褐色(2.5YR5/8)砂質土層であり、基底部に礫を敷く。遺物は出土しなかった。

土壌8(第24図、図版20下・21上・25・27) I区東側で検出した土壌で、2号墓によって切られる。平面形は直径約35cmの円形を呈し、深さ約15cmを測る。埋土は、明赤褐色(2.5YR5/8)砂質土層である。遺物は、土師器・須恵器(図版34上5)の小片が出土した。(森多)

2. 小 結

僅かな面積の発掘調査であったが、住宅が建設され、とくに損壊のおよぶ部分すべてにトレンチを設定したため、遺跡の全体像をある程度推測する成果が得られた。遺体を火葬する施設(溝区画)、火葬の際生じた炭や灰・焼土を遺棄した穴(火葬灰埋納土壌1~4)、蔵骨器を埋め置いた墓(古墓1・2)、付属土壌(土壌1~8)は互いに有機的関係をもち、一定の時間の流れの中で機能していることが明解となった。こうした存在形態を示した古墓は、西摂地域では初めてのことである。

これまでも市内の発掘調査現場で予期せぬ事態に遭遇することはまみられたが、遺跡や遺構への適切な価値評価は常に調査者のもつ日頃の力量と洞察力、アンテナを大きく開いた問題意識に左右される。このことが改めて確認された発掘調査の成果であったといえよう。

(森岡)

1. 遺物の概要と観察

出土した遺物は、土器類と瓦類がある。ただし、宅地造成工事などによる後世の削平が著しく、検出した遺構の遺存状況が悪かったこともあり、遺物の出土は比較적少なかつた。しかし、遺物包含層（第5層）からは、古墳時代後期の須恵器（甕腹片）の小片（図版34上4）が、古墓2からは、須恵器（有蓋短頸壺）・平瓦が一括して出土した（図版34下、図版35上下）。

以下、古墓2の出土遺物について述べる（第26図）。

(1) 土器

須恵器短頸壺（第26図10、図版34下） 口径14.2cm、残存器高14.5cmで、体部最大径が高い位置にあり、二対の舌状の把手を持つ。高台は欠損するが、下方へ踏ん張る形態のものと考えられる。焼成は良好である。胎土は密で、径1～2mmの石英・長石などの粒を含む。色調は、内外面ともに灰色を呈する。調整は、体部外面を回転ヘラケズリの後、体部下位より軽いヨコナデ調整を行う。口縁端部は強くヨコナデ調整を行う。内面は、ヨコナデ調整をしている。把手は指頭圧により整形し、軽くナデ調整を行い、貼り付けている。平城京の編年観にあわせて考えると、平城Ⅱ期の土器にあたる。この土器は、壺A（葉壺形土器）に形式分類されているものである。平城Ⅱ期の基準資料となるSD485出土の壺Aとこの土器とは、量がほぼ同じである。また、他の平城京の資料からもあわせて考えると、平城Ⅱ期に比定できる。SD485からは、神亀5年（728）から天平元年（729）銘の本簡が出土しており、年代観として730年頃と考える。また、蔵骨器として転用されていたものと推測する。

（喜多）

(2) 瓦

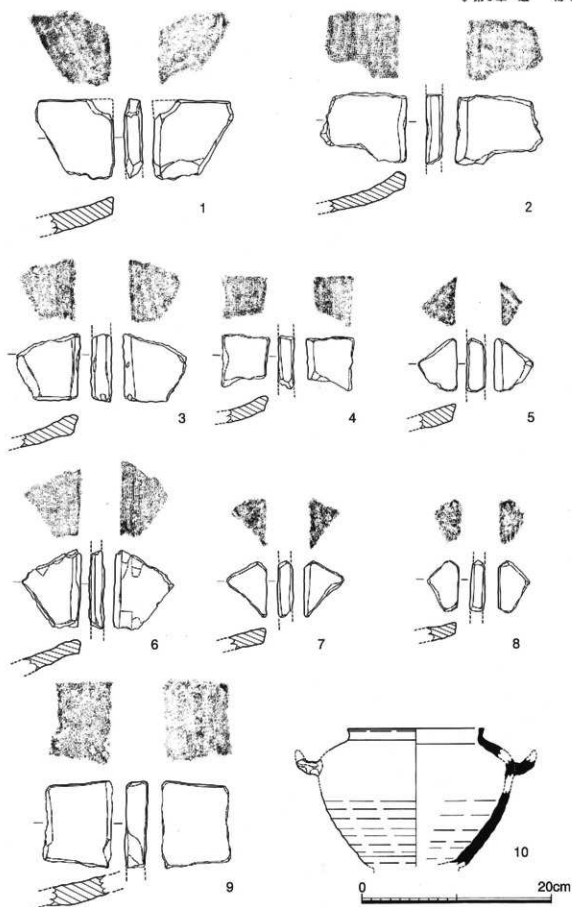
平瓦（第26図1～9、図版35上下） 出土した平瓦はすべて完形品ではなく破片である。土師質のものと須恵質のものとがある。凸面に縄目叩きを施し、凹面に布目を残す。凹面の端には布地の切れ目があり、一枚造りの特徴が認められる。また、瓦側面は面取りを施しており、断面三角形を呈するもの（第26図2～4・6）もある。胎土は密で、径1mm以下の石英・長石などの鉱物粒を含み、色調は土師器のものが淡黒灰色、須恵質のものが暗青灰色を呈する。焼成は良好である。

（喜多）

2. 小 結

土器・瓦共に8世紀前半の年代を示し、有機的な関係を保つ。とくに平瓦については、本地方の芦屋廃寺跡出土瓦類の奈良時代のものとよく近似しており、両者の関係性の一端を物語っている。

（森岡）



1～9. 平瓦 10. 短頸壺

第26図 遺物実測図 (1/4)

1. はじめに

今回調査した藤ヶ谷遺跡第5地点における発掘成果を集約すれば、火葬を採用した後の8世紀前葉から中葉の「墓」としての一連の施設を検出したことにある。近年の火葬墓の研究として、小林義孝氏や海邊博史氏などの成果がある。小林氏によると、「これまでの研究で火葬墓と評価されてきたもののほとんどは、火葬骨を納めた埋納施設である。」とし、また、「火葬という葬法では、納棺→荼毘→拾骨→納骨の過程を踏んで葬送とその儀礼が執り行われる。」とされ、この葬送の段階において、荼毘＝火葬施設・拾骨＝火葬灰埋納土壌・納骨＝埋納施設（墓）が遺跡では把握できると考えられている。特に柏原市田辺古墓群の再検討は、興味を引くところである。

以下、小林氏の研究成果を中心に据え、藤ヶ谷遺跡第5地点の発掘成果を考えてみたい。

（喜多）

2. 「墓」に伴う施設について

火葬施設の遺構として、F区で検出した溝状遺構（第24・25図、図版17・18）の周辺部を想定する。火葬に伴い出土する木炭層や骨片、棺を納めたと考えられる土壌などといった遺物・遺構は存在しなかったが、遺構面が後世に削平を受け、遺構の遺存状況が著しく悪い状態であったため、火葬に伴う遺構の検出、遺物の出土が見られなかったのではないと思われる。しかし、特に溝によって方形に区画された内部では、地山面の一部に赤く火化している部分（図版15下）が認められ、また、周辺部において検出した火葬灰埋納土壌や蔵骨器をもつ墓の存在がみられることから、溝によって方形に区画された内部には、荼毘に付す火葬施設があったと考える。

小林氏は、火葬・拾骨という一連の過程の後、火葬施設に残った灰を埋める土壌の存在を指摘され、それを「火葬灰埋納土壌」と名づけ、問題提起された。その後、火葬灰埋納土壌は、各地で検出されるようになる。また、「遺骨のみではなく火葬によって生じた灰や炭に一定の宗教的意味が存在した」と考え、火葬灰埋納土壌により墓域を画しているとの指摘もある。当該地の調査では、4基の火葬灰埋納土壌を検出した。検出したそれぞれの土壌には大量の焼土・灰・炭化物を含み、また土壌の底や壁面に火化による赤化が認められないことから、検出した4基の土壌は、火葬施設から、拾骨に際して残った灰や炭を納めた火葬灰埋納土壌であると考えられる。火葬灰埋納土壌の性格として墓域を画するとの考えから考え合わせると、一連の墓としての空間を画する意味合いを認めることもできよう。そう考えると、4基の火葬灰埋納土壌は、墓域の北限を画するものと見なすことができよう。

納骨施設と考える遺構は、2基検出している。ひとつは、G区で検出した古墓1である。古墓1は基底部にこぶし程度の礫を敷き、その上面に炭化物を含む粘土層（第2層）が認められる。遺物は、平瓦の小片と土師器の小片が出土した。これは、いずれも炭化物を含む粘土層の上層（第1層）から出土している。もうひとつは、I区で検出した古墓2である。古墓2は古墓1と同様に、礫を敷きその上面に炭化物を含む粘土層を認める。遺物は、須恵器短頸壺の破片と平瓦片が多数出土し、古墓1と同様に、炭化物を含む粘土層（第2層）の上層（第1層）から出土している。このことから、納骨施設としての土壌を穿ち、その基底部に礫を敷き詰め、火葬に伴う灰や炭化物などによりその上面を整地し、土師器（小片のため器種は不明）・須恵器短頸壺を蔵骨器として据えていたと考える。蔵骨器の特徴として、海邊氏は、「摂津地域出土の蔵骨器は、須恵器・土師器が大半を占め、中でも須恵器短頸壺が多くみられる。」と特徴づけられている。2基の納骨施設からも土師器・須恵器短頸壺を蔵骨器としていることから、摂津地域の特徴が認められる。検出した遺構は、上部が削平されて遺存状況がよいくないため、内部構造を復元できないが、納骨施設に平瓦が伴う類型として、大阪府柏原市田辺古墓群9号墓の例がある。多くの平瓦片が出土した古墓2は、田辺古墓群9号墓のような埋葬形態をもっていたのではないだろうか。納骨施設の造営時期として、古墓2から出土した蔵骨器と考える須恵器短頸壺は、平成Ⅱ期に編年される。このことから納骨施設の造営時期を8世紀前葉に比定できるが、蔵骨器に納骨された人物や家族などが使用していた土器が蔵骨器に転用されたと考えることもでき、納骨施設の造営時期は8世紀前葉から中葉に比定できるのではないだろうか。

(喜多)

3. おわりに

藤ヶ谷遺跡第5地点の発掘調査では、茶毘＝火葬施設・拾骨＝火葬灰埋納土壌・納骨＝埋葬施設（墓）という火葬による一連の施設を空間的にとらえることができ、大きな成果をあげることができた。また、海邊氏の集成によると、「猪名川以東の北摂地域に分布が偏る。」とされ、猪名川以西の阪神地域では、火葬による埋葬施設の空白地帯となっていた。藤ヶ谷遺跡第5地点の発掘調査の成果が初見であり、今後、当地域での火葬施設をとまう遺跡の発掘調査が期待される。

調査区の北東約300mには古墳時代後期の芦屋神社古墳が位置し、また、試掘調査や包含層（第5層）から出土した古墳時代後期の須恵器からあわせて考えると、周辺部には、古墳時代後期の群集墳が存在する可能性も考えられる。このことから、山手台地における古墳時代後期の群集墳と古墳の造営が終了した後の藤ヶ谷遺跡第5地点の「墓」としての一連の施設との関連を考えると、墓域の問題や古墳から火葬墓への変遷過程など数多くの課題がある。

以上、藤ヶ谷遺跡第5地点での発掘調査では、六甲山地の南麓部において8世紀の「墓」を空間的に検出することができた。しかし、まだまだ点としての発掘調査の成果であり、今後周

辺部の調査成果の積み重ねにより、面として墓域の全容などを解明しなければならず、数多くの問題が残る。今後の課題とする。

(喜多)

4. 参考文献

- ・海邊博史1999「畿内における古代墳墓の様相」『古代文化』第51巻第11号 財団法人古代学協会
- ・小林義孝1992「灰を埋めた土藏」『究班』埋蔵文化財研究集会15周年記念論集 埋蔵文化財研究会
- ・小林義孝1994「甲田南古墓の再検討」『甲田南遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- ・小林義孝1997「古代火葬墓の第一類型」(上)(下)『大阪文化財研究』第13号 財団法人大阪府文化財調査研究センター
- ・小林義孝1999「古代墳墓研究の分析視角」『古代文化』第51巻第12号 財団法人古代学協会
- ・奈良国立文化財研究所1974『平城宮発掘調査報告Ⅵ』
- ・奈良国立文化財研究所1976『平城宮発掘調査報告Ⅶ』
- ・花田勝広1987『田辺古墳群・墳墓群発掘調査概要』柏原市教育委員会
- ・花田勝広1988「律令制の確立にみる葬地の変革—河内地域の氏墓の様相を中心に—」『信濃』40巻第4号
- ・森岡秀人1999a「古墳と古墓の接点—特輯 日本における古墳の終焉から古代墳墓へ(1)に寄せて」『古代文化』第51巻第11号 財団法人古代学協会
- ・森岡秀人1999b「火葬墓出現期の動向と古代墳墓のその後の展開—特輯 日本における古墳の終焉から古代墳墓へ(2)に寄せて」『古代文化』第51巻第12号 財団法人古代学協会

(喜多)

1. まえがき

阪神・淡路大震災を契機に著しく増加した埋蔵文化財の保護を目的とした発掘調査により、芦屋の歴史は格段に豊かにかつ精彩を放つようになった。市民と関係者の協力により鋭意進められてきた震災復興調査がもたらした大きな成果といえるが、今回報告し終えた藤ヶ谷遺跡で確認された古代の火葬墓も復興が直接その原因でないにせよ、その一つに加えることができるだろう。建物や道路の復興が急がれるのと同時に、消え去りゆく文化的遺産の記録もまた着実にとどめていかねばならない。

本章では、前章までの事実報告に基づき、この火葬墓をとりまくさまざまな問題について、若干の整理と考察を試み、きわめて貴重な発掘調査成果であったことを強調して、本書の結びとしたい。

(森岡)

2. 発掘調査成果の整理と二、三の考証

第1・2次確認調査は、本遺跡に初めて本格的なメスが加えられたものであり、多くの制約の下行われたものであったが、古墳周溝の可能性も報告されている南北方向の須恵器・土師器の細片を伴う溝状遺構（第8・9図2区東半、図版6の⑥）、1個体分の須恵器甕の破片がまとまって出土した遺構（第8・11・13図5区南部SX-01、図版7の①④⑤⑥）を検出し、当該地に眠る遺構群の証左を片鱗的に把握することができた。出土遺物は第14図および図版8に掲載したとおりであるが、ある程度の時期が把握できたものの、それぞれの有機的な関係や性格については、発掘面積が限られ不十分な理解となっており、すべてが本調査に委ねられた形となった。

本調査では、調査区をかなり面的に広げることができ、確認調査で浮かび上がった課題や疑問の多くを解消し得、平面的な構造把握が可能となった（第22～24図）。いまそれらを概括的に整理し直すと、まず、遺構はA区・B区・C区北半・D区・E区北半など北半分の調査区域では少なく、専らC区南半・E区南半・F区・G区・H区・I区など南半分の調査区に集中する。第23図をみて明らかなように、調査区の旧地形はA区北端に最高点があり、標高80.00mのコンタラインがA区の3分の1北側でまわる。続く標高79.75mのコンタはC区北端からD区北端、E区北端に顔をみせつつ、80.00mのコンタにあわせて一旦B区にまわり込み、B区内で再び東の調査区外に出る。79.50mのコンタラインは調査区のはほぼ中央を西から東へ、さらに北東へと走行する。具体的にはF区北半からE区南東部に入り、標高80.00mや79.75mのコンタと同様に東の方で北へと向きを変えている。79.25mのコンタはI区西半からF区南端へ、さらにI区中央北壁寄り姿をみせ、G区からE区東端にかけて蛇行状に走る。東側で

は標高79.50mのコンタによく馴んだ動きを示し、東方への流れ方もよく類似する。標高79.00mのコンタは調査区全体の南東隅を中心に存在し、I区南壁沿いから東に至って北進し、H区へと逃げる。この動きも旧地形全体の調査区東側での動きによく準じるものである。

総じて、旧地形は調査区内では北西側に高く、南東側が低いものとなっており、I区南東端を最低所として標高78.92mを測る。調査区内での高低差は1m強であり、勾配の主稜線が北西から南東の方向を示す。概して調査区の西半分は緩やかな斜面であり、5～7m程度の間隔をおいて25cmずつアップするが、東側では、コンタが稠密となり、とくに北東方向を目指して大きく入り込み、東側に浅い谷状地形の存在を予測させる。当然傾斜はきつくなり、1～2mの近接距離で25cmアップしている。

以上のことを踏まえれば、これから述べる遺構群についてもそれぞれ意味のある立地ととらえることが可能であり、狭い調査区であったにもかかわらず、微地形の変化、選地の微妙な息づかいを読み取ることができよう。ただし、先に指摘した遺構分布の傾向は、これらの旧地形が全く当初のものではないことも教えており、第2章第2節(2)や第4章第1節(2)で報告されているように、包含層(第5層)や遺構面(第6層)が大きくカットされている公算も高い。したがって、現状で把握された遺構の数々も全体構成からみればごく一部であった可能性も強く、遺構自体が東西方向へ延びている事実を含め、いまだ広い範囲で群在していたことは考えられてよい。土地改変の要因が近世にまで遡るのか、近代の開発によるものか定かでないけれど、近過去の宅地造成などによる土木工事が主因をなしたであろうことは推測に難くない。それは、遺構の残存状況からみて、調査区南半分にも影響をおよぼしている(第4章第1節(2))。

さて、検出遺構をいまだ一度集約すると、古墓2基(1・2)、火葬灰埋納土壌4基(1～4)、土壌8基(1～8)、溝状遺構2条である。

古墓1と2は、標高79.25mのコンタラインの張り出しの認められる旧地形の稜線近くで検出されている。両者の直線距離は3m前後で近接する。G区中央でみつかった古墓1は、90cm×150cmの楕円形土壌で、こぶし大の礫で基底部をしつらえ、炭化物を含む砂質土が覆い、最上層からは土師器片・平瓦片が出土。古墓2は、70cm×110cmの大きさの楕円形土壌で、やはりこぶし大の礫を敷いて基底となし、その上を炭化物を含む砂質土層が覆い、最上層からは土師器片・平瓦片・須恵器短頸壺片が出土した。

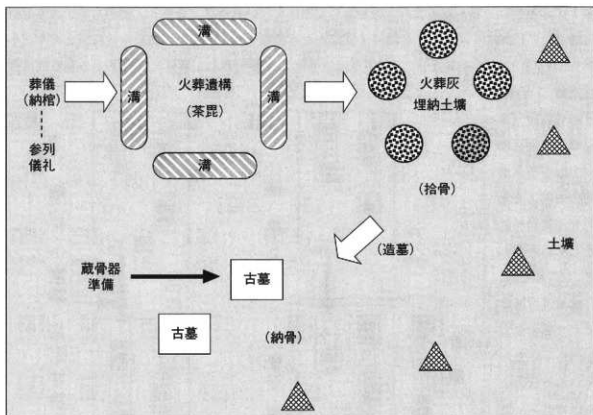
火葬灰埋納土壌とした4基の穴は、現状ではE区南半部に偏在する。一見半円環状に存在し、未掘部分にも連続していく様相を呈している。共通する属性として、いずれも出土遺物がみられず、灰や炭化物、焼土などが意識的に埋納されている点が共通する。

大きさについて言えば、同土壌2～4の3基が長径100～110cm程度の平面楕円形を呈し、よく類似する。1はかなり小さく、他の3基とは規模を異にするが、堆積土の類似からみて機能はおそらく同じであろう。

8基の土壌はそれらの外縁部を中心に散在的な分布を示し、形状や大きさも不揃いである。一部は基底に礫の敷布が認められる共通点を有するが、遺物をもつものも少なく、本来的な機

能・用途は定かではない。また、やや広く掘られたF区で見い出された溝状遺構も面的に火を受けたものであり、火葬そのものに伴う施設と考えられる。その規模から察するに、古墳そのものとは無縁とみられる。

以上が、一群の遺構の有機的なつながりと客観的識別であるが、火葬骨を納めた墓(蔵骨器)の施設(古墓と呼称)以外に、葬送儀礼の時間的流れを追える各種遺構の大方が一堂に会して出土したことがまず第一に評価される。この点をきわめて模式的にわかりやすくするために、誤解を恐れず作成したのが第27図である。



第27図 藤ヶ谷古墓火葬過程模式復元図

このような遺構配置と機能の違いについては、現地調査における観察以外に既小林義孝によって提起されている古代火葬墓の実態に関する解析視点〔小林1999〕がきわめて有効であった(第28図)。小林の研究上での示唆は、高橋健自〔高橋1919〕・高橋・森本六爾〔高橋・森本1929〕・森本六爾〔森本1987〕・藤森栄一〔藤森1941〕・藤澤一夫〔藤澤1956・70〕・安井良三〔安井1960〕らの継承を超える発想の転換と論理的解釈を伴うもので、多少の飛躍があるにせよ、「葬送の思想」にまで踏み込んだ点は学ぶべきところが多い。その要点を略説すれば、旧来の火葬墓認識の批判を出发点とする出土遺物の一元的理解(副葬品)に対する疑念であり、例えば銭貨出土の意義も用いられ方が納棺・茶毘・拾骨・納骨・造墓(納骨施設造営)と多様であって、さらに棺内といえども遺骸に付すものとは別に結界の意味を備えるものもみられ、一筋縄ではいかぬことが強調されているが〔小林1997b・99〕、古代墳墓出土の鉄板をめぐる墓

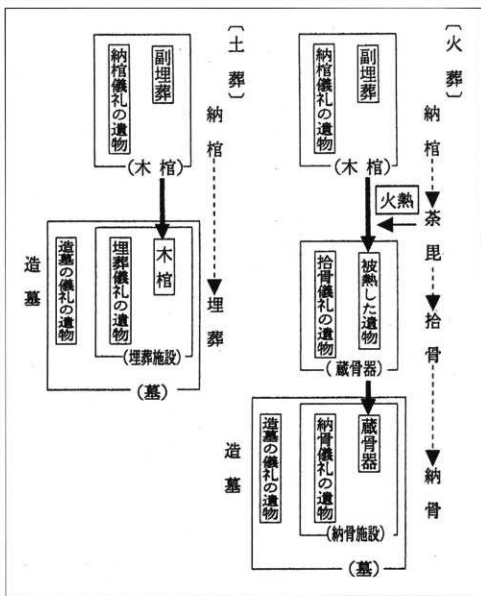
誌や買地券・経文・儀礼の問題に対する出土状況からのアプローチ〔小林1997c・99〕も火葬・土葬両面における「土砂加持」の多様な解釈とともに貴重な喚起をわれわれに促すものであろう。

また、藤ヶ谷古墓とも密接な絡みをみせる炭化物や灰については、その由来が重要であるが、小林は火葬によって生じた灰や炭に関する宗教的意味づけにも論究しており、本書でも小林による「火葬灰埋納土壌」のネーミングと存在を認めた意識的な報告を行ったものである。小林の豊かな分析で最もビジュアルに葬送儀礼の場が復元される田辺A号墓・B号墓の一連の施設との類似性は、藤ヶ谷古墓の性格を論じる際にも大いに参考となろう。田辺古墓の遺構配置と評師〔花田1987・88〕も、小林によればかなり様相を異にするものにとらえられており〔小林1999〕、とくにA号墓は1・2・3号墓とされる火葬灰埋納土壌を北限線とする墓域内に火

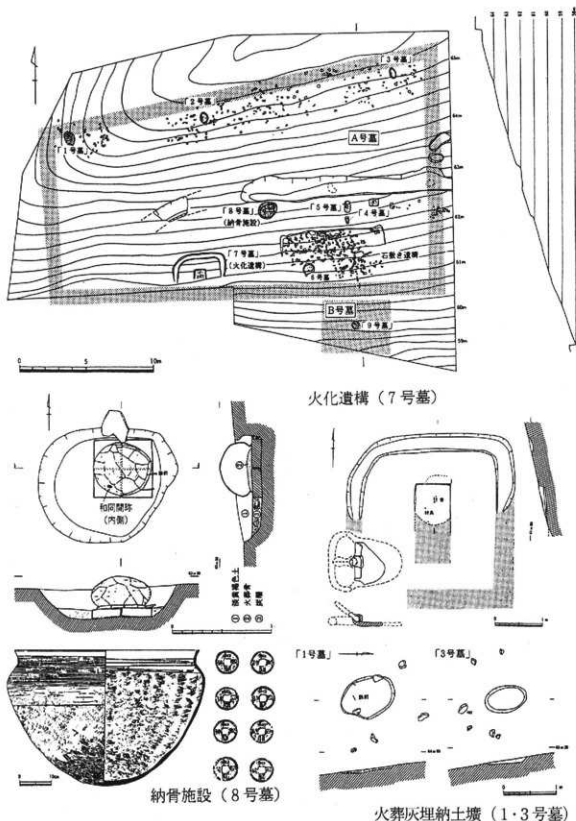
化遺構(7号墓)と納骨施設(8号墓)と儀礼場(方形石敷き遺構)を備える完結した総合施設として再生されている(第29図)。

藤ヶ谷古墓は、まだ墓域の全容が明らかになっているとは言えないけれど、おそらく多義的機能のみられる火葬墓域の中核地として把握すべき発掘内容を提示しているとみて大過ない。

今後、旧地形を考慮に入れつつ、周辺地域の確認調査に期したい。(森岡)



第28図 古代墳墓の葬送儀礼(過程)復元と遺物の多様性モデル〔小林1999から〕



第29図 大阪府柏原市田辺古墓 A号墓墓域機能復元図 [小林1999から]

小林義孝の問題意識をもった復元により、田辺古墓も火葬墓が単に群集して墓域を形成しているだけでなく、機能を異にする火葬関連施設がシステムティックに配置されたものとして理解されるようになった。

3. 文献史料にみられる古代芦屋地方の氏族動向

藤ヶ谷古墓が営まれた8世紀の中頃は、奈良時代の文献史料のいくつかに古代芦屋に関連する記載がみられる。次にそれらを瞥見し、とくに被葬者を考える手立てともなる氏族の動向をみておきたい。

天平19年(747)の『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』(大日本古文書 第二巻)には、「摂津国菟原郡参拾壹町陸段式部捌拾捌歩」とみえ、法隆寺の寺領が芦屋の地を含む古代摂津国菟原郡の一角に存在したことがわかる。芦屋廃寺が現存する菟原郡内唯一の古代寺院であることからすれば、この寺領というのが芦屋廃寺近辺にあったことも十分考えられてよい。

『続日本紀』巻第廿六によれば、天平神護元年(765)正月七日の条に「己亥、……(中略)……外従五位上葦屋村主刀自女、長谷部公真子、壬生連子家主^{〔父〕}、従七位下藤野^{〔別〕}真人虫女、无位藤原朝臣伊久治、……(中略)……従六位下若桜都朝臣伊毛並従五位下……(後略)……」とみえ(『新訂増補国史大系』第二巻)、「葦屋村主刀自女」と称される女性が登場し、直ちに『新撰姓氏録』(『新校群書類従』巻第四四八)「摂津国諸蕃」にみえる「葦屋村主 百濟國人意實荷羅支王之後也 村主 葦屋村主同祖、大根使主之後也」の記述が想起される。この葦屋村主刀自女が摂津国菟原郡出身の女性の可能性高いことが論じられているが〔武藤・松原1976〕、菟原郡葦屋郷に出自する蓋然性も高いと言え、その身分が問題となるであろう。

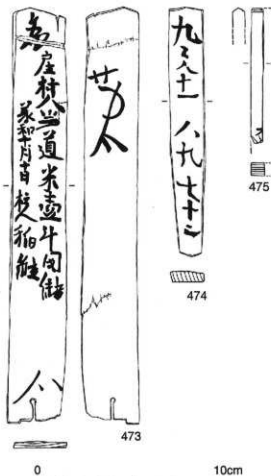
これについては、〔武藤・松原1976〕が既に采女出身者を推定し、「地方出身者の女性で位階を得ることのできる一般的状況は、彼女が采女として中央へ出仕し、後宮の女官となる場合が考えられる」としている。

これと同年の天平神護元年(765)五月九日、『正倉院文書』(『大日本古文書』第五巻)には、「内堅従八位上勲七等葦屋倉人嶋鷹」の名がみえる。「検仲麻呂田村家物使請経文」(正集四十四)に登場するこの「葦屋倉人」については、身分以外のことがよく判らないけれど、平城宮跡において出土している召文木簡に「葦屋掠人」が見い出されるのが注意される。公表の木簡は2点あり、1点は和銅6年(713)の召文木簡で、使者葦屋掠人大田が食料および馬を与えられて大和国在住の律令官人9人を召換するため使者として赴くものである(平城宮第44次調査溝SD5785出土資料)。いま1点は「□位下葦屋掠□」と記され、「葦屋掠人」が復元し得、「初力位」と推定される下級官人が実在し、木簡年代が728~770年頃に比定されている(平城宮第32次補足調査溝SD4100出土資料、7425木簡)。根拠資料は、前者が〔鬼頭1988、木簡学会編1990〕、後者が〔奈良国立文化財研究所1997〕で、〔山本・阿部・中谷2002〕にもわかりやすい形の紹介がなされている。『続日本紀』神護景雲3年(769)六月七日条にみえる「摂津国菟原郡人正八位下倉人永守等」に対する「大和連」の賜姓記事(『続日本紀』巻第廿九、『新訂増補国史大系』第二巻)とも関連する。「倉人」が菟原郡内在住者で正八位下という位階をもつ人物として現れ、これを筆頭とする十九人が大和連姓を授けられたことを証し、渡来系氏族とみられている〔武藤・松原1976〕。

地域をより限定した掠人の動きとしては、神戸市東灘区深江北町遺跡（第9次調査）で最近発掘された承和年間（834～847）の支給伝票木簡は甚だ重要であろう（第30図）。

表面には「甚戸主掠人安道米壹斗国儲 承和十月十日掠人稻継合・」、裏面に「勘合」と墨書されたもので、「戸主の掠人安道に対して国儲より米壹斗が支給されたことを承和（年次不明）十月十日に掠人稻継が証明したもの」との解釈が示されている〔山本・阿部・中谷2002〕。厳重に勘合のくり返される特徴的な木簡で、「菟原郡葦屋郷内での米の受け渡しを物語る木簡として評価」されている。『新撰姓氏録』（『新校群書類従』巻第四四八）の「摂津国諸蕃 起石占忌寸、盡荒々公、廿九氏」に出てくる「蔵人 石占忌寸同祖、阿智王之後也」の「蔵人」と「倉人」とを同一氏族とみなす考えは多い〔武藤・松原1976〕。

以上、乏しい史料から本地域の氏族の動きについて、紹介しておく。（森岡）



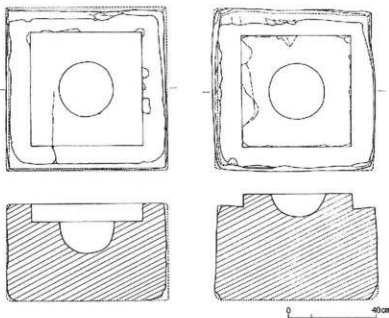
第30図 深江北町遺跡出土木簡（1／2）
〔山本・阿部・中谷2002から〕
473～475は同上の報告書番号

4. 阪神地方の古墓をめぐる

西摂地域で奈良時代の墓を探索すれば、まず筆頭にあげねばならぬものに 西摂平野の北辺、長尾山山塊でみつかった北米谷古墓がある（第31図）。

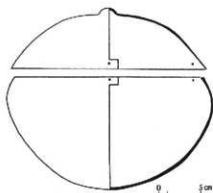
昭和6年（1931）、片岡鉄雄郎の果樹園開墾に際し発見された古墓で、翌昭和7年（1932）に京都帝国大学の末永雅雄が調査を行っている。出土地は宝塚市中山寺三丁目201番で旧小字山の内の一角に当たる。中山寺の西方、長尾山塊の丘陵裾に位置する南斜面の中腹で、2m×2m程度の平坦面に大型で扁平な石を4個方形に並べて台石とした上に石櫃を置いて周囲を凝灰製はじめ人頭大の石を方形に積み重ねて囲っていたものである。南約60cmの至近地には、須恵器平瓶1点、土師器皿2点が認められ、平瓶の中からは和同開珎6点が出土している。

石櫃はノミ跡調整痕を残す凝灰岩製で、蓋と身がセットをなして立方体を呈するものであり、蓋は73cm×73cmで、高さ42cm、身は71cm×72cm、高さ46cmを計測する。蓋は方形の刳り込みを施し、その中央部には径25cm、深さ13cmの半球形の掘り込みを入れ、金銅製蔵骨器を収納する。身は周縁を10cm前後内下り気味に刳り、やはり中央に径25cm、深さ10cmの半球形の刳り込みを



北米谷火葬墓の石櫃 蓋(左)と身(右)

第31図 宝塚市北米谷古墓石櫃実測図〔武藤・橋本1977から〕



第32図 北米谷古墓金銅製蔵骨器
〔武藤・橋本1977から〕



第33図 宝塚市平井出土の八稜鏡〔部分〕
〔武藤・橋本1977から〕

入れる。中央円球形の空間には金銅製の蔵骨器を取めて印籠蓋様に重ね合わせた重厚なつくりで、合わせた状況での総高は86cmを測る。

外面が鍍金される金銅製蔵骨器(第32図)は、鉄鉢形を呈する身とつまみをつくり出す蓋とから成り、互いの口縁に小孔3ヶ所を穿って蓋留めを可能とする。総高19.7cm。身は口径22.2cm、器高12.8cm、厚さ0.3cm、蓋は径

23cm、器高7cm、厚さ0.2cmを計測する。「掘起(ついき)で薄く均等な厚さに仕上げられ」た優品である。

これらの資料は、現在京都大学博物館が所蔵するが、石櫃と金銅製蔵骨器は、昭和31年6月に国の重要文化財に指定されている〔末永1966、京都大学文学部編1968、橋本1975、武藤・橋本1977〕。

明確な古墓はこれ1例だけであるが、いわゆる長尾山山系には、この他奈良時代の遺物を単独出土する遺跡が二、三あって注意されるとともに、その中には古墓からの出土品と覚しきものも含まれており、注意を要する。次にそれらを見ておくこととする。

旧川辺郡長尾村大字中筋字平井(現宝塚市)から出土した銅鏡1面(第33図)は、須恵器台付長頸壺との伴出が蓋然性高いものであり、鏡種は径12.8cmを測る鱗鳳八稜鏡(向鳥双竜文八稜鏡)であって、奈良時代後期以降の墳墓出土との見方もあるが〔東京国立博物館1956、中野1964、武藤・橋本1977〕、根拠がないともされる〔橋本1975〕。唐式の銅鏡は他に中山寺東方の勅使川の谷でも出土しており、周辺では須恵器の散乱片とともに径約1.3m、深さ0.3mの浅い焼土坑や炭

化物の堆積が認められるので〔高井1970、武藤・橋本1977〕、関連性を考えれば、奈良時代の火葬施設を念頭に置く余地はあるようである。ちなみに、鏡背文様の不鮮明なこの唐式鏡は「一種の海獣葡萄鏡」とされていたが〔橋本1975〕、その後、葛野豊によって小型の海獣葡萄鏡と再認識されている（第34図）〔葛野1990〕。



第34図 勅使川遺跡
出土の海獣葡萄鏡
（高井悌三郎提供）

また、昭和19年（1944）の話になるが、旧川辺郡西谷村大字切畑長尾山2番地11（現宝塚市）の河崎省三郎において、長尾山東南麓の緩斜面開墾中に出土した銭貨が注意をひく。地表下60cm程から出土したという銭貨の内容は緡銭二連で43枚を数え、すべて皇朝銭である。その内訳は、和同開珎（初鋳和同元年〔708〕）7、万年通宝（初銭天平宝字4年〔760〕）12、神功開宝（初銭天平神護元年〔765〕）24の3種43枚と報告されているが〔角田・梅原1946、橋本1975〕、周辺で採取されたとされる奈良時代の須恵器片2についても、併せ考究の余地ある資料といえよう〔京都大学文学部編1968、武藤・橋本1977〕。

以上のように、西摂平野の北辺、宝塚市域の長尾山系では広い範囲にわたって奈良・平安時代の遺物の単独出土例が認められ、昭和41年（1966）、宅地造成に先立って発掘調査された勅使川須恵器窯跡（第35図）や近年解明の手が加わった川西市栄根寺廃寺（寺畑廃寺）の存在などに留意すれば、西摂地域において古代に独特の歴史空間を構成していたことが理解されよう。

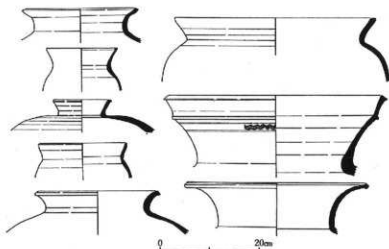
次に西方六甲山系、とくに芦屋地域を含む山地南麓部に目を移してみよう。

藤ヶ谷古墓は、芦屋市内では火葬墓確認の初例として注目すべき存在であるが、全く前例がなかったとは断言できない。あくまで仮説の話になるが、市内にはかつて四ツ塚と呼ばれた遺跡があり、古墓の存在を示唆する内容をもっていたからである。

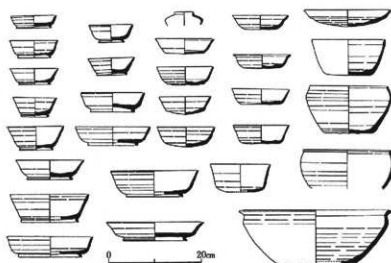
四ツ塚は、現在その姿を全く失っているが、『阿保親王御廟詮議』収載の絵図（山口県文書館所蔵）に描かれており（第36図）、『摂州国菟原郡蘆屋庄打出村阿保山親王寺縁起』には、「御墓近辺之地名」として「宝永年中御墓近辺より掘出し候宝物」が掲げられ、「一石帯の石五ツ」などの記載があり、「石帯ノ石ノ図、鼠色ニシテモクメ有之、図ノ如キ玉ツイハ水浅黄ナリ、其数五ツ、御廟ノ傍ニ小冢四ツ有之、其中ヨリ掘出之、宝永年間ノ事ナリ」とみえる。

『打出史話』〔天王寺谷1940〕には、「明治の中頃まで、字広野一番地（寺田邸内）・字花園十四番地（寺田邸前自動車庫の南側）・字花園無番地（元金原持地で寺田自動車庫前の十字路を東へ約二十間位道路敷の中央）・字花園三番地（藤沢邸北側）の四箇所に、それぞれ大なる自然石で疊んだ石室を有する一堆の古墳があった。元親王寺の所属であったが、故あって個人の有に帰し、漸次取壊されて道路又は宅地となった。」と記され、位置や構造、経緯などきわめて具体的に描写されている。

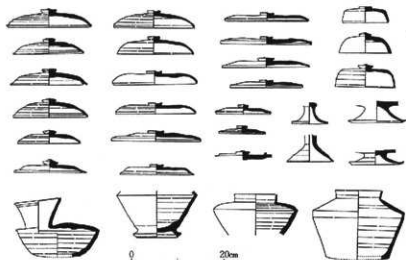
これらを手懸りにその位置を推定すると、阿保親王塚古墳の北東約100m付近となり、現在は閑静な住宅街の広がる場所であり、翠ヶ丘丘陵の稜線上を選地していることになる〔勇・藤岡1976〕。そして、それに基づいた四ツ塚の推定位置が今日、遺跡分布地図にも反映されてい



勅使川窯跡出土の遺物実測図（1）「兵庫県埋蔵文化財調査集報」1による



勅使川窯跡出土の遺物実測図（2）「兵庫県埋蔵文化財調査集報」1による



勅使川窯跡出土の遺物実測図（3）「兵庫県埋蔵文化財調査集報」1による

第35図 宝塚市勅使川窯跡出土土器〔武藤・橋本1977から〕

る〔森岡 編1986、森岡・白谷・和田 編1993、森岡・竹村 編2001〕。

出土した石帯については、現在市内南宮町に所在する親王寺が所蔵しており、〔武藤・村川1971〕などに考古学的観察の具体的記述をみる。当初、この石帯に関しては、元禄4年（1691）の阿保親王墓周濠改修時に銅鐸1口、鏡数面とともに出土した所伝がみられたが、前述した史料以外

に、毛利家文庫日録五（山口県文書館所蔵）の「絵図五」中の「兵庫親王寺藏石帯之図」がみられ、「石帯、石帯ノ石ノ図ネズミ色ニシテモクメ有之図ノ如キ玉ツイハ水浅黄ナリ 其数五ツ御廟ノ傍ニ小冢四ツ有之 其中ヨリ掘出ス 宝永年間ノ事ナリ」とあって、やはり親王寺近くの四ツ塚の一つから宝永年間（1704—1710）に発掘されたことが記されている〔武藤・有坂・末中1986〕（第37図）。

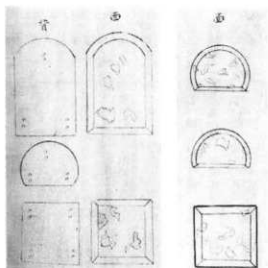
これらのことより、石帯の由来は間違いなく四ツ塚にあり、四ツ塚周辺ではこれまでに古墳時代後期の須恵器も伝存品があって、群集墳の一部とも推定されているが〔森岡1992b〕、石帯の年代は奈良時代末～平安時代前期を指向するものであって、これらに重複して火葬墓などが遺存した疑いも否定できないのである。なお、石製鈿帯5点については、平成3年度、芦屋市立美術博物館において特別展『古墳と伝承』展の展示・企画を行い〔森岡・明尾・和田1993〕、親王寺より一時借用した関係から、筆者も観察と測図の機会を得ており、材質が滑石製と覚しきこと注記している。近い将来、公表したいと考えている。

なお、参考までに記しておくが、市内出土の鈿帯はこれまでに三条九ノ坪遺跡（第2地点）、六条遺跡（第13地点）、芦屋庵寺遺跡（第45地点）、月若遺跡（第19地点）などで出土例がある。

（森岡）



第36図 阿保親王墓の図（『阿保親王事蹟詮讀』所載）
（山口県文書館所蔵毛利家文書）〔芦屋市1986〕



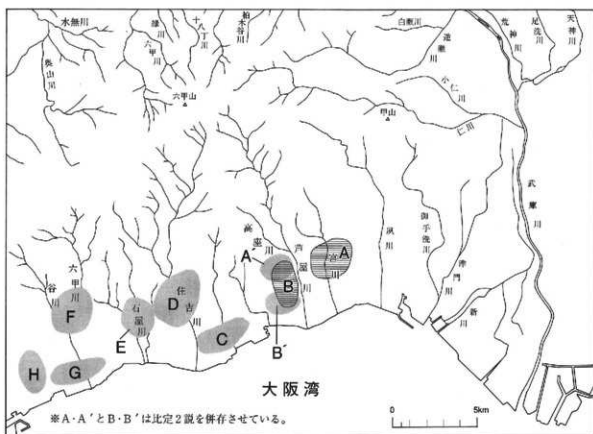
第37図 毛利家文庫日録五（山口県文書館蔵）
「絵図五」中の「兵庫親王寺藏石帯之図」
〔芦屋市1986〕

5. 考古学と古代史からみた摂津国菟原郡東部の8世紀史と藤ヶ谷古墓の占める位置

8世紀から13世紀初頭にかけての畿内では約750例の中世以前の墳墓事例が数えられ、古代火葬墓に絞れば少なくとも570の事例があるという〔海邊1999〕。本報告では、それらに芦屋市域での一例を加えたにすぎないけれど、長らく空白域であった阪神地方の市街地で平安時代以前の火葬墓が初めて構造的に確認された意義はすこぶる大きい。

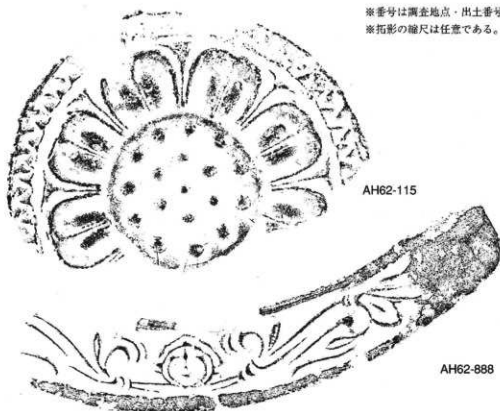
奈良時代に入って日本列島に導入された火葬墓は、律令国家の厳しい規制の下に営まれたごく限られた階層の人々の墓である。古墳とは異なり、高貴な墓の主であったとしても墓域には強度の限定が加えられ、定められた土地以外の占有を禁ずる詔が出されている（『続日本紀』慶雲三年〔706〕三月十四日条。……但氏々祖墓及百姓宅邊。栽樹為林。并周二三十許歩。不在禁限）。

また、『養老喪葬令』には次の有名な規定があり、よく知られた存在である。「凡そ三位以上及び別祖・氏宗は並びに墓を営むことを得。以外はすべからず。墓を営むことを得といえども大歳せむと欲せば聴せ」。三位以上の位階者、分かれた氏の始祖、各氏上は造墓を許され、そ



第38図 摂津国菟原郡構成郷・郷心想定図

- A 賀美郷 B 葦原(屋)郷 A' 賀美郷 B' 葦原(屋)郷 C 佐才郷
D 住吉郷 E 覚美郷 F 天城郷 G 津守郷 H 布敷郷

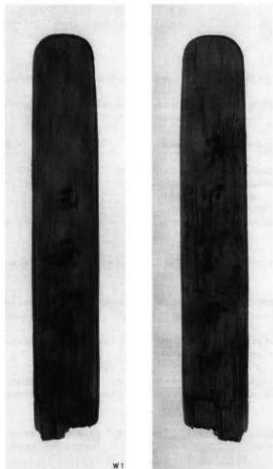


※番号は調査地点・出土番号を示す。
※拓影の縮尺は任意である。

第39図 芦屋鹿寺創建期軒瓦（上：面邊鋸歯文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦〈7世紀末〉
下：均整忍冬唐草文軒平瓦〈7世紀末〉）〔寒川・森岡・竹村2001から〕

れ以外の造墓の禁止が国家により厳格にうたわれている。火葬が風習として一斉に野放しに受容されたものではないことは明白である。したがって、今日、20年程前に比べると隔世の感がするぐらい増加した火葬墓が、依然として導入の社会的階層や被葬者の地域での性格を問題とすべきものであることは疑いない。さらに一方で、すこぶる地域偏差も伴っている。大阪246例、奈良140例以上に対し、京都は17例、兵庫は9例と著しく少ない〔渡邊1999〕。本例は極端に資料の貧困な兵庫県下の実例の一つ加えたわけであるが、ことに芦屋地域では実態を現した初めての例となり、最大の関心がその立地と被葬者像に集約される。そこで以下では、8世紀を前後する時期の摂津国曳原郡東部地域のようなすを、主として考古学上のデータと古代の文献史料・出土文字史料を並用しながら素描し、藤ヶ谷古墓の性格や成立要件に少しでも近づくためのよすがとしたい。

天平11～12年（739～740）以降、古代国郡郷制下の摂津国曳原郡内には、西方から布敷・津守・天城・覚美・住吉・佐才・葦原（葦屋）・賀美の八郷がそれぞれ存在したが（『倭名類聚抄』巻六、摂津国第七十二）、その位置関係についての定見は、落合重信の考証〔落合1989〕を除いてあまりない。そこで、〔森岡2002a〕などの考証を加味して郡内の郷配置を考えて概念図を作成し、異同を整理してみた（第38図）。本書で報告した藤ヶ谷古墓と関わる古代郷は、葦屋・賀美の郡域最東部に所在する二郷であるが、落合は前者を神戸市青木・深江・芦屋市浜



第40図 芦屋市三条九ノ坪遺跡出土の日本で
2番目に古い木簡〔高瀬編1997から〕

芦屋一带とみ、後者を芦屋市津知、西宮市森具付近と推定している。筆者の考えはやや異なり、既にいくつか論証したように、その郷心所在地はやや柔軟性をもっとらえている〔森岡1999c・2001・2002a〕。いま、この点を鑑みて、藤ヶ谷古墓の所在地をこの二つの郷の郷域との関係で限定付けずに先に進みたい。なんとすれば、その設営時期からみて、菟原郡全体を背景とした広い地域と直接関与する可能性を強く抱くからである。

摂津国の西部に位置する菟原郡は、摂津国管下13郡の一つであり、大阪湾の北岸に面して六甲山地を背負う「中郡」に属し、東は武庫郡、西は雄伴郡（後の八郡）、北は有馬郡に接している。菟原郡に関する史料の初見は、『行基年譜』にみえる天平2年（730）の記事であり、翌天平3年（731）の『住吉大社神代記』には、「菟原郡 一町三段二百九十歩、元名雄伴国」とみえる。この点、菟原郡が8世紀初頭になってからの新設郡ないしは分割郡であった公算も高く、建郡事情や郡域については不明なことが

多い。菟原郡は畿内から山陽道に向かう東西交通上の要衝に位置し、陸路が広大な西摂平野から山と海とが迫る地形的狭窄部に一気に入る変換点といえ、とくに東辺の葦屋・賀美二郷はその典型的な地域を占めるといえる。

この地域は、近年の埋蔵文化財調査の増大と進展により古代菟原郡の中核地であったことが判明しつつある。8世紀段階の藤ヶ谷古墓出現の営力には、当然同時期の遺跡動態のベクトルが反映しているはずであり、そのあり方の具体相を重ね合わせるように点検してみよう。

まずやや遡って、7世紀後半には、当地域に芦屋廃寺が創建される。創建時に所用された法隆寺式の軒瓦は、1999年に実施された発掘調査で軒丸瓦と軒平瓦がセットになることが判明し〔森岡・竹村1999、2000、寒川・森岡・竹村2001〕、加えて新出型式の高句麗様式軒丸瓦も8世紀以前の資料として確認されている。面遠鋸齒文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦と均整忍冬唐草文軒平瓦の瓦当文様は法隆寺式としては畿内西辺でのモチーフを堅持したものであり（第39図）、文献史料に登場する菟原郡域における法隆寺鎮の存在〔鬼頭1977〕と関係なしとしない。目下のところ、郡内唯一の古代白鳳寺院であり、当初は私寺、氏寺的色彩をもっていたにせよ、8世紀に入れば、おそらく郡衙付属寺院、もしくは郡衙周辺寺院といった性格を帯びていたこと

は推測に難くない〔森岡2001・2002a〕。用語としては不適切かもしれないが、いわゆる「郡守」としての存在と造寺集団の隔絶した勢力の持続力、影響力は評価すべきであり、その後8世紀を通じて瓦当文様が官寺、都宮との結び付きをもってくる点もその公的機能性をなにか物語るものである。また、所用軒先瓦にみられるネットワーク性は郡内にあっては均整忍冬唐草文軒平瓦や単弁十九弁蓮華文軒丸瓦に、郡を超えた広域性では剣状文花軒丸瓦・軒平瓦のセットに見い出され、8世紀末葉には東は大阪府豊中市の金寺山廃寺（新免廃寺）、西は神戸市長田区房王寺廃寺（室内遺跡）、そして南は大阪市四天王寺に至るまで広がっている事実を確認することができる。言わば、摂津の国域にその広がりをみせるようである。

一方、郡衙については、菟原郡の場合、長期にわたって神戸市東灘区の郡家遺跡の存在が注目されてきた。しかし、近年ではその消長や中心時期の策定の問題などから再検討もなされ、芦屋市域の側でその成立期を考える見解も開陳されている〔森岡2001・2002a〕。この点注目すべきは三条ノ坪遺跡における「壬子年」（白雉3年、西暦652年）銘木簡（第40図）の出土があり〔高瀬編1997〕、この地の律令期中葉に至っての公文作成を伴う実務処理能力の早熟度をうかがわせる。行政拠点としての評価の存在をなにか暗示する資料ともとれ、実務遂行機関が芦屋廃寺の隣接地に誘致された蓋然性も高いのである。それは8世紀に至れば、出土文字史料の形で厳然と姿を現わし、郡領「大領」「少領」の往来を証す墨書土器が寺田遺跡において見い出され、奈良時代後期から平安時代前期にかけての掘立柱建物群などの遺構・遺物の消長にも郡衙としての時期的様相を想定する意見も出されている〔森岡2001・2002a〕。

次いで、古代交通の面からみれば、当芦屋地域に葦屋駅が実在したことはさらに本地域官衙群の連携状況を補強するものである。『続日本紀』によれば、和銅4年（711）に摂津国嶋上郡上郡大原駅、嶋下郡殖村駅の二駅がみえるが、菟原郡には駅家の存在をうかがわせる史料がみえない。葦屋駅が文献に登場するのは、『延喜式』巻二八、兵部省の「諸国駅伝馬・畿内」の項にみえる「摂津国駅・草野、須磨各十三正、葦屋十二正」の記載（『新訂増補国史大系』第26巻）からで、律令制下、七道では三十里（およそ16～20km、現行の約5里）ごとに設置をみた駅家の一つとして姿をみせる。都と太宰府とを結ぶ大路に相当する山陽道そのものの初見史料はかなり遡り、『日本書紀』天武14年（685）九月戊午条に「直広肆佐味朝臣少麻呂を山陽の使者と為す」とある記事が出发点をなすようである〔高橋1996〕。

芦屋は西国交通路の要地であり、畿内西端の重要拠点として位置を恒常的に保ってきたところである。葦屋駅は東北方約18km（四里半）離れた草野駅（現大阪府箕面市萱野付近）と西方約18kmの距離を置く須磨駅の中間点に存在し、10世紀段階では摂津国内の駅数3の中核としても機能していた。いま、その所在地を特定することは数説あって〔森岡2001が紹介〕、定かでないが、多くの研究者の見解が芦屋川左岸地域より右岸地域の方に比重を移し始めている点は見逃せない〔森岡2002a〕。

最近では、『驛』の墨書土器が多数出土した深江北町遺跡がにわかに注目され始めており〔山本・阿部・中谷2002、兵庫県立歴史博物館2002〕、葦屋郷の所在場所とも関連して、近在に葦

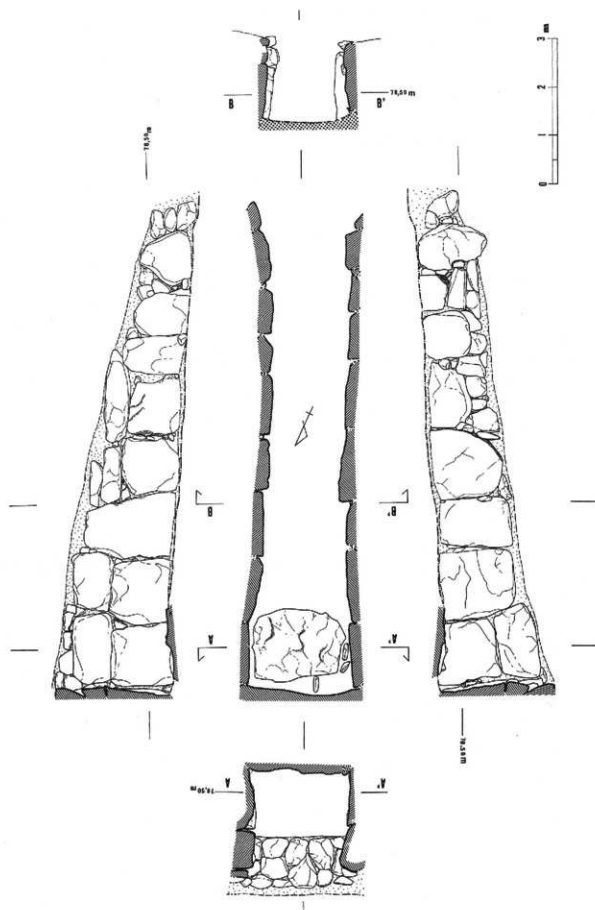
屋跡跡がみつかる蓋然性が強まりつつある。〔森岡2001・2002a〕などでは、葦屋駅前田町内所在説が力説されており、これまで足利健亮〔足利1978・1992〕や高橋美久二〔高橋1982・1992・1995〕などが唱えていた諸説とともに林立するところとなっている。ただし、官衙域は芦屋川右岸の扇状地上で南北方向にベルトをなすわけでもなく、むしろ、扇状地の高位部と末端の低位部二ヶ所に大きく分離する官衙ブロックが存在するとみなす方が理に即しており〔森岡1999c、森岡2002a〕、古代山陽道の通過点想定も大別すれば、この官衙ブロックに対応した考証に収斂してきたように受け取れる。

以上、きわめて雑駁な概観となったが、古代摂津国菟原郡の政治的経済的さらに社会的な中枢を暗示する郡衙・寺院・駅家の三つの施設が芦屋川右岸域の扇状地の上を中心とする高燥な場所に集中的な営みをみせることを予測した。換言すれば、菟原郡の政治上、交通上の拠点が東部地域にその重心を置くことを説いたわけであるが、この動きはその直前の地域動向を反映する終末期古墳の遺存状況や祭祀遺跡の二、三にも表出されているようである。

その具体例として特記すべき存在が、城山・三条古墳群の中にみられる7世紀代の古墳であり、三条5号墳〔森岡1985〕・旭塚古墳〔森岡1984〕・城山3号墳〔明元1991a・b、森岡2002a〕・城山18号墳〔森岡・竹村1997〕などが注目を要する終末期古墳といえよう。三条5号墳は外護列石をもつ小型の方墳で無袖式の小石室を構築しており、三条古墳群中最も年代の下がる古墳の一つである。旭塚古墳は城山古墳群中、山芦屋古墳に次ぐ巨石墳であり、岩屋山式石室のプロトタイプとみなされる地方型式の大型横穴式石室を内蔵する。築造時期は7世紀中葉を前後する（第41図）。城山3号墳は鈍角の隅角をもつ外護列石を有する多角形墳で、ことによれば、宝塚市に所在する中山荘園1号墳のような八角形墳になる終末期古墳の可能性がある。その立地は城山南西麓部の急傾斜地にかかり特異であり、眺望の良好な地点を占めている（第42図）。また、同古墳群中最南端の景勝地に築かれた城山18号墳は、完好な副葬土器類に恵まれ、7世紀後半の天武朝期前後に下降する芦屋市内で最も新しい古墳であることが判明しており、石室構造も単体埋葬の堅穴系になる小石室の公算が高い。

これら終末期の古墳は、東方六龍荘台地上に群がる八十塚古墳群中にも数多く存在するが〔勇・藤岡・前田・古川1978、森岡1979〕、古墳の形態や石室構造を比較して、明らかに城山・三条古墳群の個性と特殊性がうかがえ、被葬者についても律令官人に連なる階層と系譜をもち合わせている状況を看破し得る。評制施行が論議されている7世紀後半に芦屋川の上流域に奥津城を構えるこれらの古墳は、それまでの群集墳の造営集団からは一歩も二歩も抜き出た個人墓の性格が強く、8～9世紀に形成をみた官衙群を眼前にする親縁性と緊密度の高い立地条件を具備するとともに、一部には時間的併行関係をもつことも考えられてよい。

芦屋川の右岸域のかような遺跡動態は、ミニチュア炊飯具を副葬する寺ノ内古墳（A・B墳）〔長町1928、島田1928、島1929〕の築造された6世紀前半、山芦屋古墳が造営された6世紀後半～末まで遡ることも十分あり得、さらに遡上して打出小槌古墳が造られた5世紀後半～末までたどることによって、当芦屋地域全体に還元することも可能である。



第41図 芦屋市旭塚古墳石室実測図〔武庫川女子大学考古学研究会1984から〕



石室及び外護列石（南から）



横穴式石室（南から）



石室及び外護列石（東から）



石室及び外護列石（天井石除去後、東から）



横穴式石室（南から）



横穴式石室解体状況



床面棺台検出状況（南から）



甕形土器出土状況

第42図 芦屋市城山3号墳（終末期多角形墳）墳丘・石室・遺物出土状態〔明元1991b から〕

こうした歴史動向の一環として、初めて藤ヶ谷古墓の営みが理解できるのであり、今はそれがうって変わって芦屋川左岸域の芦屋台地の見晴らしのきく絶好の土地を選んだ点に最大の注意を払っておきたい。とくに芦屋川上流域とはまた異なったロケーションの展開があり、8世紀に入ってから墓域の転換か、この地域に存在した既存の群集墳（天神山古墳群・笠ヶ塚古墳群）とに系譜関係があるのか、当地の古代史に投げかける問題は少なくない。

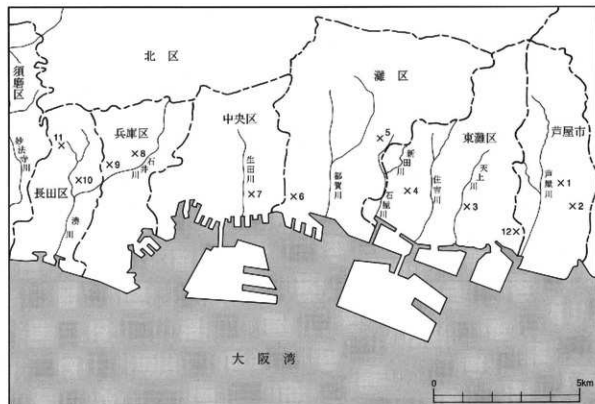
この火葬墓は、以下の諸点を特徴とすることを改めて指摘したい。

① 古墳の最終埋葬との間に大きな時期差を有して築墓されるとともに、その造営年代の一点が平城宮Ⅱ段階、716年前後を略年代とする時期にあり、甕亀〜神亀年間と深く関わる。奈良時代でも8世紀前半頃に造られたものである。実年代も716〜730年の間に特定し得る。

② 墓は火化所となる一角から蔵骨器の埋設に至るまでの諸過程（火葬<荼毘>→拾骨・収骨→納骨→造墓）を踏む葬地であり、一定のエリアで墓葬活動を展開するとともに、単独墓ではなく、複数の墓からなる集団墓の様相もみせる。

③ それまでの古墳とは造営方式を異にする官人層の墳墓である可能性を濃厚にもち、その広がりから一族墓的なあり方を示唆するとともに、8世紀前半頃にその社会的位置を急激に上昇させる郡司層、言い換えれば、在地出身の最有力者を被葬者像として描き得る。

④ 墓域としての選地が、地縁のみられる土地への執着からなされたのか、公葬地的なエリ



第43図 六甲南麓地域 古代〜中世火葬墓・経塚など分布図〔口野1997, 森岡2002 他参照〕

- 1 藤ヶ谷遺跡 2 四ツ塚遺跡 3 本山遺跡 4 郡家遺跡 5 滝ノ奥遺跡 6 岩屋北町遺跡
7 吾妻遺跡 8 清水経塚 9 二本松古墳経塚 10 長田神社境内遺跡 11 池田経塚
12 深江北町遺跡

◆ 第7章 周辺古代史からみた藤ヶ谷遺跡における古代火葬墓出現の意義 ◆

墳墓名	所在地	立地	墳墓形態・造営 (941m)	内部構造	共伴遺物	備考	年代
上津島南浦跡遺跡	豊中市・上津島	低高地		土師器Ⅱ、須恵器Ⅰ、須恵器Ⅱ		須恵器は東瀬田系	9 後
野塚古墓	豊中市野塚			須恵器Ⅱ			9 前
寺山古墓	豊中市野塚			須恵器Ⅱ		後段露出部	10末～12初
寺山古墓	豊中市野塚山			須恵器Ⅱ			8 前
白鳥遺跡	箕面市白鳥			須恵器Ⅱ、黒色土師器		箕面市峰土資料館蔵	
吉田火葬墓	吹田市岸部	南斜面	方形1.2×1.2×1.0	須恵器Ⅱ			8 末
荻原山古墓	茨木市安成大塚山			三彩陶器類		伝承	
藤久古墓	茨木市藤久庄			須恵器Ⅱ			8 中
千原丘Ⅰ丁目遺跡	摂津市千原丘		方形0.4	須恵器Ⅱ			
古曾部古墳	高槻市古曾部町			土師器Ⅱ・壺Ⅱ・埴輪Ⅱ・須恵器Ⅱ・埴輪Ⅱ		古墳Ⅱ・壺Ⅱ・埴輪Ⅱ・須恵器Ⅱ・埴輪Ⅱ	8 前
古曾部古墳	高槻市古曾部町			土師器Ⅱ・壺Ⅱ・埴輪Ⅱ・須恵器Ⅱ・埴輪Ⅱ		古墳Ⅱ・壺Ⅱ・埴輪Ⅱ・須恵器Ⅱ・埴輪Ⅱ	8 前
古曾部・芝谷遺跡土師器Ⅱ S 1	高槻市古曾部町		円形0.3×0.4	土師器Ⅱ・埴輪Ⅱ			9 後
石川平足墓	高槻市石川上町	丘陵南斜面		木炭	墓内・数珠・土師器Ⅱ・木製小瓶・刀子・土師器Ⅱ	木炭・墓誌 (762年)	8 中
岡本山古墓群 A 地区 No. 1	高槻市岡本町			須恵器Ⅱ・埴輪Ⅱ		石函	8
岡本山古墓群 A 地区 No. 2	高槻市岡本町			須恵器Ⅱ・埴輪Ⅱ		石函	8
岡本山古墓群 A 地区 No. 3	高槻市岡本町			土師器Ⅱ・須恵器Ⅱ		石函	8
岡本山古墓群 A 地区 No. 4	高槻市岡本町					石函	8
岡本山古墓群 A 地区 No. 5	高槻市岡本町			土師器Ⅱ・壺Ⅱ	青銅製神具	石函	8
岡本山古墓群 A 地区 No. 6	高槻市岡本町			土師器Ⅱ		石函	8
岡本山古墓群 B 地区火葬墓 1	高槻市岡本町			埴輪Ⅱ・須恵器Ⅱ		木炭	9
岡本山古墓群 B 地区火葬墓 2	高槻市岡本町			木炭	刀子・緑釉陶器・黒色土師器		9 後～10
岡本山古墓群 B 地区火葬墓 3	高槻市岡本町			木炭・須恵器Ⅱ	釘		10末～11初
山崎古墓	島本町山崎			埴輪Ⅱ			平安
大塚城墓 2	大阪市中央区大塚	台地	円形0.8×0.6×0.2	須恵器Ⅱ	海獣雲文瓦		8 中
大塚城墓 4	大阪市中央区大塚	台地	方形0.6×0.6×0.2	木炭	水晶製丸玉	丸玉は火熱を受ける	8
西神高4号遺跡	神戸市西区平野町大塚	丘陵南斜面		土師器Ⅱ・須恵器Ⅱ			8 末～9 初
西神高5号遺跡	神戸市西区平野町大塚	丘陵南斜面		須恵器Ⅱ			8 末～9 初
北別府遺跡火葬墓	神戸市西区伊川谷町	低段段丘上	隅形1.6×0.8		須恵器Ⅱ	一辺5mの方形の溝あり	11 前
北別府遺跡骨焼跡	神戸市西区伊川谷町	低段段丘上		土師器Ⅱ・埴輪Ⅱ (2基とも)		2基あり、火葬墓Ⅱの南で検出	10後～11
西三浦古墓	芦屋市西三浦町			瓦方2・丸形2・埴輪Ⅱ		江戸時代土師器Ⅱ	平安
北米谷古墓	宝塚市北米谷	丘陵南斜面		石函・金銅製金具	和同開珎・低土師平瓦	石函・石函は埴輪Ⅱ	8 前
平井古墓	宝塚市中山手			須恵器Ⅱ・埴輪Ⅱ	高槻市古曾部町		8
赤カリー古墓	三田市赤カリー			土師器Ⅱ			8 末

第2表 摂津国火葬墓検出遺跡一覧表〔海邊1999から〕年代の数字は世紀を表わす。

アがこの頃には当地域にも存在したのか、果たして官人たちの本貫地に遠隔の地から帰葬されたのか、あるいは聖地として生活域と離れて選定されたのか、律令期における地方支配の実態との絡みが甚だ判りにくい現在、確かな考え方を提出することはできないが、集落域や官衙域とは隔絶した場所を墓所として意識的に選んでいる。

⑤ 墓の構築材にやや離れた地域に存在する芦屋廃寺の造営との関連性を示す所用瓦（平瓦）を断片ながら使用している。

さて、①の年代を示す古代の火葬墓は、神戸市東灘区から同市長田区にかけての表六甲南麓部の地域に限れば、今のところ全くない。最も至近地にある火葬墓の実例は、神戸市灘区滝の奥遺跡の火葬墓10数基であるが、これらの時期は室町時代に下降するもので中世の墓である。

土坑墓や木棺墓については、神戸市東灘区本山遺跡（平安時代の木棺墓）、郡家遺跡（12世紀の土坑墓）、灘区の岩屋北町遺跡（鎌倉時代の土坑墓）、中央区の吾妻遺跡（平安時代前～中期の木棺墓）、長田区長田神社境内遺跡（12世紀前半の木棺墓）などが散見されるが、多くは12世紀以降のものであり〔口野1997〕、芦屋の事例とは大きく時期を異にしており、かつ一般集落の中でのあり方を示す点でも異質である。

摂津国全体に目を転ずれば、墳墓のあり方に変質をきたす11世紀頃までを射程に入れた古代の火葬墓は、全部で22遺跡33ヶ所が確認されており、豊中市・吹田市・茨木市・摂津市・高槻市・島本町など東摂に多くが偏り、一部大阪市域など南摂にも存在するが、西摂では先の六甲南麓地域と長尾山系を除けば、神戸市西区西神第48号遺跡・第89号遺跡、北別府遺跡や三田市奈カリ与古墓をあげるにとどまる〔海邊1999〕（第2表）。

この海邊博士の労作から造営時期を基数単位でみてみると、8世紀末～9世紀初頭2基、9世紀前半1基、9世紀後半2基、9世紀後半～10世紀1基、10世紀末以降3基、平安時代1基を数え、8世紀代の例が16～18基の過半数を占めることがわかる。藤ヶ谷古墓とはほぼ同時期で骨蔵器に須恵器壺を用いている点で類似するのは、豊中市南刀根山に所在する寺山古墓、高槻市古曽部古墳の石室内再利用例である火葬墓、茨木市宿久庄古墓、高槻市岡本山古墓群A地区No.2・No.3、大阪市中央区大手前のお城墓2など比較のみられ、8～9世紀全体では須恵器壺類を内部構造とするものが目立っている。また、須恵器や土師器を骨蔵器に使用する割合は248例あって、火葬墓全体の約4割に達するという〔海邊1999〕。⑤の指摘と関連して、外柵をなす施設については、特殊なもの階層的に高いと考えられるものに凝灰岩製外容器の存在がある。他に石囲い施設を構築する例などもあるが、藤ヶ谷古墓はあくまで状況証拠的ではあるものの、大阪府柏原市田辺墳墓群のごとく平瓦で囲柵した可能性が高い。これらの外部施設も8世紀代に限られるとする海邊の指摘を守ったものであり、向後、構造的な復元研究が要請されよう。

②は小林義孝の一連の近業を念頭に置いた発掘結果であるが、本地域でも同様に実証できた意義は大きく、今後の調査活動に向けての指針ともなる。火葬は通説では文武天皇4年(700)に僧道照によって始められたといわれ、孝徳天皇白雉4年(653)に使に随行して入唐を果たし、玄奘三蔵に愛されてその業を受けたとの伝えのある高僧であり、遺言して示寂後その遺骸を火葬したことに始まり、「天下火葬従此而始」とみえる。その後、大宝3年(703)、持統天皇が飛鳥岡に、慶雲4年(707)には文武天皇が、養老5年(721)には元明天皇、天平12年には聖武天皇の火葬が史料に順次登場する〔後藤1932〕。こうした天皇など上位階層の火葬とは別に、③・④の問題とも絡む律令官人層を中心とする地方氏族の墓制としての火葬墓の普及は、摂津地方でも8世紀前半から顕在化し、既に概観したように、要所に特徴的な墳墓を残し

ている。腰帯具を副葬された岡本山古墓群のような歴然とした身分表徴を有する墳墓とは言い難いものの、藤ヶ谷古墓は外柵施設をもっていた公算が高く、副葬品の攪乱や削平など後世の手が加わらなければ、何らかの証左を残したやもしれない。

以上、藤ヶ谷古墓が同時期の一般集落とは距離的にも比高においても隔離された位置に営まれた歴史的背景を古代の兎原郡の東部における政治動向、遺跡のありようから素描してみた。墳墓は単独墓ではなく血縁者を埋葬する一族墓の態様をなし、さらに拡大する可能性もある。眺望に恵まれ、土地条件に優れた標高80m 弱の丘陵上のエリアを特定空間として設定し、郡司層ないしはそれに連なる8世紀の有力な地方官人が葬られたと考えられる。(森岡)

6. あとがき

震災で芦屋市は多くのものを失った。人・建物・橋・道路……。そして、公私に及ぶモニュメント。復旧活動を急ぎ、次段階での復興では新しい街並が次々と再生していった。20世紀から21世紀という新世紀を迎え、芦屋の景観は著しく変貌した。

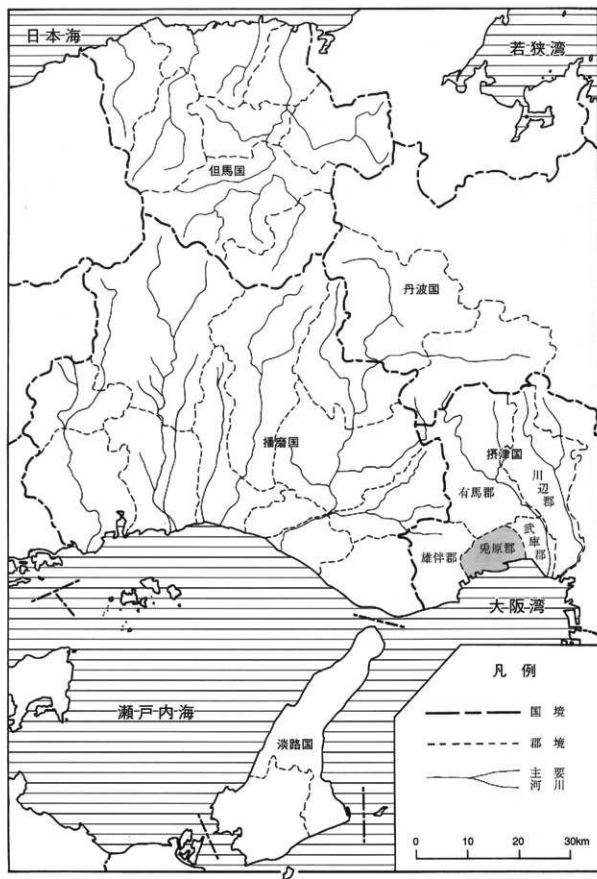
平成7年度下半期から本格化した震災復興調査で、市内の遺跡は新たに日覚めていった。それまで知られていなかった遺跡も新出したし、調査されてきた遺跡はその次数を格段と増やした。くり返し述べてきたように、全国支援や兵庫県支援を得て実施してきた地震後の復興の地で行われてきた一連の地道な埋蔵文化財調査によって、芦屋の原始・古代地域像が豊かに照射されるようになった。とくに古代史の分野では、芦屋という市域にとどまらず、「摂津国兎原郡」という律令期の地域単元をクローズアップさせ、地域の内外の連関をグローバルにとらえる眼を養うべきことを教唆するものであった。

時は今、市町村数を約40%減らす「平成の大合併」が地殻変動のごとく全国を席卷している。平成17年3月の特例期限を2年先に控え、合併を実現するグループと見送りするグループとに地方自治体の二分化が急速に進行しているように思われる。合併を経ても一極集中を回避できるよう、旧町村単位で「地域内分権」の維持を図る試みも見えかくれる。3,184ある市町村数が1,800程度に再編される見通しであることが予測されてもいる。

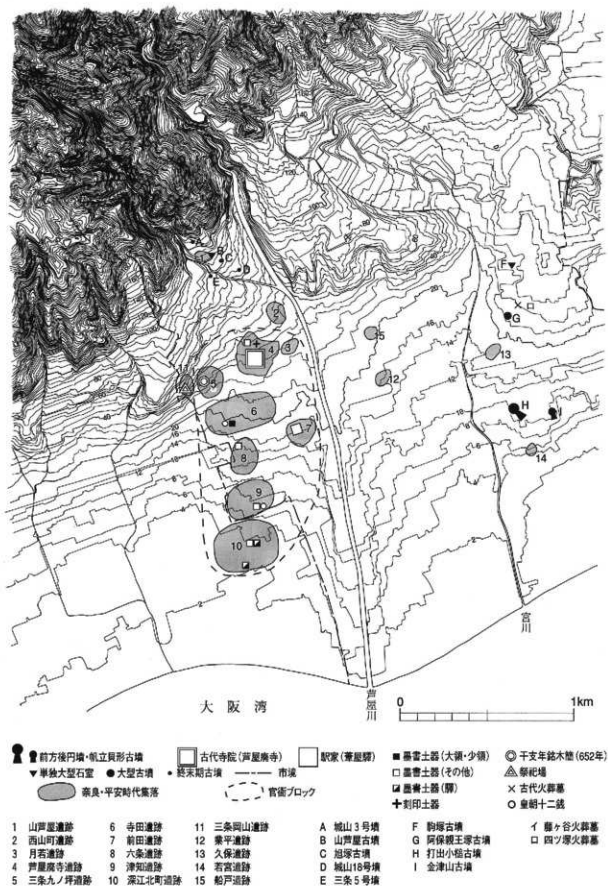
こうした現代社会の動向は、かつて急速度に行政機構づくりが進められてきた日本古代国家の律令体制下の地方行政組織の整備や改変と多少なりともオーバーラップするものがある。

さて、ふと芦屋の都市景観を眺めながら、想いを古代の原景観に馳せると、今の市街地や地形の上に幻想的に重なる古代の寺・社や驛、役所、さらに官道などがその配置とともに夢想することがあり、あたかも古代の人となって現行道路とはやや趣きを異にして通っている道を歩む気分にしほし浸ることがある。古代景観が今の国際文化住宅都市芦屋に直接つながる要素ははるかに少ないが、遺跡の配置と連続性はその際の動きを何らかの形で埋めて点線がやがて線綴へと、さらに面が語る歴史へと導いてくれる。藤ヶ谷古墓もまさにその一つなのである。

(森岡)



第44図 古代摂津国兔原郡位置図



第45図 芦屋周辺古代地域像概念図

引用・参考文献目録

- 明元知子 1991a 「〈遠報〉芦屋市城山3号墳の発掘調査(1)」『淡神文化財協会ニュース』第14号 淡神文化財協会
- 明元知子 1991b 「〈遠報〉芦屋市城山3号墳の発掘調査(2)」『淡神文化財協会ニュース』第15号 淡神文化財協会
- 秋山浩三 1999 「古代の男性墓・女性墓—奈良・平安時代墳墓の副葬・伴出品にみる性差—」『古代文化』第51巻第12号 財団法人古代学協会
- 足利健亮 1978 「摂津国」『古代日本の交通路』1 大明堂
- 足利健亮 1992 「山陽道の歴史地理的考察」『山陽道(西国街道)』『歴史の道調査報告書第2集』兵庫県教育委員会
- 芦屋市 1986 「新修芦屋市史」資料篇2
- 芦屋市教育委員会 2001 「〈公開展示説明会資料〉「寺」字刻印土器と芦屋鹿寺跡—第75地点発掘調査の成果から—」
- 阿部武彦 1984 「上代氏族の祖先観について」『日本古代の氏族と祭祀』
- 阿部嗣治 1993a 「津知遺跡の発掘調査(1)」『のじぎく文化財だより』17 淡神文化財協会
- 阿部嗣治 1993b 「津知遺跡の発掘調査(2)」『のじぎく文化財だより』18 淡神文化財協会
- 網干善教 1979 「日本上代の火葬に関する二、三の問題」『史泉』第53号 関西大学文学部史学科
- 石村喜英 1968 「古代火葬墓の研究と二、三の問題点」『日本歴史考古学論叢』第二 雄山閣
- 五十川伸矢 1996 「古代・中世の京都の墓」『国立歴史民俗博物館研究報告』第68集 国立歴史民俗博物館
- 勇 正広・藤岡 弘 1976 「古墳時代」『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 勇 正広・藤岡 弘・前田義人・古川久雄 1978 「芭蕉園の古墳」『西宮市文化財調査報告書第2集』西宮市教育委員会
- 泉谷康夫 1992 「平安時代における郡司制度の変遷」『日本中世社会成立史の研究』
- 市 大樹 1998 「九世紀畿内地域の富豪層と院官王臣家・諸司」『ヒストリア』163 大阪歴史学会
- 今里幾次 1974 「山陽道播磨国の瓦葺駅家」『兵庫県史』12 兵庫県
- 今西純朗・森岡秀人 1973 「古墳の歴史的研究」『八十塚13号墳の測量調査』芦の芽グループ考古学研究会・兵庫県立芦屋高校史学研究部
- 魚澄惣五郎編 1956 「芦屋市史」本編 芦屋市教育委員会
- 宇野隆夫 2001 「荘園の考古学」〔シリーズ・日本史のなかの考古学〕青木書店
- 梅原末治 1943 「唐鏡大観」〔京都大学文学部考古学資料叢刊第3冊〕京都大学文学部
- 岡野慶隆 1979 「奈良時代における氏墓の成立と実態」『古代研究』16 元興寺文化財研究所考古学研究室
- 岡野慶隆 1999 「「喪葬令」三位以上・別祖氏上墓の再検討」『古代文化』第51巻第12号 財団法人古代学協会
- 落合重信 1989 「増訂神戸の歴史—古代から近代まで—」通史編 後叢書店
- 海邊博史 1999 「畿内における古代墳墓の諸相」『古代文化』第51巻第11号 財団法人古代学協会
- 角田文衛・梅原末治 1946 「摂津川辺郡長尾山に於ける古鏡の出土」『西宮』第3号
- 葛野 豊 1990 「勅使川淵跡出土の唐式鏡とその同型鏡 —小型海獣帯菊鏡の鏡面処理について—」『今

- 里幾次先生古稀記念考古学論叢 刊行会
- 北 康宏 1996 「律令国家陵墓制度の基礎的研究」『史林』第79巻第4号 史学研究会
- 鬼頭清明 1977 「法隆寺の庄倉と軒瓦の分布」『古代研究』11 元興寺文化財研究所考古学研究室
- 鬼頭清明 1988 「奈良・平城宮跡(第44次)」『木簡研究』第10号 木簡学会
- 鬼頭清明 1989 「郷・村・集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集 国立歴史民俗博物館
- 木下保明 1985 「『七世紀型古墳群』について」『考古学論集』第1集 考古学を学ぶ会
- 京都大学文学部編 1968 「京都大学文学部博物館考古学資料目録」3 京都大学
- 口野博史 1997 「神戸市域の中世墓」『歴史と神戸』第36巻第3号(通巻202号) 神戸史学会
- 久保常晴・小島俊次 1970 「墓誌と蔵骨器」『新版考古学講座』第7巻 有史文化(下) 雄山閣
- 黒崎 直 1980 「近畿における8・9世紀の墳墓」『研究論集』VI(奈良国立文化財研究所学報 第38冊)
奈良国立文化財研究所
- 紅野芳雄 1940 「考古小録」西宮史談会
- 小林義孝 1992 「灰を納めた土壇」『究班—15周年記念論文集—』埋蔵文化財研究会
- 小林義孝 1994 「火葬における銭貨」『出土銭貨』第2号 出土銭貨研究会
- 小林義孝 1995 「古代火葬墓における銭貨の出土状況」『摂河泉文化資料』第44号 摂河泉文庫
- 小林義孝 1997a・1998 「古代火葬墓の第一類型(上)(下)―河内田辺古墓の再検討から―」『大阪文化財研究』第13・14号 財大阪府文化財調査研究センター
- 小林義孝 1997b 「送葬儀礼と銭貨(1)」『歴史民族学』第7号
- 小林義孝 1997c 「古代墳墓から出土する『鉄板』について」『立命館大学考古学論集』I 立命館大学
- 小林義孝 1999 「古代墳墓研究の分析視角」『古代文化』第51巻第12号 財団法人古代学協会
- 後藤守一 1931 「本邦出土の唐式鏡」『考古学雑誌』第21巻第12号 日本考古学会
- 後藤守一 1932 「墳墓の変遷」雄山閣
- 斎藤 忠 1997 「墳墓の考古学」
- 狭川真一 1998 「古代火葬墓の造営とその背景」『古文化談叢』第41集 九州古文化研究会
- 栗川 旭・森岡秀人・竹村忠洋 2001 「芦屋庵寺跡建物基壇と関わる地震痕跡」『日本考古学』第12号 日本考古学協会
- 重藤輝行・竹村忠洋編 1999 「寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書―阪神・淡路大震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果―」『芦屋市文化財調査報告第32集』芦屋市教育委員会
- 島田貞彦 1928 「本邦発見の薩形土器」『歴史と地理』22-5
- 島 之夫 1929 「芦屋の里」宝盛館
- 末永雅雄 1966 「宝塚市北米谷出土の火葬蔵骨器」『日本歴史考古学論叢』
- 高井佛三郎 1970 「勸使川臨跡発掘調査概要」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集 兵庫県教育委員会
- 高島英之 2000 「古代出土文字資料の研究」東京堂出版
- 高瀬一嘉編 1997 「芦屋市所在三条九ノ坪遺跡―被災マンション等再建事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―」『兵庫県文化財調査報告第168冊』兵庫県教育委員会
- 高橋健自 1919 「中世の墳墓」『史林』第4巻第2号 京都帝国大学
- 高橋健自・森本六爾 1929 「墳墓」『考古学講座』第21巻 雄山閣
- 高橋美久二 1982 「古代の山陽道」『小林行雄先生古希記念論文集考古学論考』平凡社
- 高橋美久二 1992 「古代の山陽道」『歴史の道調査報告』第2集 山陽道(西国街道) 兵庫県教育委員会
- 高橋美久二 1995 「山陽道の駅と駅路」『古代交通の考古地理』大明堂

- 高橋美久二 1996 「山陽道—瓦葺き白壁朱塗りの駅館」『古代を考える 古代道路』（木下 良福） 吉川弘文館
- 高浜信行・大塚富男・早川嘉一・森岡秀人・松本和也 1996 「兵庫県南部地震と六甲の土石流」『大震災—そのとき地質家は何か』（柴崎達雄・植村 武・吉村尚久編） 東海大学出版会
- 高浜信行・大塚富男・早川嘉一・森岡秀人・松本和也 1997 「兵庫県南部地震と六甲の土石流」『地表変動と遺跡の成立・破壊の関連の研究』〔文部省科学研究費基盤研究（B）研究成果報告書 新潟大学積雪地域災害研究センター〕
- 竹谷俊夫 1991 「天理参考館蔵高雲出土の陶質土器」『天理参考館報』4 天理参考館
- 竹村忠洋 1999 「Ⅱ-2. 津知遺跡の既往の調査（2）津知遺跡第4地点の発掘調査の概要」『津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書—芦屋西部第二地区土地区画整理事業（津知第2公園）に伴う震災復興調査—』〔芦屋市文化財調査報告第34集〕 芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋編 1999 「津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書—芦屋西部第二地区土地区画整理事業（津知第2公園）に伴う震災復興調査— 芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋・森岡秀人 2000 「平成11年度 国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡（第62地点）発掘調査実績報告書—震災復興調査— 芦屋市教育委員会
- 地村邦夫 1995 「大阪府における古代・中世の木棺墓について」『研究紀要』3 大阪府埋蔵文化財協会
- 辻 康男 2001 「芦屋川・宮川流域沖積扇状地における更新世末期以降の地形発達史と遺跡形成過程—縄文時代後期〜弥生時代前期の堆積環境を中心として—」〔第98回近江貝塚研究会発表要旨・資料〕 近江貝塚研究会
- 辻 康男 2002 「若宮遺跡とその周辺」『若宮遺跡（第3・4・10・16・17・25・31・32・33・34地点）発掘調査概要報告書—若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果—』〔芦屋市文化財調査報告第38集〕 芦屋市教育委員会
- 辻 康男・森岡秀人・竹村忠洋 2001 「六甲山地南麓における沖積扇状地の層序と考古遺跡の形成過程について—芦屋川・宮川流域の事例—」〔第36回低湿地遺跡研究会発表要旨・資料〕 低湿地遺跡研究会
- 天王寺谷勘太夫 1940 「打出史話」
- 東京国立博物館 1956 「東京国立博物館収蔵品目録」考古・土俗・法隆寺献納宝物
- 中川 渉・深江英憲・小川良太 1999 「六条遺跡」『平成10年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 中野政樹 1964 「奈良時代の鏡—東京国立博物館保管の唐式鏡（9）」『MUSEUM』165 東京国立博物館
- 長町 彰 1928 「摂津山芦屋古墳調査報告」『考古学雑誌』9-8 日本考古学会
- 奈良国立文化財研究所 1997 「平城宮木簡」五 解説〔奈良国立文化財研究所史料第42冊別冊〕
- 西宮市立郷土資料館 1998 「紅野芳雄「考古小録」—西宮考古学のパイオニア—」〔西宮市立郷土資料館第13回特別展展示案内図録〕
- 横口定志 1985 「平安期火葬墓の性格について」『生活と文化』研究紀要1 豊島区立郷土資料館
- 橋本 久 1975 「第3章 古墳と伝承 第2節 古墳は語る」『宝塚市史』第1巻 宝塚市役所
- 長谷川 厚 1983 「歴史時代墳墓の成立と展開（1）」『古代』第75・76合併号 早稲田大学
- 花田勝弘 1987 「出迎古墳群・墳墓群発掘調査概要」 柏原市教育委員会
- 花田勝弘 1988 「律令制の確立にみる葬地の変革」『信濃』第40巻第4号 信濃史学会
- 東日本埋蔵文化財研究会編 1995 「東日本における奈良・平安時代の墓制」

- 兵庫県教育委員会 1998 『阪神間都市計画事業芦屋西部第一地区震災復興土地区画整理事業 六条遺跡確認調査実績報告書』
- 兵庫県教育委員会 1999a 『阪神間都市計画事業芦屋西部第一地区震災復興土地区画整理事業 六条遺跡発掘調査実績報告書』（遺跡調査番号 980223）
- 兵庫県教育委員会 1999b 『和同開珎とその時代』『ひょうごの遺跡』33 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 兵庫県教育委員会 2000a 『兵庫県遺跡地図—第1分冊—（発掘調査の手引・遺跡地名表）』
- 兵庫県教育委員会 2000b 『芦屋西部第一地区震災復興土地区画整理事業に伴う六条遺跡発掘調査実績報告書』（遺跡調査番号990233）
- 兵庫県立歴史博物館 2002 『古代兵庫への旅—奈良・平安の寺院と役所—』〔特別図録No43〕
- 藤澤一夫 1956 『墳墓と墓誌』『日本考古学講座』河出書房
- 藤澤一夫 1970 『火葬墳墓の流布』『新版考古学講座』雄山閣
- 藤森栄一 1941 『奈良時代の火葬墓—蔵骨器の形態学的研究—』『古代文化』第12巻3号
- 細川道草 1963 『第9編 芦屋地名考』『芦屋郷土誌』芦屋史談会
- 埋蔵文化財研究会編 1983 『古代・中世の墳墓について』
- 前田 昇 1971 『芦屋の自然環境』『新修芦屋市史』本編 芦屋市役所
- 岡壁渡子 1981 『岡山県下奈良・平安期墳墓に見る二、三の問題』『倉敷考古館研究集報』第16号 倉敷考古館
- 水野正好 1970 『群集墳と古墳の終焉』『古代の日本』5近畿 角川書店
- 南 博史編 1985 『芦屋市寺田遺跡発掘調査報告書』財団法人古代学協会
- 宮川禎一 1991 『宗像市相原2号墳出土新羅土器の再検討—初期印花文陶器の文様系譜』『地域相研究』第20号
- 武庫川女子大学考古学研究会 1984 『兵庫県芦屋市 旭塚古墳—表六甲城山群集墳中の一巨石墳の測量調査とその考証—』（安田博幸・森岡秀人 監修）
- 武蔵 誠・有坂隆道・末中哲夫 1986 『新修芦屋市史』資料編2 芦屋市役所
- 武蔵 誠・橋本 久 1977 『考古編』『宝塚市史』第4巻（資料編1）宝塚市
- 武蔵 誠・松原弘宣 1976 『第二章 奈良時代』『第三章 平安時代』『新修芦屋市史』資料編1 芦屋市役所
- 武蔵 誠・村川行弘 1971 『考古学上からみた芦屋』『新修芦屋市史』本編 芦屋市
- 村川行弘 1970 『芦屋廃寺址』『芦屋市文化財調査報告第7集』芦屋市教育委員会
- 村川行弘・村川義典 1986 『三条岡山遺跡（第4次）』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』兵庫県教育委員会
- 村川行弘・森岡秀人 1976 『弥生時代』『新修芦屋市史』資料編1 芦屋市役所
- 村田文夫・増子章二 1989・1990 『南武蔵における古代火葬骨蔵器の基礎的研究』『川崎市市民ミュージアム紀要』第2・3号 川崎市市民ミュージアム
- 木簡学会編 1990 『日本古代木簡選』岩波書店
- 森 浩一 1970 『古墳時代後期以降の埋葬地と葬地—古墳終末への過渡的試論として—』『古代学研究』第57号 古代学研究会
- 森岡秀人 1972 『考察とまとめ』『八十塚14号墳の測量調査』芦の芽グループ考古学研究会・兵庫県立芦屋高校史学研究部

- 森岡秀人 1973 「向こうの山に群がる黄泉国—六甲南麓群集墳解明への一素描—」『芦の芽』24 芦の芽グループ
- 森岡秀人 1979 「総括—八十塚古墳群の展開と岩ヶ平支群のもつ意義—」『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』〔芦屋市文化財調査報告第11集〕 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1984 「旭塚古墳および城山・三条古墳群をめぐる諸問題」『兵庫県芦屋市 旭塚古墳—表六甲城山群集墳中の一巨石墳の測量調査とその考証—』 武庫川女子大学考古学研究会
- 森岡秀人 1985 「山芦屋遺跡（S3地点）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1992a 「芦屋考古学の先覚者—古岡昭考古資料の寄贈によせて—」『なりひら』Vol.7 芦屋市立美術博物館
- 森岡秀人 1992b 「〔資料紹介〕翠ヶ丘・四ヶ塚出土の須恵器—謎の四ヶ塚の実態に迫る—」『なりひら』Vol.9 芦屋市立美術博物館
- 森岡秀人 1996 「類例少ない駅家跡」『教養の日本史 遺跡が語る古代史』（田辺征夫編） 東京堂出版
- 森岡秀人 1999a 「古墳と古墓の接点—特輯『日本における古墳の終焉から古代の墳墓へ（1）』に寄せて—」『古代文化』第51巻第11号 財団法人古代学協会
- 森岡秀人 1999b 「火葬墓出現期の動向と古代墳墓のその後の展開—特輯『日本における古墳の終焉から古代の墳墓へ（2）』に寄せて—」『古代文化』第51巻第12号 財団法人古代学協会
- 森岡秀人 1999c 「Ⅳ-2. 津知遺跡の官衙的性格」『津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書』〔芦屋市文化財調査報告第34集〕 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1999d 「Ⅱ-2. 津知遺跡の既応の調査（1）津知遺跡第2地点の発掘調査の概要」『津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書』〔芦屋市文化財調査報告第34集〕 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2001 「摂津国菟原郡葦屋郷・賀美郷考証覚書」『考古学論叢』第5集 考古学を学ぶ会
- 森岡秀人 2002a 「摂津・八十塚古墳群と菟原郡葦屋郷・賀美郷の古代史」『八十塚古墳群の研究』〔関西大学文学部考古学研究報告第7冊、芦屋市文化財調査報告第33集〕 関西大学文学部考古学研究室
- 森岡秀人 2002b 「片鱗をみせ始めた六条遺跡と当該調査地点の概括的様相」『六条遺跡発掘調査報告書—芦屋西部第一地区震災復興土地地区画整理事業、清水公園建設事業に伴う六条遺跡（第17・18地点）の事前調査記録—』〔芦屋市文化財調査報告第41集〕 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人編 1980 「芦屋市内埋蔵文化財包蔵地分布地図及び地名表」〔芦屋市文化財調査報告第12集〕 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人編 1986 「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図および地名表」〔芦屋市文化財調査報告第16集〕 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人ほか 1989 「金津山古墳周濠の発掘調査—第2地点における前方部の存在確認成果—」 芦屋市教育委員会・金津山古墳周濠発掘調査会
- 森岡秀人・明尾圭造・和田秀寿 1993 「古墳と伝承—移りゆく塚へのまなざし—」〔特別展図録〕 芦屋市立美術博物館
- 森岡秀人・木南アツ子編 1996 「平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認（試掘）調査—」〔芦屋市文化財調査報告第27集〕 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・後神 泉ほか 1990 「三条九ノ坪遺跡—第2地点発掘調査簡報—」〔芦屋市文化財調査報告第18

- 集] 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 1997 『平成10年度 国庫補助事業 城山18号墳発掘調査実績報告書』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 1999 『平成11年度 国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡(第62地点)発掘調査実績報告書—震災復興調査—』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2000 『芦屋廃寺—芦屋廃寺中核部の発掘調査』『平成12年度兵庫県下埋蔵文化財発掘調査連絡会資料』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 森岡秀人・竹村忠洋編 2001 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図および利用の手引き』〔芦屋市文化財調査報告第40集〕 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷朋世・和田秀寿編 1993 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図および利用の手引き』〔芦屋市文化財調査報告第24集〕 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・村川義典 1996 『摂津国『兵庫県考古学』(村川行弘編) 吉川弘文館
- 森岡秀人・和田秀寿編 1986 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図および利用の手引き』〔芦屋市文化財調査報告第16集〕 芦屋市教育委員会
- 森本 徹 1991 「火葬墓と火葬遺構」『大阪文化財研究』第2号 叢大阪文化財センター
- 森本 徹 1995 「大阪の終末期古墳」『古代学研究』132 古代学研究会
- 森本 徹 1999 「群集墳の変質からみた古代墳墓の成立過程」『古代文化』第51巻第11号 財団法人古代学協会
- 森本六爾 1987 『日本の古墳墓』(復刻) 木耳社
- 安井良三 1960 「日本における古代火葬墓の分類」『日本古代史論義』
- 安村俊史 1997 「河内における奈良・平安時代の火葬墓」『堅田直先生古希記念論文集』 刊行会
- 安村俊史 1997 「畿内における火葬墓の出現」『古墳時代から古代における地域社会』 埋蔵文化財研究会
- 安村俊史 1997 「終末期群集墳の一形態」『柏原市歴史資料館館報』創刊号 柏原市歴史資料館
- 安村俊史 1999 「火葬墓を内包する終末期群集墳—畿内の事例の基礎的考察—」『古代文化』第51巻第11号 財団法人古代学協会
- 山本雅和・阿部敬生・中谷 正 2002 『深江北町遺跡第9次埋蔵文化財発掘調査報告書—葦屋跡家関連遺跡の調査—』 神戸市教育委員会
- 吉岡 昭 1944 『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』(和綴本、『新修芦屋市史』資料篇1に筆写・採録)
- 吉本昌弘 1981 『摂津国八郎、菟原両郡の古代山陽道と条里制』『人文地理』33-4
- 渡邊邦雄 1999 「8・9世紀の古墳祭祀(上)——畿内における横穴式石室の再利用を中心として——」『古代文化』第51巻第11号 財団法人古代学協会
- 渡邊邦雄 2001a 「律令墓制における土葬と火葬」『古代学研究』154 古代学研究会
- 渡邊邦雄 2001b 「畿内における8・9世紀の火葬墓の動態」『実証の地域史 村川行弘先生頌寿記念論集』 記念会
- 渡辺 昇ほか 2001 「六条遺跡」『平成12年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 渡辺 昇編 1998 『三条岡山遺跡—第11地点発掘調査概要—』〔芦屋市文化財調査報告第36集〕 芦屋市教育委員会





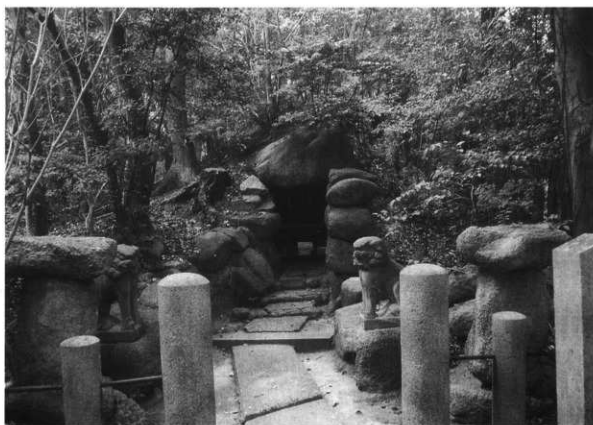
遺跡遠景 1 (大阪湾上空から芦屋市域全体をのぞむ) [芦屋市広報課提供]



遺跡遠景 2 (表六甲上空から芦屋市街地をのぞむ) (芦屋市広報課提供)



芦屋神社拝殿（南から）



芦屋神社境内古墳の現状（南から）



調査地近景（北東から）



調査地近景（北西から）



①調査地現況（北東から）



②調査風景（北西から）



③第1トレンチ（南西から）



④第1トレンチ北壁土層断面（南から）



⑤第2トレンチ（南西から）



⑥第2トレンチ東壁土層断面（西から）



⑦第3トレンチ（南西から）



⑧第3トレンチ東壁土層断面（西から）



①調査風景 (南から)



②調査風景 (南東から)



③調査区全景 (北東から)



④調査区全景 (南西から)



⑤1区西半 (南西から)



⑥2区 (北東から)



⑦3区西半 (北東から)



⑧4区 (南東から)



①5区(南東から)



②6区(南西から)



③7区(北西から)



④SX-01検出風景(南東から)



⑤SX-01検出状況(1)(東から)



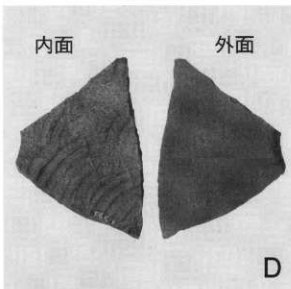
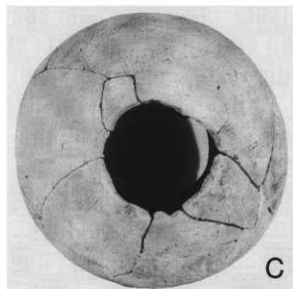
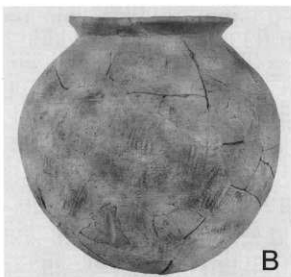
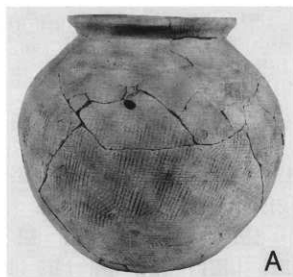
⑥SX-01検出状況(2)(東から)



⑦SD-01検出状況(南から)



⑧SD-01土層断面(北から)



A~C・E
須恵器（甕）
5区南半 SX-01出土
D
須恵器片（甕体部）
2区東半 SD-01付近
出土

A 一外面（表）と小穿孔
B 一外面（裏）
C 一底部穿孔
D 一須恵器片内・外面
E 一小穿孔と外面整形技法



発掘調査開始時の現状（北西から）



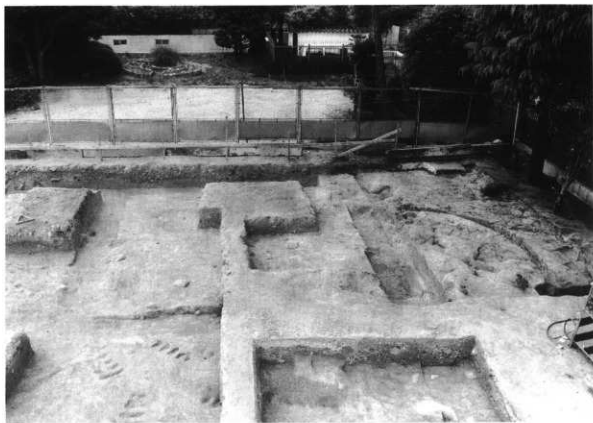
発掘調査表土除去作業開始（北東から）



F区調査風景（南から）



F区調査風景（南西から）



A・D区完掘状況（東から）



B・E区完掘状況（北西から）



D・F区溝状遺構赤化箇所検出状況（南東から）



D・F区遺構検出状況（東から）



E区火葬灰埋納土壌2検出状況（南から）



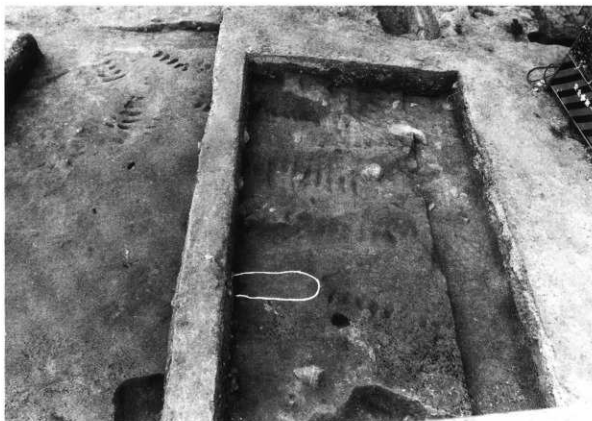
E・F区遺構検出状況 火葬灰埋納土壌2（北東から）



D・E区完掘状況（北西から）



C区完掘状況（北から）



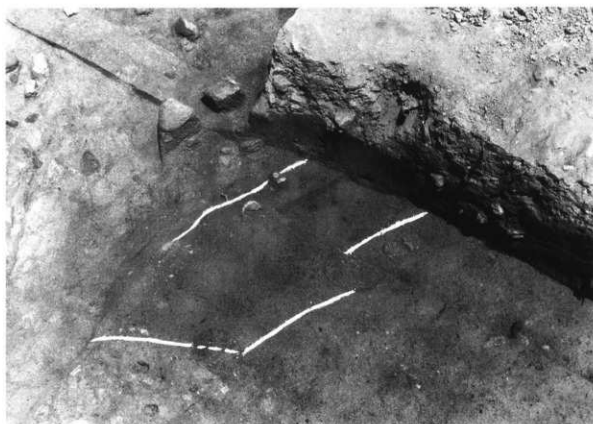
B区完掘状況（東から）



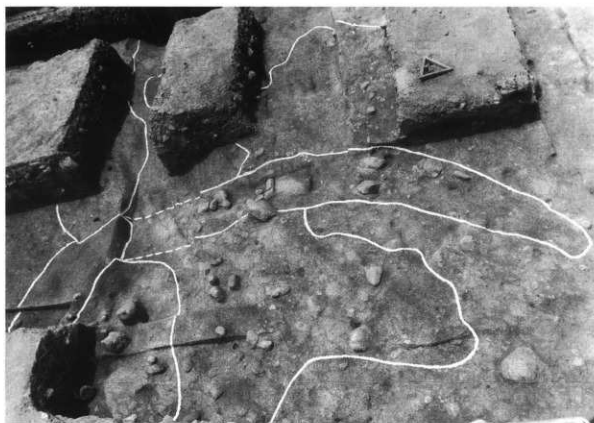
F区赤化箇所検出状況（南から）



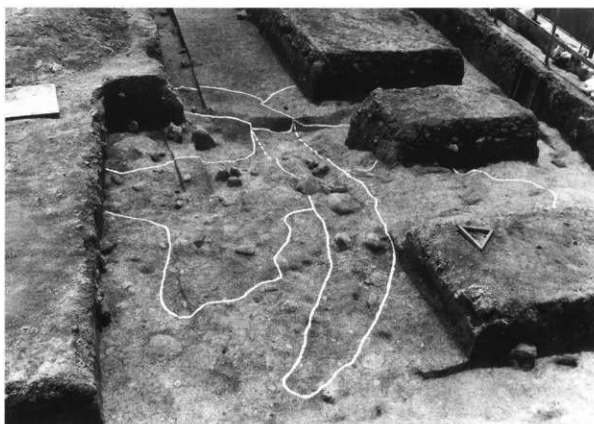
B区地山面断ち割り状況（南から）



F区溝状遺構検出状況（南西から）



F区溝状遺構完掘状況（東から）



F区溝状遺構完掘状況（北から）



F区溝状遺構完掘状況（北から）



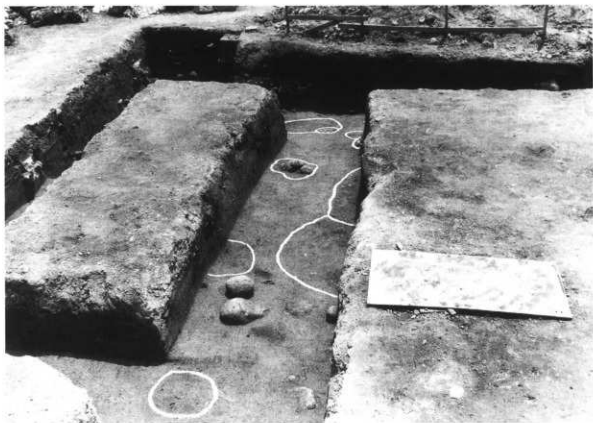
F区溝状遺構完掘状況（南から）



E・G区遺構検出状況遠景（北から）



E・G区遺構検出状況近景（北から）



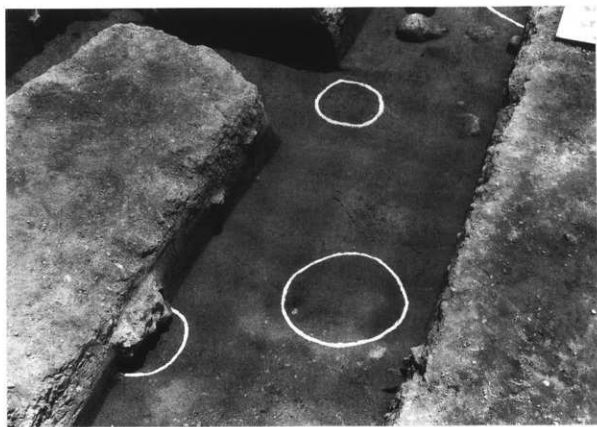
G区遺構検出状況（北から）



G・I区遺構検出状況（南から）



I区遺構検出状況（東から）



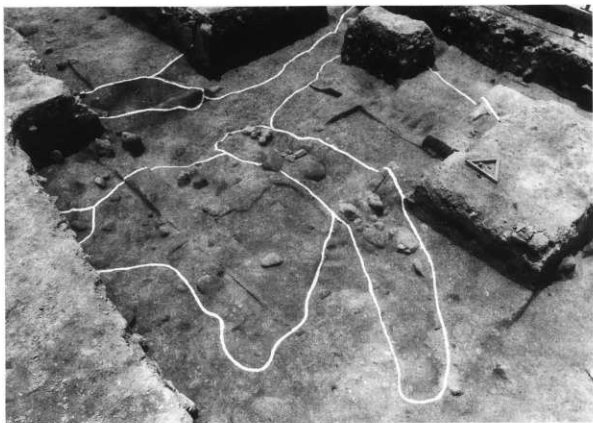
E区遺構検出状況（北西から）



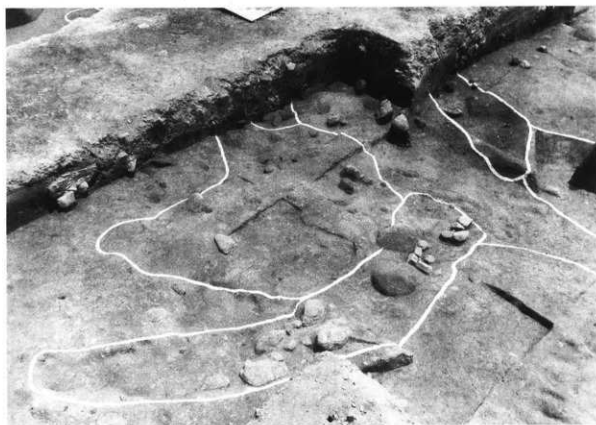
E・G・H区遺構検出状況（北東から）



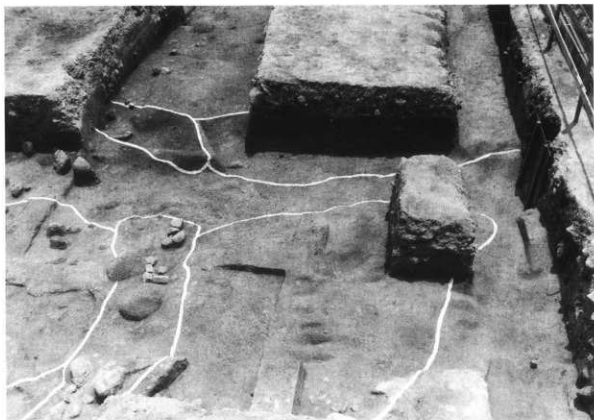
E区遺構検出状況（北西から）



F区溝状遺構完掘状況（北東から）



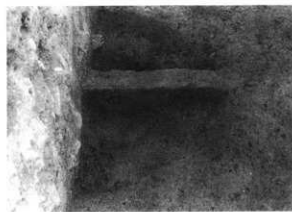
F区溝状遺構完掘状況（北西から）



① F区溝状遺構完掘状況（北から）



② E区土壌1土層断面（北から）



③ E区土壌4土層断面（北から）



④ E区火葬灰埋納土壌1東壁断面（西から）



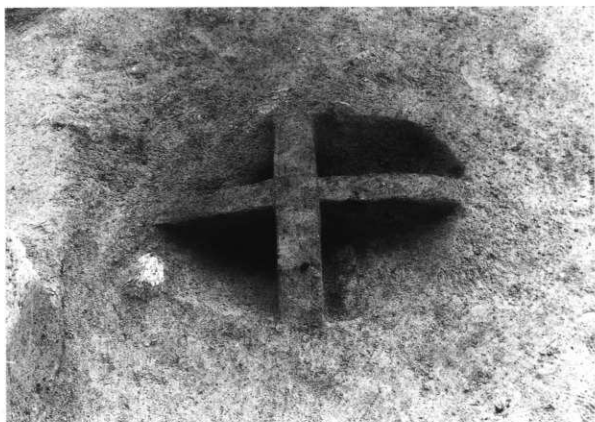
⑤ E区火葬灰埋納土壌2完掘状況（北から）



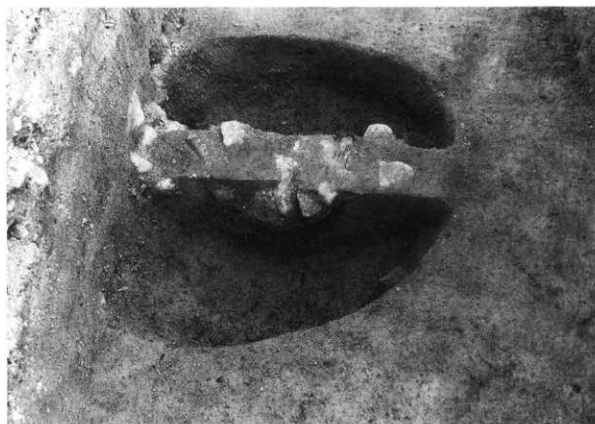
G区遺構完掘状況（南から）



G・H・I区遺構完掘状況（南東から）



E区火葬灰埋納土墳4完掘状況（北から）



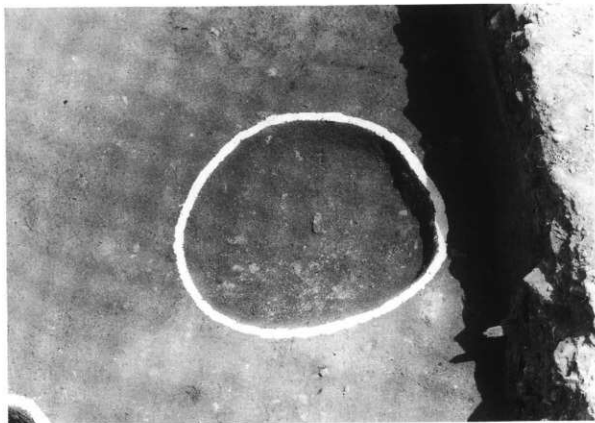
H区土墳5完掘状況（北から）



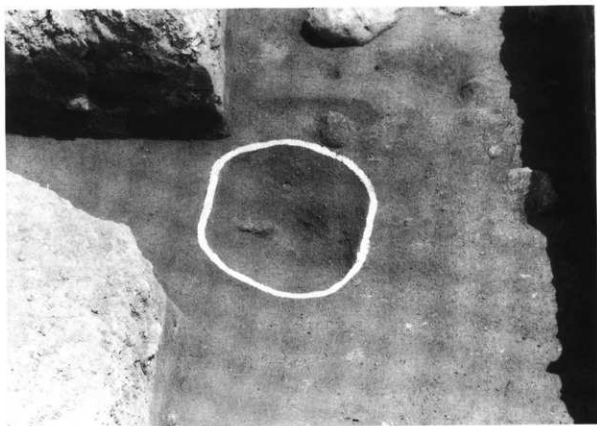
I区古墓2・土壇8検出状況（南東から）



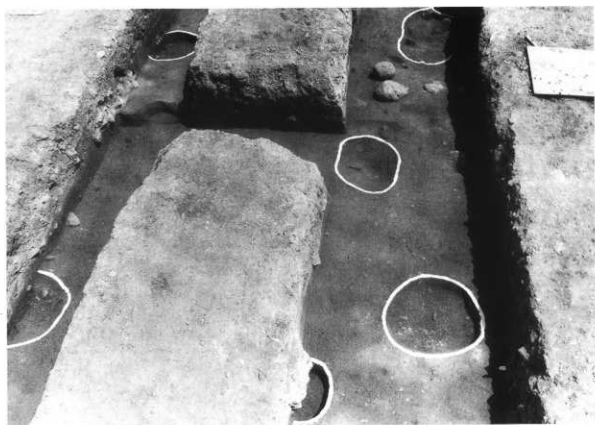
I区古墓2・土壇8完掘状況（南から）



E区火葬灰埋納土壇2完掘状況（北から）



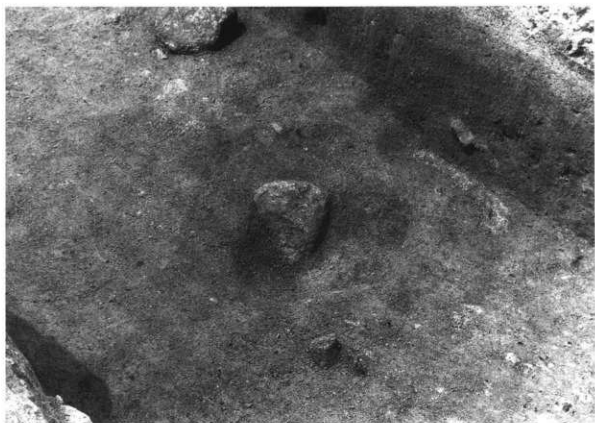
E区火葬灰埋納土壇4完掘状況（北から）



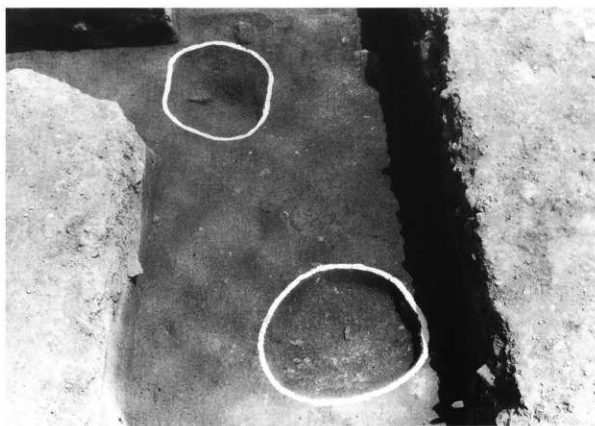
E区遺構完掘状況 (北から)



E・H区遺構完掘状況 (東から)



E区火葬灰埋納土墳3 完掘状況（北東から）



E区火葬灰埋納土墳2・4 完掘状況（北から）



E・G・H・I 区地山面完掘状況（東から）



E・G 区地山面完掘状況（北から）



I 区地山面完掘状況（東から）



I 区地山面完掘状況（東から）



① E・H区地山面検出状況（北から）



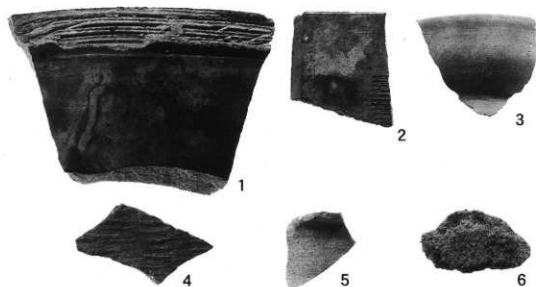
② E・H区地山面完掘状況（北から）



③ E・G区地山面完掘状況（南から）

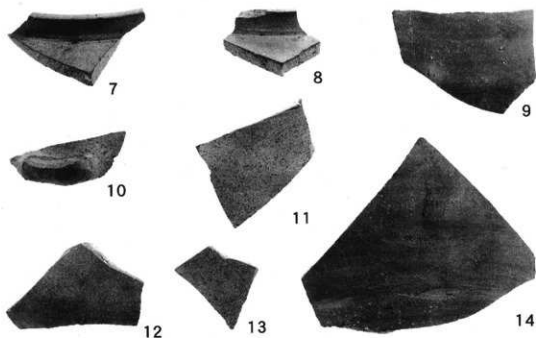


④ I区地山面完掘状況（東から）



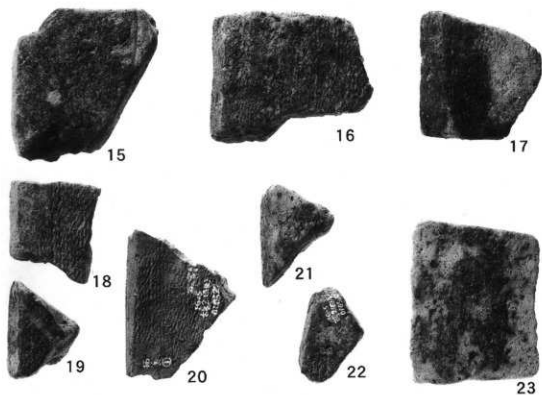
1・2 3層出土
5 土壌8出土
3 石垣掘り形出土
6 火葬灰埋納土壌4出土(焼土)
4 5層出土

発掘調査出土遺物(1)

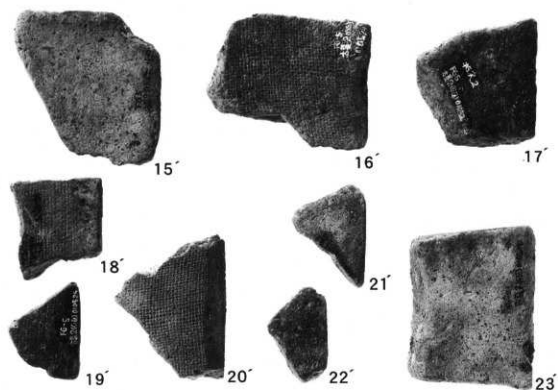


7~14 古墓2出土(短頭壺片)

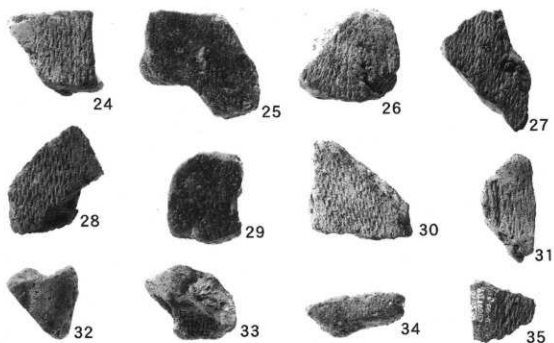
発掘調査出土遺物(2)



発掘調査出土遺物(3) 15~23 古墓2出土平瓦片(凸面)

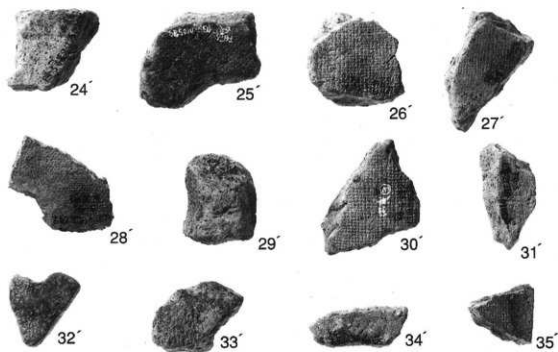


発掘調査出土遺物(4) 15'~23' 古墓2出土平瓦片(凹面)



発掘調査出土遺物(5)

24~34 古墓2出土平瓦片(凸面)
35 古墓1出土平瓦片(凸面)



発掘調査出土遺物(6)

24'~34' 古墓2出土平瓦片(凹面)
35' 古墓1出土平瓦片(凹面)

報 告 書 抄 録

ふりがな	せつつ・ふじがやこぼーふじがやいせきだい5ちてん・こだいかそうぼの ちょうさー							
書 名	摂津・藤ヶ谷古墓ー藤ヶ谷遺跡第五地点・古代火葬墓の調査ー							
副 書 名	平成14年度 国庫補助事業							
巻 次								
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告							
シリーズ番号	第48集							
編 著 者 名	森岡秀人（編集・執筆）・竹村忠洋（執筆）・喜多貞裕（執筆）							
編 集 機 関	芦屋市教育委員会 社会教育部 文化財課							
所 在 地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL・0797-31-9066							
発行年月日	2003年（平成15年）3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
藤ヶ谷遺跡 第5地点	兵庫県 芦屋市 山手町 93-4 番地	28206	FJ-5	34度 44分 17秒	135度 18分 22秒	第1次確認調査 2001年2月13日 第2次確認調査 2001年4月9日 ～4月13日 本発掘調査 2001年4月26日 ～6月29日	地形測量 800.10㎡ 確認調査 100.50㎡ 発掘調査 250㎡	個人住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
藤ヶ谷遺跡 第5地点	墳 墓	奈良時代	・溝状遺構 ・火葬灰埋納土壇 ・古墓 ・土壇		・土器類須恵器 （甕腹片・有蓋短 頸壺）・土師器 ・瓦類		阪神地方の市街地 で初例の古代火葬 墓。関連遺構を セットで検出。	



編集後記



阪神・淡路大震災からちょうど8年の歳月が経過した。市内の復興はまだ目途がたっていないが、人びとの生活は落ち着きを取り戻している。

埋蔵文化財の事前調査は、経済不況の影響で発掘調査量が低下している全国動向とは裏腹に、芦屋市の場合は増加したままであり、発掘現場のない時期は全くと言ってない。

震災後、本市が刊行した報告書も本書で23冊目を数え、民間調査機関が作成した調査報告がさらに2冊出ている。市内の詳細を把握できるのも今が限度といったところである。

本書も民間の援助を受けて発掘調査が遂行され、思わぬ遺構・遺物が出土して正直言って驚いた。藤ヶ谷遺跡はこの調査でこれまでの認識に加え、阪神地方の市街地で初めて出現した古代の火葬墓として特筆に値する存在となったが、それが進行中の発掘現場で速やかに判断できたことが幸いであったと思っている。近年、芦屋を中心とする古代摂津国菟原郡の地域像がにわかに見え始めているが、本書はその歴史と地区の空白部を確実に埋める基本資料として永年 にわたり活用されることになろう。

最後になったが、本調査における喜多調査員の活躍についても記録にとどめておきたい。

(森岡秀人)

(裏表紙カット：Ⅰ区古墓2出土須恵器短頸壺〔蔵骨器〕実測図から、縮尺1/2)

芦屋市文化財調査報告 第48集

平成15年度国庫補助事業

摂津・藤ヶ谷古墓

—— 藤ヶ谷遺跡第5地点・古代火葬墓の調査 ——

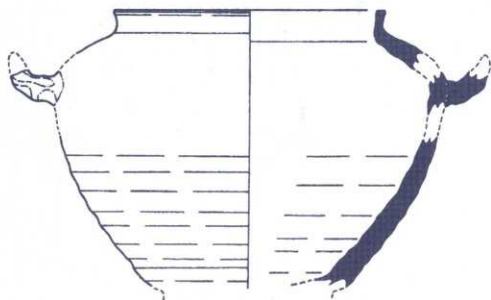
印刷発行 平成15年3月31日(2003年)

発行者 芦屋市教育委員会 社会教育部文化財課
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号
TEL. 0797-31-9066

編集者 芦屋市教育委員会 社会教育部文化財課
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号
TEL. 0797-31-9066

印刷 有限会社 岸本出版印刷
〒652-0806 兵庫県神戸市兵庫区西柳原3番地29
TEL. 078-681-2456

Ashiya Archaeological Record 48



2003.3

Ashiya City Board of Education, Japan

